

山岳時報

時 報

No. 5

1966年5月

京都大学学士山岳会

AACKの動き

「頂上に立つ。長かったこれまでの全ての苦勞が報いられた。できることなら永久にこの雪の上に寝てしまいたい。下山の困難がなお残っているのに、ある張りつめていた神経が、快よい弛緩を始める。峰々の広い海が広がっている。その真中に俺は立っている。この山は俺の山だ。斗いつづけてきた山が、今やただひたすらに求めつづけて、いま自分のものになった相手になる。お前は俺のものだ」

未踏の山に立つ者の心には、多かれ少なかれこういう感情が湧く。花嫁の峯の頂きをそっと抱いてやつた藤平正夫の心の動きを、わたしは自然なものと考える。登頂のよろこび、それはまったく個人的な、恋の成就にも似た、充足の悦びである。森林限界をこえ、氷と岩だけの無機的世界へ、さらに宇宙空間へと、人間の生活限界のフロントの拡大にむかいながら、人はつねにそこに、人間のあたたかみを求める。8000mの高峰がほとんど登られてしまったいま、山は冷たく、入ることを拒む、敵対的な地域ではもはやない。人里離れた溪谷、白い輝く雪渓と黒い冷たい岩とからなる世界。われわれは生存限界のフロントを拡大しつつ、これら新しい冷たく厳しい自然を人間のうちにとりこまれた自然として、附加する。こうしてわれわれは、新しい自然と交わり、新しい交わりからのしみを発見してきた。冷たい空気の薄い高所でも、人間は独特の自然との交わりをとり結び、新しい情感の世界を展開するようになるに違いない。

個人のライフ・ヒストリの中での高度限界への挑戦が、同時に人類史の中での高度記録への斗いであったような、幸福な時代はもはやすぎ去った。人類史的使命にもえた行為は、それが莫大な国家予算と技術陣に支えられた、華やかなスター的宇宙飛行士でなく、たとえ登山家であっても、それだけである限り、それはわたしの求めるところではない。使命感の犠牲になる心配もなく、センセーションの渦にまきこまれることもなくなって、これから、個人としての山登りは、一層その内容を充実させるのかもしれないとわたしは考えている。

戦後20年を経たいま、宇宙開発は目ざましいスピードで進み、国際関係は思いがけぬ局面へと進みはじめた。アジアの国々は、たえまない動揺の中にある。65年度のAACKの活動も、この国際情勢の動きと決して無縁ではなかった。カンチェンジュンガ遠征計画が延期のやむなきに到った事情は前号ですでに報告した。そのため2月には、1963年に一度計画したカラコラムのK12計画の可能性を探るため、パキスタンのカラコラム・クラブとの交渉をおこなった。カラコラム・クラブのハイヤットから、当クラブとの共同の形でK12遠征隊を組織したいという申し出があった。この申し出を理事会は受け入れることに決定、4月には藤田和夫を隊長とするK12遠征隊の隊員選考までおこなわれた。そしてパ政府からの正式の許可を待った。ところがその後の交渉は当会の再度の打診にも拘らず、遅々として進まなかった。そして5月下旬、カシミールを中心として印パ国境全域にまでひろがる印パ紛争がはっ発した。計画の見通しは全くゼロに帰した。65年のカラコラム遠征は望めない。そこで、66年度の登山申請を出すことにし、6月下旬、テラム・カンリを第一候補とするアプリケーションが提出された。しかしこれも年末に正式にパキスタン政府から、日本外務省宛の66年度の登山不許可の公文書を受けとったことによって、可能性はなくなっている。

またネパールも、インナ・ラインの登山禁止令が出された。カンチェンジュンガ遠征計画は、すでにネパール政府にロイヤルティの一部を支払ってあり延期されたものであった。だから登山禁止令が解かれたならば直ちに許可をうける優先権を本会は確保しているはずのものである。9月下旬、会員薬師義美は、泊山岳会の組織する中部ネパール踏査隊の一員として、約半年の踏査旅行に出発した。会はかれに依頼し、この優先権の確保を確かにするようつとめるほか、文書をもってその確約をとりつけることに努力した。

現在この禁止令がいつ解除になるか、その見通しは立っていない。現在、いじょうのような事情で、ヒマラヤ・カラコラム両地域への遠征の見通しは全くついていない。そのかわりに南極をはじめ、旧大陸の他の地域への目がそそがれる気配にある。66年度の展開が期待される。若手新会員の積極的協力を望みたい。(谷)

目次

AACKの動き	1
AACKの回顧と展望	
AACKは解散すべきか	酒井 敏明…2
AACKの30年—その3—	岩坪 五郎…4
AACK会員の足跡	平井 一正…8
海外の記録	
ガネッシュ雑話	樋口 明生…16
ダッハシュタイン	広瀬 幸治…25
木曜講座—その5—	
スキャン・カンリ	高橋 旨象…26
繊維装備の基礎知識	安田 武…28
新刊紹介	
Re1 Peak by M.Slessr (1964)	田附 重夫…42
会員紹介	
安田 武	平井 一正…44
樋口 明生	広瀬 幸治…44
AACK蔵書目録(その3)	

—この表紙の「AACK」の文字は、カスティラオによってイタリア語に訳され、セピリアにて1503年に出版されたマルポコーロ著「東方見聞録」より採写したものである。
—京都大学図書館蔵—

AACKの回顧と展望

AACKは解散すべきか

酒井敏明

本誌第4号に「AACK解散論」と題する景気の良い文章がのっていた。AACKの使命はおわり、今やその存在理由は失われたから解散しろというのがその内容かと思われる。これは局外者の無責任なヤジウマ的文章ではなく、筆者の本多勝一氏は、解散後純登山団体と純学術探検団体の二つを創設せよと提案し、「近來にない建設的意見」であると自負している。

AACKはきらいだからやめると本多氏個人が紙上を借りて退会届を出したということだけなら、どうぞ随意にというほかないのだが、無意味な会はぶつぶせといっているのだから、またそれが責任ある建設的意見である以上、AACKは二つの新団体に発展的解消しないものでもない。私などは彼の論旨に多少同調する点を見いだすが、なおAACKは存在理由をもち、解散は無用であると考えているので、ここに愚見を發表させてもらうことにしよう。

いったいAACKとはなんであるのか。1930年に結成された京都学士山岳会は、残り少なくなった世界の空白地域を探検し、処女峯に登頂しようという旗印をかかげた少数の同志の集まりであったが、1959年に設立された社団法人京都大学学士山岳会は会員数も多いし、会の Sein および Sollen について、おおかたの見解はかならずしも一致しているように思われない。その Sein はなんであるのか。

空白地域を探検と処女峯の登山こそ唯一最高の目的で、それ以外のすべてのことがらは目的を達成するための手段でしかありえないと考える人が今なおいるかは知らないが、この立場に懐疑の念を禁じ得ない人がいることはたしかであろう。これほど厳密でなくとも、パタゴニアやヒンズークンに恰好の山があれば、たとえ処女峯でなくても登りに行きたいと考える人は多いであろうし、植物学や人類学の学術調査をするためにアンダマンや西イリアンに行く準備をしている人はいるだろう。探検学と登山学を文献的に研究するのが趣味で、異教の土人をおどすかして荷物をかつがせ、人間の食べものか家畜のえさかわからぬようなものを食ってヒルやダニと共同生活するのもってのほかと思っている人だっているかも知れない。昔の山仲間といっしょに飲むことだけが楽しみで、ここ何十年も山登りとは縁の切れた生活をしている会員は、あまり少くないと思われる。もっといろいろな種類の人がいるだろう。AACKとは何んであるかということはずか

しいが、いろんな人間がより集って作っている会であることはまちがいが無い。そんなヌエのように正体のわからない団体であるが、戦後4つのヒマラヤ遠征隊を組織して送りだした(社団法人になってからでは3隊)実績をもっていることはまぎれもない事実である

Sollenの方は人によって大きく意見が分かれるであろうが、少くとも、公的には、社団法人京都大学学士山岳会定款に、そのあるべき姿が規定されていると考えざるをえない。

会の目的および事業は第二章が次のごとく定めている。すなわち第四条「この法人は、学術的基礎にたつ健全な登山ならびに探検を振興し、山岳に関する研究を奨励普及し、あわせて会員相互の連絡研修をはかりもって文化と学術の発展に寄与するとともに、自然尊重の精神を高めることを目的とする。」前条の目的を達成するために行なう事業は、第五条にかかげる次の6項目である。「1. 山岳および登山に関する学術的調査および研究。2. 一般社会に対する健全な登山の指導奨励ならびにこれに必要な研究会、講習会および展覧会等の開催。3. 国内、国外における登山および探検に対する企画および協力。4. 山岳登山に関する図書、機関誌等の発行。5. 目的を同じくする国内および国外の団体との連絡ならびに情報の交換。6. その他前条の目的を達成するために必要な事業。」

以上要するに、学術的基礎にたつ健全な登山ならびに探検を振興するのがAACKの目的であり、この目的に賛同する者がAACKの会員になっているわけだまあ妥当なところだろう。どこに力点が置かれているかわからぬ、迫力のない文章かも知れないが、必要なことは残さずあげるという周到な用意をもってつくられているという印象は強い。果敢な行為者は少数はいるし、書斎派研究者もいなくはない、親睦団体の幹事役がうってつけの人もいるのがAACKの実状であろう。何もしていない会員が多いと見る人があるかもしれないが、彼等が第五条第六項にかかげる「その他の事業」をおこなっていないと断言できるかどうか。

それはともかく、定款に示されたかぎりでは、空白地域を探検と処女峯の登頂を旗印としてかかげた、1930年創立当時の鋭い野心満々の姿勢からはかなり後退していることは注意されねばならない。監督官庁である文部省の方針が、海外遠征登山と探検を本会が主催団体として実践すると設立趣旨にうたうこ

とを許さなかったから、定款では、登山ならびに探検を振興することを目的とし、登山および探検に対する企画および協力をおこなうという、苦心の文章ができあがったのだと聞いたことがある。それにしても、処女峯の登頂という明文はないのであり、このことに不満のむきは、それが言外に含蓄されているのだと解釈するより仕方がないのだ。この姿勢の後退ないし変化は法人を認可する役所の内規がなに知らぬが外的事情による制約に強いられたことではあるが、背景をなす時代の変化を無視することはできないであろう。

京都学士山岳会が結成された1930年といえば、それまでに登頂された7000m峰はトリスルの1座だけ、8000mのジナイアンツに対する攻撃は、エヴェレスト3回、カンチエンジェンガも3回を数えるが、K2はコンウェイとアブルッジが各1回試登し、ナンガパルバットはマンズリーが遭難死して以後ふたたび訪れるものがなかったという時代である。戦後、それもネパールの門戸開放以後のヒマラヤの盛況ははやいだけ野暮であろう。ヒマラヤ各地域に活躍する遠征隊の数は、前世紀はじめから1929年までの130年間に96隊であったのに、1930年代に72隊、1940年代は世界大戦のため51隊に減ったとはいえ、1950年代には173隊の多きに達したのである。猫も杓子もヒマラヤへというこの時代に、処女峯の探検登山を唯一最高の目的にかかげる愚を避けたのは当然であって、野心的かつ尖鋭的なパイオニアを自認した同志の集まりであったAACKは、社団法人の発足と同時に消滅したと考えるのが正しいであろう。いつまでも亡霊を背負うべきではない。親切に本多氏が提案している登山と学術探検の二団体が創設されることはなかったが、両者ともに包含する構想は新しい京都大学学士山岳会の設立趣旨に盛り込まれている。

古き皮ぶくろに新しい酒は盛られるのであろうか。その酒がまったく異質の二種の成分を含み、一つは薄い膜となって表層に浮かび、他は濁ったかすとなって底部に沈澱するのは救いが無いが、異質の部分が作用しあって独特の豊厚、うま味をつくりだすことができるとすれば、こんなに望ましいことはない。私は理想だけをのべているのではない。AACKには学術探検家として一家をなす人が多いし、一流の登山家はばかりながら少くはない。しかしながら両者を独立させることによって、どれだけのプラスが生じるであろうか、私ははなはだ疑問に思う。探検家としての業績登山家としての業績はあくまで単一の味しかもたないといつてよい。それぞれの味を濃くすることは両者の独立によってあるいは可能となるかも知れない。日本に純学術探検団体がいくつあるか知らない。沢山はないけど少しはある。純登山団体、これは掃いて捨てるほどあるだろう。AACKを「発展的解消」させて、これらと同じ性格のものをあらたにつくりにこれ

だけ意義があろうか。それも単味と単味をあわせて1プラス1イコール2以上の、3にも、4にも、5にもなる、豊厚なうま味をつくる可能性を棄ててまで、分離独立することには、私はにわかには賛成しがたい。単一の味を濃くすることなら、今までAACKの枠の中でも、りこうな、あるいはずい人はやってきたのである。

以上は理想論または大義名分にたつ分離独立反対論であるが、実践面ではどうであろうか。スポーツ登山についていえば、それが人類の文化史上の画期的な事業であったり、国際親善を深め世界平和に大きく貢献するものであったりすれば話は別だが、そうでなしに個人の登高欲に発しその満足におわるものであれば、それは他人の世話にならず自分の力で、また自分の財布でやるべきであると考えるのが世の大勢であり、私は賛成である。その場合、志を同じくする少数のグループが結成されるのであるが、これは個人の行為であり、個人とともに生まれ、個人とともに消失する非歴史的存在とみなしてよい。こうした同好会の立場を押しすすめると歴史的有機体としてのAACKは無視され、その存在理由を問われることになるが、このときものをいうのが、「山岳に関する研究を奨励普及し、会員相互の連絡研修をはかる」という定款の文章である。過去の蓄積を利用することによって同志グループの企画は実行にうつされることが容易になり、同志グループの得た成果は会の財産として継承、蓄積される凡百の山岳会のうち遠征登山の実践において十年ほどの歴史をもつものすらあまりないのは、個人の主義主張が強烈厳格にすぎ、個人とともに消失するからと思われる。まんべんなく、いべきことをすべてやりこんであるが、アクセントを欠くAACKの定款は、一面において会の抱擁力を大きくし、歴史的存在としての生命を永くたもつ可能性を残すための必須の条件をみたすものとするのは、勝手すぎるであろうか。

今までAACKは登山と探検の二重性格を、しばしばずいといと評されるくらいにうまく利用してきた。つねづね衣の下から鎧がのぞいていけば、並の坊主よりは強いだらうと警戒させて敵の戦意をそぐ利点があり相手悪しとみたら聖域に閉じこもり念仏三昧という寸法である。理想は高きにこしたことはないが、理想にのみ生きて実践の敗残者になるよりは、第三者の評価はどうであれ主体の実践を尊重する傾向がわれわれの仲間にある以上、衣と鎧の重ね着の利点はこれにかかるしく乗るべきではなからう。分離独立した2つの会から別々に会費をとられるよりも、経済的負担が軽くてすむこと、いうまでもない。

「AACK解散論」の趣旨が現在のAACKの活動の低調を非難することにあつたとすれば、私もある程度同意したい誘惑にかられる。しかし、AACKの活動のあるべき姿とはいかなるものなのか。300名の会

員が打って一丸となり、総力をあけて取り組む仕事は今のところないかも知れない。近い将来そういう目標があらわれるのかどうかは、意見の分かれるところであろう。崑崙や南極の山をどうするのか。この方向の発展に対する準備として不十分ながら研究が一部でおこなわれていることは付記しておきたい。こうした活動がさらに盛んになることは望ましいことであり、今後の会の事業の布石として必要不可欠のものかも知れない。京都在住者を中心に、集まりやすい一部の会員がやっている木曜会ではこうした研究活動を続けているから、そこへ多くの会員がなんらかの形で参加されることは、手近な一つの方法であろう。新しい資料や情報を教示されるなり、日頃のウンチクの一部を披露される会員があれば、おおいに彼らは歓迎するにちがいない。許可がおりていながらキャンセルになったカンチェンジュンガ南峰の登頂計画についても、ネパールの事情が好転すれば実施にふみきる状態にあるらしいから、そんなくならないことはやめるといふ反対意見をも含めて、会員の声をもっと強く聞こえてくる態勢をつくることは考えられねばならないのであろう。

しかし大勢のおもむくところ、外国の山に登りたければ、自分で金を工面して登れという風潮がすでに主流を占めつつあるとすれば、そういう同好の士の企画

AACKの30年 —その3—

岩 坪 五 郎

AACK再建まで

1945年8月15日、日本の全軍隊は完全降伏した。敗戦と共に、AACKの会員も一挙にその活動舞台を失ってしまった。会長郡場はシンガポールから、敗戦直前まで大興安嶺蒙古、などで探検の手をゆるめなかった、今西、加藤、中尾、梅棹、和崎らは、中国大陸からつぎつぎと引揚げてきた。昭和20年暮のことである。しかし内地にいた者も、引揚げてきた者も、皆、衣食を得るのによろやくであった。近代文化の産物である登山や探検を行うにはとうてい至らない、最低の時期がしばらく続く。

しかし一方、京大の西部構内、旅行部の部屋には、すでに京都大学山岳部なるものが、誕生していた。伊藤洋平、藤平正夫、舟橋明賢らがその中心人物である。高等学校、大学を通じて、きびしい戦争中も動員の合間をぬって登山を続けた若い彼らには、登山の再開は簡単であった。当時、旅行部のBOXは彼ら以外は殆んど無人の状態であり、旅行部の先輩たちと共に語り共に登る機会を彼らは殆んどもたなかった。また彼ら

に対する協力ないしは後援というのが、AACKの主要な活動になってくるのかも知れない。これこそ定款に照らして、ビター文かけ値のない、この法人の事業の一つであり、「この法人の目的に賛同し、会費年額五百円を納める者」なる会員から、AACKをおつおせという声があがることの非を論理的に証明していることになるのか。

本多氏が定款第四十一条「この法人の解散は、理事会および総会において、おのおのの四分の三以上の議決を経、かつ、文部大臣の許可を受けなければならない。」にしたがってAACK解散にもちこむべく努力中であるが、第四十条「会員で退会しようとする者は理由を付して退会届を会長に提出しなければならない。」にしたがって、すでに手続きとったか、あるいはまた、定款というやつは優等生の作文といっしょで、ソツもなければ迫力もないけれど、要するにどんなことをしてもよいというのだから、毎年五百円づつ払いながら、もう少しAACKにおける人間の研究でもやってみようと思えるかは、私の知ったことではない。

そういうことをしてよいものかどうか知らないが、差し支えなければ、定款の全文を毎号時報に載せておくことを、私は編集者に提案したい。

自身も、それぞれの高等学校のカラにたてこもりがちで、強い団結力があるともいえなかった。旅行部の先輩達も、自分たちが生活に困きゅうしているとき、突如として出現した彼らに、よい顔はしない。

こうした先輩たちの白眼視のなかにあつて、伊藤はなんとかしてどこかへ行きたいと考え、こつこつと、今西らの門を叩いた。また鈴木信は、若い彼らをまとめ、AACKの将来を育成しようとして努力した。戦後のAACKのヒマラヤでの活躍について述べる時、この二人の努力を見落すことは決してできない。

AACKはここでまた、その1、で北村が述べた雑種強勢の持ち味を発揮する。1951年の夏、中尾・梅棹らと共に伊藤・林一彦らの懇請をうけた今西は、木原を動かし、戦前のK₂の仇を報ずべく、ヒマラヤへの第一歩を踏みだした。戦後ネパールは門戸を開き、50年すでにエルゾークは人類最初の8000m峰登頂を物にした。今やちゅうちよすべき時ではない。その年の秋、直ちにAACK再建総会が、人文科研本館で開かれた。桑原が再建委員長、工業が事務局長となり、木

原が会長にえらばれた。

AACKの過去をふり返ると常にそうであるが、意志が働き、同志が集り、いよいよ実現というときになって、急に組織が作られる。組織が常にあつて、仕事をしており、それ自身の目的として事業が行われる、いわゆる役所の事業のような形は、AACKが社団法人となつてからも殆んどとられない。組織とはうまく利用すべきものであり、それに個人が使われるほどつまらんことはない、みな考えているようだ。平素はみな何事もないように、それぞれの職務についているしかし、これだけでは遠征はできない。星は学問、ヒマラヤは人目を忍ぶ夜のわざ、である。夜のわざがだんだん熱してくる。やがて突如として旗上げののろしがあがり、ゲキがとぶ。直ちに仲間が呼応し、たちまちごとな作戦がくりひろげられる。皆が遠征とはそんなものだということを承知しているばあいのみ、それが可能であるのだ。この常に機をうかがう野武士のような、しゅう念深さと団結力、これがAACKの活動を続けさせてきたのでなからうか。

AACK再建の総会もひとえに、マナスル攻略のための陣容固めに他ならない。同年の暮には、インド科学会議に出席する木原に同行して、西堀はインド、ネパールに飛んでいた。

マナスルの波紋

1952年5月、待望のマナスル登山許可が来た。しかし大紛争の末、すでに計画は日本山岳会に引渡されていた。この間の事情は徳岡孝夫著「ヒマラヤ」—日本人の記録—(毎日新聞社)にくわしい。同年8月、今西を隊長とする踏査隊が出発。中尾、林が京都から参加、人のフンドンではあつたが、AACKはここに始めて、ヒマラヤの氷河の上にとつた。今西隊は単にマナスルの偵察だけを目的とすることなく、この始めて踏み込んだ地を、できるだけ早くわが庭にしようと、どん欲に歩きまわつた。

三田幸夫氏のひきいるマナスル第一次隊は58年出発登山隊に加藤、科学班として中尾、川喜田が参加した。今、考えてみるに今西踏査隊も第一次隊も当時の一流のクライマーを集めている。それにしては、アンナプルナⅣの試登といい、マナスル本隊の登はんぶりといい、少し情けなくはなかつたか。踏査隊は、これが主目的でないし、いくら快調にすすんでも登頂するだけの日数はなく、ヒマラヤでの登高のピッチを得るだけでも収獲にはちがいない。しかしすこし退却が早すぎはしなかつたか。もうちょっとがんばればなかつたか。マナスル隊は第9キャンプまで作つて、まだ頂上にとどかない。もちろん、人々は最善をつくしたのだろうし、またその時、退却しなければ、遭難がでたかもしれない。先輩たちの過去の行動を批判するのは、気持ちのよい事ではないが、歴史という立場から、すこし考えてみる。

まずヒマラヤの高度影響が分らなかつた。はじめはしんどうでも、二回目からは楽になるということが、まだ自分たちのものになつていなかつた。それでキャンプの間隔が短かくなってしまった。始めてのヒマラヤで、こわがりすぎたのだろうか。次に隊員の思想の問題だ。このころの人たちは皆、天皇陛下のおんためにか、せわになつた先輩のためとか、母校の名譽のためにか、とにかく……のおんために、で大きくなった人々だ。だからひとつの大学の山岳部のOBでまとまると、めっぽう強いのだが、あちこちから集まると、一時的であるにせよ、協同というものがとりにくい。エルゾークの隊のように、気ままにけんかしながら、それでいて、分担した責任は果すということがなかなかできなかつたのではなからうか。始めの問題はいろいろの経験のゆずりうけで、だいたいものにできたようだ。1964年京大の現役隊がポストモンスーンに、あっさりアンナプルナ南峰(7250m)に登頂してしまつたことからも判断される。しかし、後の問題ははまだ解決したとはいえない。知識や装備は追いつき追いついても、ヨーロッパの個人主義にはまだ到達できないのだろうか、それとも、それは日本人には向かないのだろうか。どうも今日に至るまで、そういう意味で、成功した隊は少いようだ。

さて本隊は失敗したが、科学班の二人は、約2ヵ月ブリガンダキ、ズード・コーラ、セルゲン・コーラ、カリ・ガンダキと大きく、調査の旅を続け、今西踏査隊の範囲を含めると、殆んどネパール中部全域にわたつて、調査の足跡を残した。彼らの研究はまとめて、英文3部作として、F.F(京大生物誌研究会)から発行された。これは未だに、ネパール研究のバイブルとして、全世界から、尊重されている。

登山のほうは、日本や欧州アルプスでの経験が不成功に終わったのに、学術探検が成功を収めたのはなぜだろうか。彼ら二人が優秀であつたといえ、それまでだが、他に原因はなかつたか。彼らは南部のしめつた熱帯的地域はボナベ島で、同じくしめつた温帯から高山帯に至る地域は日本で、乾燥した地域は、蒙古で、だいたい似たような経験をしている。したがって、始めてとはいつても、彼ら学者にとっては、そう異つた世界ではなかつたのかもしれない。それとも科学者の対象に対する目のほうが、登山家の山に対する目よりも普遍性をもっているのだろうか。あるいは、後に述べる中尾情報など考えるとき、科学のほうで登山よりその結果に対する許容誤差が大きいかもしれない。それに登山のほうは趣味の問題だし、学術探検のほうは彼らの商売だ。うちこみ方もちがつたのだろうか。

この年、世界の最高峰エベレストは登頂された。それは登山におけるひとつの終極であり、また新しいヒマラヤ時代のはじまりでもあつた。

アンナプルナ突撃隊

話がAACKの歴史からそれてしまっていて申しわけない。マナスルにいけなかったAACKの若手は、独自の計画を実行すべく、日夜努力を続ける。52～53年の冬、伊藤は現役山岳部をひきいて、冬期知床半島初縦断に成功する。それは彼らのヒマラヤに対する、デモンストレーションであった。

53年5月、マナスル科学班の中尾からの情報をもとに、ものすごい勢いで、アンナプルナ遠征隊が送りだされた。

ひと口でいうなれば、この隊は最初から最後まで、突撃隊であった。それも不運な突撃隊であった。敗戦後8年、生き残りの特攻隊の強者たちが、一丸となってナグリ込みをかけたようである。中尾情報の誤りを発見、アンナプルナⅣに転進し、決死の奮闘を試みたが遂に剣折れ、力つき、無残な敗北に終わった。誰も散華しなかったのは、ほんとうに幸せであった。

この遠征隊の隊員構成をみると、あらゆる点で実力第一人者と自他共に許す隊長、3人の一匹狼、それに2人の若手となっている。2人の若手の受けた、肉体的、精神的痛手がもっとも大きかったのは、彼ら自身の性格、体力によるところも大きいだろうが、今後の隊の編成に充分考慮されねばならない事であろう。特に戦後の若手たちの間に、批判・反省を基調とする自主的・民主的な行動方法をつちかわせた、有力な男として若手の信望あつかった藤村が、この遠征後、沈黙を守るようになったのは、まことに残念なことである。

この遠征の失敗は、AACKの登山活動に大きな影響を与える。スポンサーはつきにくくなり、若手会員の一部にヒマラヤは恐るべきところだ、との印象を与え、また古手会員に、登山の成功に対する危機感を植えつけてしまった。再度のアンナプルナⅣ、アンナプルⅡ、ドーラギリ山群、カンジロバヒマールetc. etc.と数多くの計画が若手より提出されるが、委員会でも拒否され、或いはスポンサーが得られず、ヒマラヤ計画サイの河原が出現した。

55年はAACK創立20周年にあたる。これの記念に総力をあけた事業をやろう。その企画係として、今西(錦)、今西(寿)、鈴木の3人よりなる企画委員会ができた。シアチェンからシムシャルまでカラコラムをひとなめにしてしまうという計画である。シアチェンでサルトロ・カンリに登ろうという。しかし前述したように、アンナプルナ失敗の傷あとと未だいえず、四手井、鈴木、近藤、林、山口克、脇坂誠などが、がんばるが、もうひとつテンポはあがらない。とうとう今西は学術一本で行くことに切り換えてしまった。F.Fが中心となり、京都大学学術調査隊(KUSE1955)ができた。54年すでにKはイタリア・デジオ隊によって落ちている。

なぜ登山班は成立しなかったか。結局、いこうとい

う人達の層の厚さがたりなかつたのだ。戦後すぐ京大山岳部をつくった連中は、アンナプルナで、だいたいひと通りまわってしまった。彼らは、今や生活の手段や家庭を守るのに忙しく、遠征まで手がまわらない。新制の大学をでた連中の層は未だ薄く、前記の若手推進者たちは、じだんだをふみながらも、カラコラムを見逃してしまった。別の立場から端的に言えば、カラコラム計画は学術一本のほうが実現しやすいと、今西はソロバンをはじいたのである。もうけの少ない登山班を今西はソロバンからおろしてしまった。ここで武士・町人論争がおこった。56・57年と、山岳部から分れてできあがった、探検部は身軽に55年隊の隊員藤田和夫、松下進を隊長としてでかけていったがAACKの若手はなお58年まで脇坂、山口らの努力は実らず低迷を続ける。遠征への気運は、マツクイムシ(マツカレハ)のような害虫の大発生に似ている。彼らは、おとろえているときもあるが、決して絶滅はしていない。その環境がだんだん彼らに適するようになってきたとき、なにかのきっかけで、急に大発生をおこす。その大発生の規模や、頻度を規定する重要な要因として、伝統とか、その社会の構造とかがあけられよう。

チョゴリザ以後の幸運

58年木原に代って、会長となった桑原を隊長としてアンナプルナ以後5年めに、AACKの主催する遠征隊ができあがり、チョゴリザの初登頂に成功した。この山はルートが複雑なため、アブルツ公、ヘルマン・ブールの記録があるにもかかわらず、そのルート・ファンディングに、そうとうなもたつきをみせた。しかし、ほめられるべきは、登頂と前後をして近くの二つのピークに登ったことと、その後平井一正、芳賀孝郎の2名がステステ・サドルに登り、中央アジアの南端をかいまみるという枝出しを、殆んど食料の残っていないときにやったことである。この枝出しはパキスタン政府からいられ、あとのサルトロ許可のおくれた原因のひとつになったともいわれるが、登頂後の余力をふりしぼっての意欲は賞賛に値するといえよう。ただその後、次にサルトロをやる事を、殆んど当然と考えながら、そのための交渉をパキスタン国政府としなかったことは、感心できない。これは登頂成功後、幹部隊員が斗争的意欲を失っていたことと、同時にのこって、その仕事を頼むに足る若手隊員が欠除していたといえるだろう。

59年4月AACKは社団法人になった。これは組織である。雑用が増した。しかし前進のためにはなんでもテキパキしなければならぬ。

チョゴリザで俄然、有名になったAACKは60年酒戸弥二郎を隊長にノジャック、さらに62年、四手井綱彦を隊長に遂にサルトロ・カンリに登頂。この間AACKは、打ち続いて3発3中の好成績をおさめた。そしてAACKはつぎつぎと遠征隊を派遣し、必ず成功

するとの考えを世間に植えつけてしまった。

ノジャック隊。その出発は、53年のアンナプルナ隊にもおとらぬ、突撃的なものであった。しかし、この隊はきわめて幸運な隊であった。あこがれのワハン溪谷には入れなかったが、突如出現した競争相手のポーランド隊にむしろ、半分おぼさるようにして、ヒンズークン第二、アフガニスタン国第一位の知られざる処女峰ノジャックに登頂し、その後ヨーロッパの登山界で隆盛を極める北側からのヒンズークン登山の第一歩をかざることになった。

サルトロ・カンリの成功は、日本の首相とパキスタン大統領の話しあいという幸運によって、その登山許可はもたらされた。それがなければ、日本人として、シアチェン氷河に入ることは、殆んど不可能であつたらう。しかしノジャック登頂といい、サルトロの成功といい、それらは決して、ただ幸運のことばだけかたづけられてよいものとはおもわれない。筆者もその片すみをけがしていると自負しているの、まことに恐縮ではあるが、チョゴリザ以後、いわゆる新制出の連中が、桑原、今西、四手井、加藤、近藤などの指導をうけつつ、徐々に身につけていった実力が、よびこんで来た幸運といえるのではないだろうか。とくに約半年の間、サルトロの許可とりつけのために、パキスタンで、左往右往した高村泰雄の努力は高く評価されるべきである。しかしサルトロはぜいたくな隊員構成である。ぜいたくというより、むしろ保守的である。加藤はこの山を打ちとるため、平々凡々たる隊員を集めた、といっている。それに違いないとしても、全隊員10名中始めて、国外へでたもの、わずかに3名である。その時隊員の一人であった私は何もいわなかったから、えらそうな事はいえない。しかし今、歴史家ぶって批判をすれば、この隊員構成は、チョゴリザ以来連続した、AACKの遠征気運に、ひと頓座を生ぜしめた、原因のひとつとなったといえるだろう。

すなわち活発な活動の原動力は、いちど味をしめたことのある者に先導されるうえた狼たちである。ところが、この遠征隊は、何人かの、満ちたりた狼というより、むしろ羊を作ってしまった。その中で加藤が翌年隊長として、F.Fの西イリアン計画に隊長としてむかったことは、餓狼道の風上にあつたものとして、おおいに賞賛されるべきである。またサルトロ初陣の上尾は、京大山岳部の副隊長として、ガネッシュ南の初登頂に成功した。しかし、これらは皆、AACKの送った遠征隊ではない。

すでにのべたことではあるが、戦前戦後を通じ、遠征隊が成立するばあい、その中心となるのは、その計画を生みだし、推進した人たちである。隊長はその中から選ばれるか、外から適当な人を隊長としていただいていた。遠征を成立させるためには、その隊に適当した、またはそれ以上の数の同志たちの団結が必要

なのであって、組織そのものの指令で、天降りに、または選ばれるほうからいえば、タナボタ式に遠征隊が成立したことはなかった。現状でもそのような隊がうまく成功する可能性は少ない。

AACKが58年から62年の間に、3隊をヒマラヤに送っているとき、いろいろの名目をもって、多くの会員が、それぞれでかけていた。南極には西畑、北村、伊藤、吉井が、梅棹、川村らは東南アジアへ、川喜田並河、曾根原らはネパールへ、いやもうやめよう。この間にAACK会員でヒマラヤの経験者は50名に達してしまつた。その中で特に注目すべきは中尾の単身ブータン入りである。人々をおどろかせたこの行動にはスマートに身をつくろつた、野武士のときぎまれた敏しょう性と計算しつくされた合理的野心がみられる。

60年、スイス隊のドーラギリ、60年中国隊のゴサイントン登頂を最後に、世界の8000mの独立峰は全部登りつくされてしまった。日本からも64年には実に12隊がくりだした。

63年4月AACK総会は、AACK創立時よりの中心人物、今西錦司を会長にえらび今後のカジトリを正式に依頼した。

後記

AACKの30年、戦後の部は、まだつい最近のことではあるし、その実際はそれぞれの報告書にくわしい。したがって、事実の羅列はなるべくきけ、私なりの感じ方をおしだすようにした。過去の現実を、正確に整理し、評価することは、私たちの義務ではあるが、現在ならびに未来への雄飛を忘れて、過去をふりかえることは、亡者のすることである。私は亡者にはなりたくない。

殆んどこの山は登りつくされ、政治的には、中印、印パ紛争、アメリカのベトナム侵略と情勢はむづかしい。しかし旅行社に頼めば、何もかもととのえてくれる時より、こういう時こそ、われわれの真価を発揮すべきときではないか。

すでに述べたように、新しい活動のためには新しい行動力の集積が必要である。62年のサルトロ・カンリ遠征以後、多田、舟橋、北村など多くの人達の努力にもかかわらず、すでに3年の空白期間が流れた。この間にインドラサン・ガネッシュ南、西イリアンなどから帰ってきた、いちど味をしめた若き餓狼たちは急速にその数をまして来た。羊となった連中も、そろそろ舌なめずりを始めた。住居を京都から移したために、でかけられなかった人達の不満は爆発点に近づいてきた。まず動き始めよう。動き始めてから、方向がまちがっていたと気がつけば、修正すればいいではないか。じっとしているよりましだ。さあ前進しよう。

参考文献

今西；ヒマラヤを語る、白水社。
Fauna and Flora of Nepal Himalaya.

Land and Crops of Nepal Himalaya.
Peoples of Nepal Himalaya.
Edited by Kihara, Maruzen. (1955)
AACK; アンナプルナ日記, 茗溪堂。
木原編; 砂漠と氷河の探検, 朝日新聞社。
今西; カラコラム, 文芸春秋社。
AACK; チョゴリザ, 朝日新聞社。
AACK; ノジャック登頂, 朝日新聞社。
AACK; サルトロ・カンリ, 朝日新聞社。
京大山岳部; インドラサン, 角川書店。
松下; スワート・ヒンズークン紀行, 三一書房。
本多; 知られざるヒマラヤ, 角川書店。
桑原; チョゴリザ登頂, 文芸春秋新社。
川喜田; 鳥葬の国, 光文社。
川喜田; ネパール王国探検記, 光文社
中尾; 秘境ブータン, 毎日新聞社。

The Committee of Kyoto University
Scientific Expedition to Karakoram and Hmalaya.
発行
Vol. 2 Flora of Afghanistan,
; Siro Kitamura 1950.
Vol 3 Plant of W. Pakistan and Afghanistan
; Siro Kitamura ;
Vol. 4 Insect, Fauna of Afghanistan and Hindu-
kush; Masuo Ueno, 1965.
Vol. 5 Personality and Health in the Hunza
Valley; Kinji Imanishi, 1963.
Vol. 6 The Zirni Manuscript, A Persian
Mongolia Glossary and Grammer
; Shinobu Iwamura, 1961.
Vol. 7 Geology of the Karakoram and Hindush;
Susumu Matsushita, Kazuo Hujita, 1965.

AACK会員の足跡

平井 一 正

すでに、AACK時報、No. 3においてAACK年表を発表したが、この年表では、AACK そのものの動きが主体であって、AACK 会員個人の外地遠征記録に関しては不十分であった。今回、これを補足し、AACK主催の外地遠征のみならず、会員が単独、あるいは他の団体による外地遠征に参加したときの記録をも総合して収録したのがここに掲げる表である。

この表は、会員が遠征登山、又は探検という意志のもとに海外にでかけたときの記録であって、原則として単なる海外旅行は含まれていない。ただ、AACKの歴史を知るうえで重要な記録（たとえば1937年伊藤愿のインド行など）は、ここにかけた。

いわゆるエクスペディションとトラベルのちがいは前者が、未知な領域をその行動によって既知の領域にかえることにあるのであって、その観点からこの表をみれば、AACK会員が如何に広範囲に未知の分野の開拓に情熱をそそいでいるかがわかる。

この表をたんねんに読んでいただきたい。今西、西堀、四手井らがカラフト東北山脈に遠征して遠征登山のきっかけを作った1932年（昭和7年）以後1965年（昭和40年）に至るまで、わずか8年をのぞいた26年間毎年必ず会員の誰かは海外へ出かけているのである。この中断した8年というのは、第2次大戦終了による当時の苦しい生活状態から、遠征どころではなかった

1945年より1951年に至る7年間と、アンナプルナIV峰登頂に失敗したその翌年の1954年だけであって、日本が軍国主義一色にぬりつぶされた第2次大戦中といえども、会員の遠征意欲は軍をのりこえ、自由の天地を求めてやまなかったのである。

時代背景を考えると、この26年間の記録というものは全くおどろくべきものである。一つの大学出身者のクラブで、このような広範囲な探検、登山活動をしている会員をもつ所は国内はもとより、国外でもあまり例をみないであろうし、しかも、遠征参加会員の項をみるとわかるように、時代々々の新陳代謝はくりかえしながら、しかも、常に、メンバーが重複し、年代の差を感じさせない程いりまじっている。AACKの伝統の強みがここにある。この表には伝統というもののあるかたが典型的な形で示されている。探検の伝統では、常に、一歩先んじているオックスフォード大学探検クラブの伝統に匹敵するようなものが、はじめてわが国にできたといってもあえて過言ではないだろう。

京都には探検、登山を育てるゆたかな土壌があったとしても苦心してそれを育ててきた多くの先輩たちの努力があった。そういう事実をこの表は物語ってくれている。

なお添付地図は、アンケートと、発表された記録を

参考にして、作製したものである。地図上の番号は年表の左欄の番号に対応する。あわせ御覧ねがいたい。以上年表および地図を作製するに当って下記の人達からいろいろ御教示賜わった。紙上を借りて厚くお礼申しあげる。ことに吉良龍夫氏には年表の作製から記録の補足までいろいろとお世話になった。重ねてお礼申しあげたい。

並河功、今西錦司、西堀栄三郎、酒戸弥二郎、加藤泰安、鈴木信、中尾佐助、吉良龍夫、梅棹忠夫、藤田和夫、川喜田二郎、市原実（敬称略、順不同）

付記——こういう記録は表の中から、抹消することは容易だが挿入することはなかなか困難であるということから、適当でないものや、不確実なものも、2、3表の中に入れた。またヨーロッパアルプス（松方、奥、等）や留学のたぐい（たとえば1962~1963年の荻野のタイ、1964~1966年の高村のフィリピン）などは省略した。筆者の不勉強のため脱落している記録も多いと思うので、どしどし御意見をよせていただければ幸いである。

AACK会員による外地遠征記録

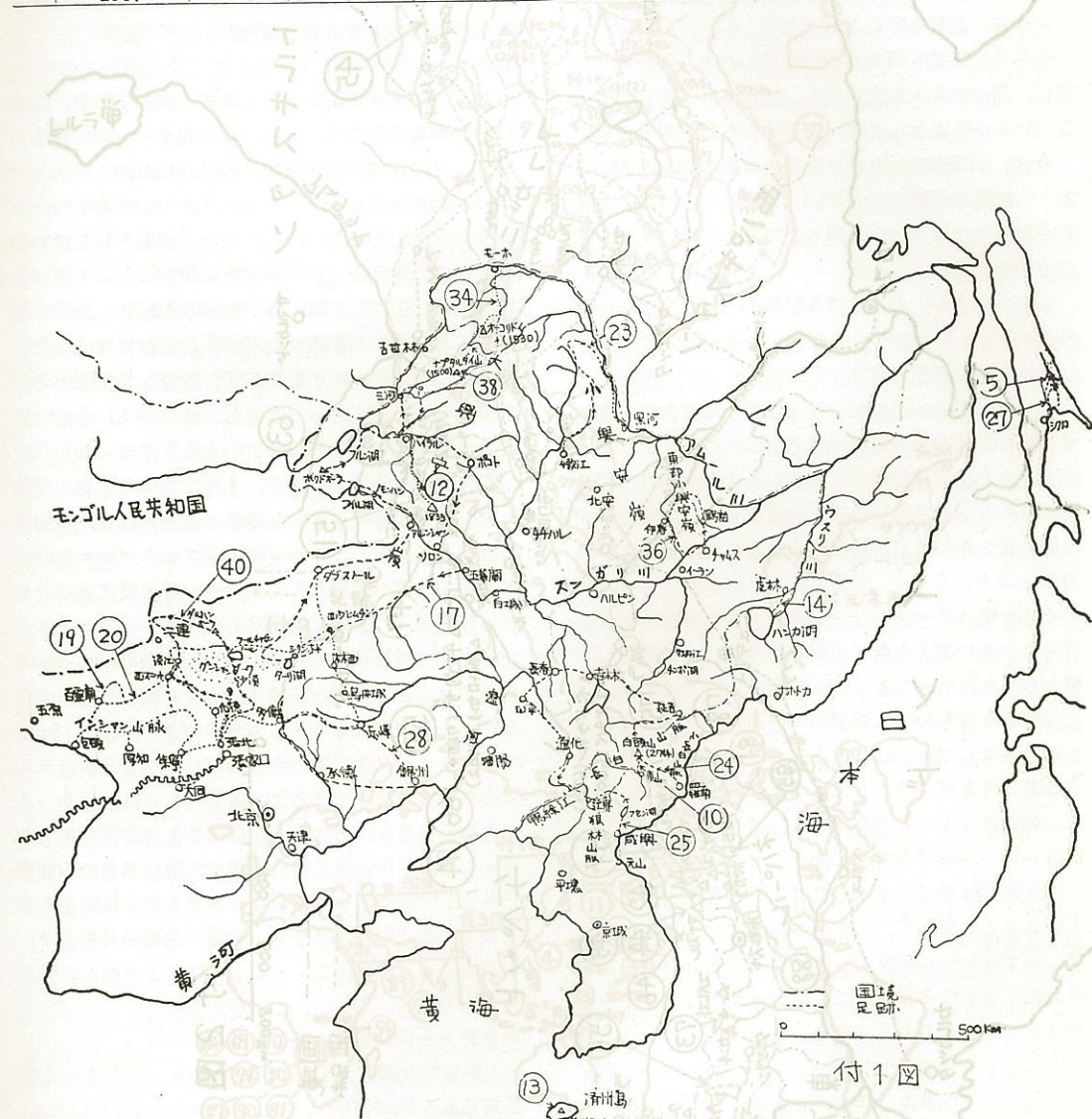
番号	年次	場所	参加会員名	業績	資料その他
1	1920.7~8	カムチャッカ	並河 功	植物調査（カムチャッカ河通航）、クルチエフスカヤ望見	標本の大部分は北大、一部分は京大にある
2	1921.9~1923.1	中支、北支	佐島敬愛		
3	1923.7~9	マイクロネシア	西堀栄三郎	小笠原、サイパン、ロタ、ヤップ、パラオ	
4	1928.	台湾	酒戸弥二郎、岩田権兵衛、（他1）	台湾、次高山、南湖大山登山	
5	1932.7~9	カラフト東北山脈	今西錦司、西堀栄三郎、高橋健治、四手井綱彦、田中喜左衛門	生物学的調査および2、3の高峰登山	遠征登山のきっかけを作る。
6	1932.7~8	北千島（パラムシル島、シムジュ島、アライト島）	長谷川清三郎、小野寺幸之進、杉山佐一（他2人）	千倉岳（1815m）シリヤジリ岳（1793m）アライト富士（2334m）の登山	三高山岳部報告No.10, 1933. 総経費470円、三高山岳部北千島遠征隊に参加
7	1933.7~8	南千島	長谷川清三郎、吉井良三（他4名）	チャチャスプリ（1845m）ルルイ岳（1506m）アトサメブリ（1206m）ヒトカッブ岳（1639m）北、南チリップ岳（1577, 1589m）に登山	三高山岳部報告No.11, 1934. 総経費420円、三高山岳部南千島遠征隊に参加
8	1934.8	白頭山	児島勘次	白頭山偵察	
9	1934.9	内モンゴリア	佐島敬愛	張家口、ドロン、包頭、百靈廟	
10	1934.12~1935.1	北鮮白頭山	今西錦司、西堀栄三郎、高橋健治、宮崎武夫、浅井東一、奥貞雄、平吉功、長谷川清三郎、加藤泰安、堀龍雄、谷博、杉山佐一、児島勘次、（他3名）	白頭山冬季初登頂、ヒマラヤ装備、極地法、無線etcのテスト、生物学、気象学の研究	AACKの第1回海外遠征京大旅行部編；白頭山、東京併号書房、昭10、宮崎；冬の白頭山山岳30年、10
11	1935.11~12	南千島	渡辺漸、釣田正哉（他7名）	チャチャスプリ登山	東大スキー山岳部南千島遠征隊に参加、山岳31年1号、pp.19-98
12	1935.12~1936.2	中部大興安嶺	加藤泰安、吉井良三、児島勘次（他4名）	大興安嶺最高峰（1835m）の初登攀	山岳31年1号、pp.94-131
13	1935.12~1936.1	朝鮮齊州島	宮崎武夫、今西寿雄（他2名）	漢卒山（1950m）初登頂	宮崎よ 出発直前不参加となる、関西山岳連盟合同登山隊に参加、山岳31年1号
14	1936.1~2	東満州国境地帯から北支	今西錦司	虎林一興凱湖	この帰り北京にいた伊藤愿に会いヒマラヤをブッシュ
15	1937.8	カラフト中央山脈	今西錦司		日高の帰り、日高パーティー（竹内佐郎、喜田豊治、鈴木信）
16	1937.6	インド	伊藤愿		K2許可とりつけ
17	1937.8-9	東モンゴリア、ウジュムチン、ホロンバイル地方	加藤泰安		伊藤愿とインドに行くべき予定を変更させられる

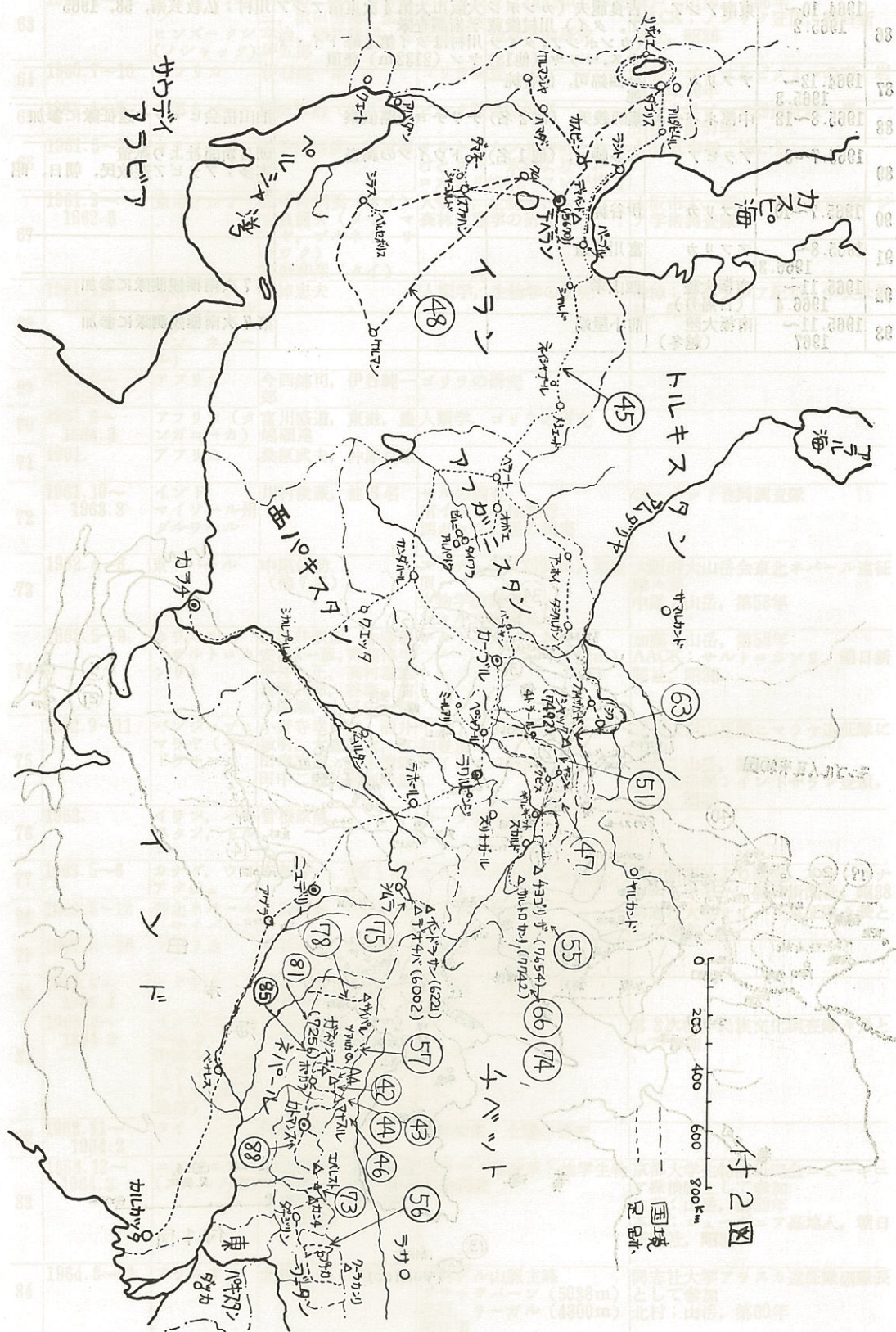
18	1938.5~7	内モンゴリア古北口一帯	加藤泰安		木原隊の受入れ準備
19	1938.7~8	内モンゴリア	鈴木信, 金子茂, 今西寿雄, 喜田豊治, 周布光兼, 中村英真 (他3名)	内モンゴリア一帯の生物学, 農学, 地理学的研究調査	京大旅行部学生隊, 鈴木; 内モンゴリアの調査旅行, 山岳36年1号, pp. 1-28
20	1938.8~10	内モンゴリア	木原均, 今西錦司, 宮崎武夫, 浅井東一, 平吉功, 加藤泰安, 釣田正哉, 周布光兼, 金子茂, 他4名	内モンゴリア一帯の生物, 農学, 地理学, 医学的研究	AAACK第2回海外遠征, 宮崎; 山岳36年2号, pp. 51-103. 木原; 内モンゴリアの生物学的調査, 東京養賢堂, 昭15. 宮崎; 蒙古横断, 朋文堂, 昭18
21	1938.7~8	硫黄列島	安江安宜, 川喜田二郎	生物学的調査. 北硫黄島(520m)の登山	三高山岳部報告No. 14, pp. 13-23, 1939
22	1939.8~9	内モンゴリア張家口一帯	今西錦司, 森下正明	生物学的, 民族学的調査	今西, 草原行, 府中書院(1947)
23	1939.7~8	西部小興安嶺	周布光兼, 池田敏夫, 中尾佐助, 藤本武, 比企能	生物学的調査. 嫩江源頭の山より黒龍江へのルート開拓	山岳35年, pp. 69-106. 経費 600円
24	1940.7~9	北鮮山地白頭山から満州	梅棹忠夫, 藤田和夫, 伴豊	小長白山脈, 摩天嶺山脈, 白頭山登山, 松花江水源の確認	三高山岳部報告, No. 15, pp. 1-85, 1943
25	1940.7~8	北鮮山地	中尾佐助, 松森富夫	火田農業の調査, 狼林山脈の2, 3のピークの登攀	
26	1940.7~8	満州側より白頭山	川喜田二郎	生物学的調査	満鉄調査隊に参加, 撫松より白頭山ルート
27	1940.12~1941.1	東北カラフト	藤本武, 今西寿雄, 中尾佐助, 秋山忠義, 中村成三, 梅棹忠夫	犬ぞりの実用性のテスト	梅棹; 犬ぞりの研究, 探検3号, pp. 78-154
28	1941.7~8	熱河一ドロン	藤田和夫		京大地磁気測量隊に参加
29	1941.	ドラガチェンカより三河	土倉九三		
30	1941.7~8	内モンゴリア王爺廟一帯	伴豊		隊商にまぎれて単独行(註, 伴豊は第2次大戦で戦死した)
31	1941.	タイ, 仏印国境	周布光兼		国境確定委員会に同行
32	1941.7~8	中部大興安嶺	藤本武		測量隊に参加
33	1941.7~10	マイクロネシアボナベ島, サイパン島	今西錦司, 森下正明, 中尾佐助, 吉良龍夫, 梅棹忠夫, 川喜田二郎, 松森富夫, 秋山忠義, 池田敏夫	生物学, 人類学, 動物学上の調査研究	京都探検地理学会マイクロネシア調査隊に参加. 今西; ボナベ島, 東京彰考書院(昭19)
34	1942.4~7	北部大興安嶺ドラガチェンカよりモーホ	今西錦司, 森下正明, 吉良龍夫, 川喜田二郎, 梅棹忠夫, 藤田和夫, 土倉九三, 伴豊 (他15名)	地学, 生物学, 民族学の研究. 北部大興安嶺最高峰オーコリドイの初登頂, 初縦断に成功	満州国治安部調査隊に参加. 今西; 大興安嶺探検, 毎日新聞社, 昭27
35	1942	内モンゴリアハロンアルジャン一帯	松方三郎		当時, 松方は北京にいた
36	1943.8~10	東部小興安嶺	森下正明, 中尾佐助	生物学, 民族学的調査	人夫90人のうち1割死んだという(黒河より)
37	1943.8	西部小興安嶺	原田直彦		(黒河より)
38	1943.8~9	北部大興安嶺	市原実, 富川盛道	ナブルダイ峰登山	ドラガチェンカ一帯のナブルダイ山
39	1944.	内モンゴリアウジムチン一帯	松方三郎		
40	1944.9~1945.2	内モンゴリア張家口一帯	今西錦司, 森下正明, 加藤泰安, 中尾佐助, 梅棹忠夫, 和崎洋一	遊牧民の生活の研究, グンジャンダク砂漠の横断, 外蒙国境に至る	蒙古善隣協会の調査隊に参加. 今西; 遊牧論そのほか, 大阪, 秋田屋, 昭23
41	1952.1~3	ネパール(カトマンズ)	西堀栄三郎	マナスルの許可とりつけ	

42	1952.9~12	中部ネパール(マナスル, アンナプルナ)	今西錦司, 中尾佐助, 林一彦, (他3名)	マナスル登路発見. アンナプルナ4峰試登, チョール(6100m)初登頂	JACマナスル踏査隊に参加. 今西; 山岳, 第48年, 今西, ヒマラヤを語る, 日水社, 昭29
43	1953.3~8	中部ネパール(マナスル)	加藤泰安, 中尾佐助, 川喜田二郎 (他12名)	マナスル登山と生物学, 地理学, 人類学的研究	JACマナスル第1回登山隊に参加. 日本山岳会; マナスル1952~3, 毎日新聞社(昭29). 中尾; 山岳, 第49年. 川喜田; ネパール王国探検記, 光文社, 昭32年
44	1953.9~11	中部ネパール(アンナプルナ)	今西寿雄, 藤平正夫, 舟橋明賢, 伊藤洋平, 藤村良, 脇坂誠, 立平宜雄	アンナプルナ第2峰試登, ナムンパンジャン越え, アンナプルナ第4峰試登	今西; 山岳, 第49年. AAACK; アンナプルナ日記, 茗溪堂, 昭31. 伊藤; 回想ヒマラヤ, 山と溪谷社, 昭30
45	1955.4~11	パキスタン, アフガニスタン, イラン	木原均, 今西錦司, 中尾佐助, 原田直彦, 藤田和夫, 梅棹忠夫 (他9名)	パキスタン, アフガニスタン, イランにおけるコムギの発祥地の調査, カラコラムにおける地学, 生物学の発見	京都大学カラコラムヒンズークン学術探検隊に参加. 木原; 砂漠と氷河の探検, 朝日新聞社, 昭31. 今西; 山岳, 第50年. 藤田; 〃〃. 今西; カラコラム, 文芸春秋社. 梅棹; モゴール族探検記, 岩波
46	1956.3~8	中部ネパール(マナスル)	今西寿雄, 他10名	マナスル初登頂	JAC第3回マナスル登山隊に参加. 日本山岳会; マナスル1954~56, 毎日新聞社, 昭33
47	1956.5~11	東部ヒンズークン	藤田和夫, 本多勝一 (他1名)	地学, 生物学調査, プリアンサル(6293m)試登	パンジャブ大学と合同探検隊. 藤田; 山岳, 第52年, 昭33. 本多; 知られざるヒマラヤ, 角川書店, 昭33
48	1956.6~10	イラン	曾根原恵, 東滋, (他2名)	民族学, 生物学の調査, デマベンド峰登頂	吉田; 砂漠と高原の国, 三一書房, 昭32
49	1956~1957	南極大陸(日帰り)	伊藤洋平		
50	1956~1958	南極大陸(越冬)	西堀栄三郎, 北村泰一	日本人として初の越冬, ボンヌーテン(1800m)初登頂. オラフ海岸初探査	第1次南極観測隊に参加. 西堀; 南極越冬記, 岩波, 昭33
51	1957.6~9	スワートヒンズークン	本多勝一, 荻野和彦, 岩坪五郎, 沖津文雄 (松下進隊長)	生物, 地学の研究, ジャハーンドック(6320m)の試登	パンジャブ大学との合同探検. 松下; 山岳第53年. 松下; スワートヒンズークン紀行, 三一書房, 昭33
52	1957.11~1958.4	東南アジア, タイ, カンボジア, 南ベトナム, ビルマラオス	梅棹忠夫, 川村俊蔵 (他4名)	人類学, 生物学の研究. タイ最高峰ドイ・インタン(2576m)の登山	大阪市大第1次東南アジア学術調査隊に参加. 梅棹; 東南アジア紀行, 中央公論, 昭39. 梅棹; 東南アジア, 岩波写真文庫275, 276
53	1957~1958	南極(日帰り)	吉井良三		第2次南極観測隊に参加
54	1958.2~7	アフリカ中部	今西錦司, 伊谷純一郎	野生猿の研究. キリマンジャロ, ルウエンゾリ山の登山	日本モンキーセンターより派遣. 今西; ゴリラ, 文芸春秋社, 昭35
55	1958.5~10	カラコラム(チョゴリザ)	桑原武夫, 加藤泰安, 藤平正夫, 山口克勝, 脇坂誠, 中島道郎, 平井一正, 高村泰雄, 岩坪五郎, 芳賀孝郎, 今川好則 (他1名)	チョゴリザ(7654m), カベリーPK(7000m), コンダスPK(6758m)の初登頂, ビアンジェ氷河の調査	AAACK; チョゴリザ, 朝日新聞社, 昭34. 加藤; 山岳, 第54年, 昭34. 桑原; チョゴリザ登頂, 文芸春秋社, 昭34
56	1958.5~11	ブータン	中尾佐助	植物学的調査. クーラカンリetcの偵察	中尾; 秘境ブータン, 毎日新聞社, 昭34
57	1958.5~12	西北ネパール	川喜田二郎, 並河治, 曾根原恵, 他3名	ムクトヒマール登山. 生物, 地理, 人類学的調査	川喜田; 山岳, 54年. 川喜田; チベット人, 角川書店. 川喜田; 鳥葬の国, 光文社, 昭35. 川喜田, 高山; ヒマラヤ, 保育社, 昭38
58	1959.10~12	シッキム, アッサム	木原均, 中尾佐助, 他1名	稲起源調査	サジアまで
59	1959.11~1960.3	南極(日帰り)	江頭庸一		第3次南極観測隊に参加
60	1959.11~1961.	南極(越冬)	北村泰一	東北内陸調査	同上
61	1960	北極海	樋口敬二	T3の調査	
62	1960.5~7	ビルマ, タイ(プタオ, アキャブ, モルメイン, マーブイ)	川村俊蔵	霊長類の調査	川村; 北ビルマ辺境紀行, 世界の旅日本の旅, 18, 1961

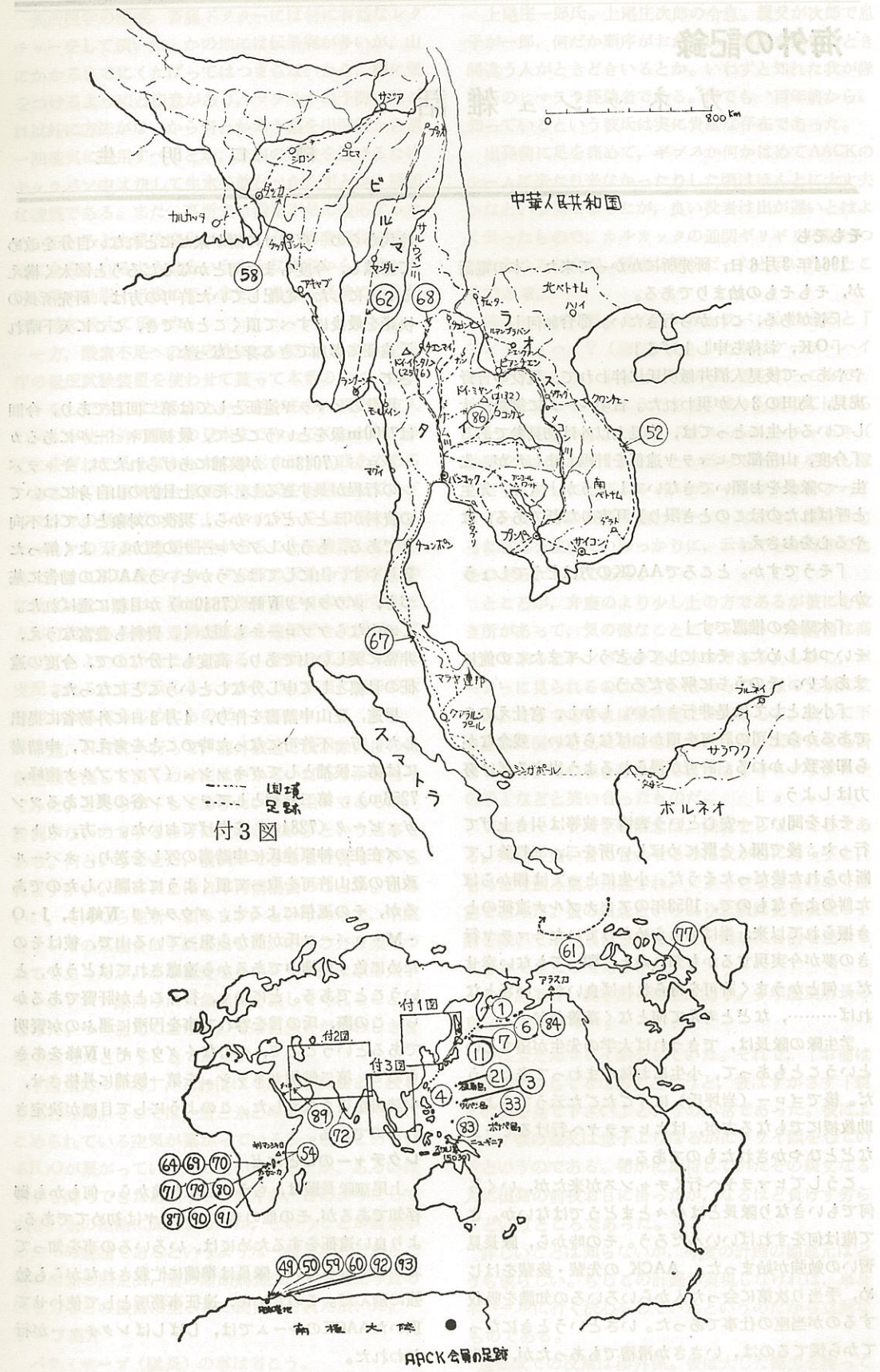
63	1960.4~12	アフガニスタン ヒンズークシ (ノジャック)	酒戸弥二郎, 吉井良三, 沢田秀穂, 広瀬幸治, 酒井敏明, 岩坪五郎	ノジャック (7492m) の初登頂 生物学, 地理学的研究	酒戸; 山岳, 第56年 AACK; ノジャック登頂, 朝日新聞社, 昭36
64	1960.7~10	アフリカ	伊谷純一郎	ゴリラ調査	伊谷; ゴリラとピグミーの森, 岩波, 昭36年
65	1961.4~6	中部ネパール	篠田軍治 (他7名)	ピーク29登路偵察	大阪大学ピーク29遠征隊々長 山岳, 第57年
66	1961.5~11	カラコルム	四手井綱彦, 高村泰雄	サルトロカノリ許可とりつけとリカー氷河よりサルトロカノリ偵察, フンザ地方	AACK事報 No. 2
67	1961.9~1962.3	東南アジア	四手井綱彦 (タイ), 吉良龍夫 (タイ, マラヤ, ブルネイ, サラワク), 荻野和彦 (タイ)	人類学, 生物学, 森林生態学の研究	大阪市大, 京大, 第2次東南アジア学術調査隊
68	1961.12~1962.2	東南アジア (タイ, ビルマ, 東パキスタン, ネパール)	梅棹忠夫	人類学, 生物学の研究	梅棹; 東南アジア紀行, 中央公論社, 昭39
69	1961.9~1962.4	アフリカ	今西錦司, 伊谷純一郎	ゴリラの研究	
70	1961.9~1964.3	アフリカ (タンガニーカ)	富川盛道, 東滋, 豊嶋頭達	人類学, ゴリラの研究	
71	1961.	アフリカ	桑原武夫, 沖津文雄		
72	1961.10~1963.3	インド マイソール州 ダルワール	川村俊蔵, 他3名	サル 南インド各地旅行 西ガッツ山脈の調査	日・インド合同調査隊
73	1962.4~8	東ネパール	中尾佐助 (他7名)	ヌプチュー (7028m) 初登頂 生物学的調査 ジャルプの発見	大阪府大山岳会東北ネパール遠征隊々長 中尾; 山岳, 第58年
74	1962.5~9	カラコルム (サルトロカノリ)	四手井綱彦, 加藤泰安, 林一彦, 斎藤惇生, 平井一正, 高村泰雄, 岩坪五郎, 谷泰, 前小屋端, 上尾庄一郎	サルトロカノリ初登頂 (7742m)	加藤; 山岳, 第58年 AACK; サルトロカノリ, 朝日新聞社, 昭36
75	1962.9~11	パンジャブヒマラヤ (インドラサン)	小野寺幸之進, 酒井敏明, 大森義次, 富田幸次郎, 宮木靖雅, 田中二郎, 岩瀬時郎	インドラサン (6221m) 初登頂 デイオチバ登頂	京都大学山岳部ヒマラヤ遠征隊に参加 酒井; 山岳, 第58年 京大山岳部; インドラサン登頂, 河出, 昭39
76	1962.	イラン, パキスタン, トルコ	曾根原恵	ジープを使用	
77	1963.5~6	カナダ, ウスアクジュ	本多勝一, (他1名)	カナダエスキモーの調査	朝日新聞社より派遣, 本多; カナダエスキモー, 朝日新聞社, 昭38
78	1963.8~12	西北ネパール (サイバル)	児島勘次, (他5名)	サイバル初登頂	同志社大学サイバル遠征隊々長として参加
79	1963.6~10	アフリカ	今西錦司, 浅井東一	人類学の研究	
80	1963.6~1964.4	アフリカ	梅棹忠夫, 和崎洋一, 伊谷純一郎	同上	
81	1963.6~1964.3	インドビハール地方 中部ネパール (アンナプルナ I 南方山岳地帯)	川喜田二郎 (他3名)		第3次稲作民族文化調査隊々長として参加
82	1963.11~1964.2	タイ	荻野和彦	森林植生, 土壌の研究	
83	1963.12~1964.3	ニューギニア (スカルノ峰)	加藤泰安, 安江安宜, 本多勝一, 田附重夫, 水瀬昭典, 松田隆雄 (他4名)	スカルノ峰登頂と地学生物学的調査	京都大学生物誌研究会ニューギニア探検隊として参加 加藤; 山岳, 第59年 本多; ニューギニア高地人, 朝日新聞社, 昭39
84	1964.8~11	アラスカ	北村泰一, (他4名)	ランゲル山脈主峰 ブラックバーン (5038m) 登頂, リーガル (4300m) 初登頂	同志社大学アラスカ遠征隊副隊長として参加 北村; 山岳, 第60年
85	1964.9~10	中部ネパール (ガネツ)	樋口明生, 上尾庄一郎, 吉野熙道, 島田喜代男, 木村雅昭, 上田豊	アンナプルナ南峰 (ガネツ) (7256m) の初登頂	京都大学山岳部ヒマラヤ遠征隊に参加

86	1964.10~1965.2	東南アジア	吉良龍夫 (カンボジア, タイ), 川村俊蔵 (カンボジア, タイ, オス, マラヤ) (他13)	大阪市大第4次東南アジア学術調査隊 川村はタイ第2峰ドイ・ミヤン (2132m) 登頂	川村; 仏教芸術, 58, 1965
87	1964.12~1965.3	アフリカ	今西錦司, 伊谷純一郎		
88	1965.8~12	中部ネパール	葉師義美, (他2名)	チリチヨ登路偵察	泊山岳会ヒマラヤ遠征隊に参加
89	1965.7~8	アラビア	本多勝一, (他1名)	ベドウインの調査	朝日新聞社より派遣 本多; アラビア遊牧民, 朝日, 昭41
90	1965.7~10	アフリカ	伊谷純一郎		
91	1965.8~1966.3	アフリカ	富川盛道		
92	1965.11~1966.4	南極大陸 (日帰)	西山孝		第7次南極観測隊に参加
93	1965.11~1967	南極大陸 (越冬)	前小屋端		第7次南極観測隊に参加





付2図



付3図

AACK会員の足跡

海外の記録

ガネッシュ雑話

樋口 明生

そもそも

1964年3月6日、研究所にかかって来た一本の電話が、そもそもの始まりである。

「話がある、これから行きたい。都合如何」

「OK、お待ち申し上げます」

ややあって後見人酒井敏明氏に伴われて、現役の吉野虎見、島田の3人が現われた。日頃ルームに御無沙汰している小生にとっては、後見人以外は初見参である「今度、山岳部でヒマラヤ遠征を計画しましたが、先生一つ隊長をお願いできないでしょうか」（註、先生と呼ばれたのはこのとき限り）耳寄りな話である。はやる心をおさえ、

「そうですか。ところでAACKの方はどうでしょうか」

「木曜会の推薦です」

そいつはしめた、それにしてもどうしてまたこの俺にまあよい、そのうちに解るだろう。

「小生としては是非行きたい。しかし、宮仕えの身であるから上司の許可を頂かねばならない。残念ながら即答致しかねる。許可が得られるよう出来るだけ努力はしよう。」

それを聞いて一安心という表情で彼等は引き上げて行った。後で聞くと既にめぼしい所を二、三打診して断われた後だったそう。小生にとっては棚からぼた餅のようなもので、1953年のアシナプルナ遠征のとき振られて以来、半ばあきらめかけていたヒマラヤ行きの夢が今実現するかも知れぬとは願ってもない幸せだ。何とかうまく許可を得られれば良いが。いざとなれば……、などと考えて何となく落着かない。

学生隊の隊長は、できうれば大学の先生が望ましいということもあって、小生にお鉢がまわって来たようだ。後でゴロー（岩坪氏）に「ごたごた云うてるより助教にでもなる方が、はよヒマラヤへ行けるでー」などとひやかされたものである。

こうしてヒマラヤへ行くチャンスが来たが、いくら何でもいきなり隊長とは少々とまどうではないか。さて俺は何をすればいいんだらう。その時から、隊長見習いの勉強が始まった。AACKの先輩・後輩をはじめ、手当たり次第に会った人からいろいろの知識を吸収するのが当座の仕事であった。いざというときになってから慌てるのは、いささか滑稽でもあったが、学生

時代からの一夜漬の癖が未だにとれない自分を改めて認識し、今度もまた何とかなるだろうと図太く構えることにした。心配していた許可の方は、研究所長の快諾を最後にすべて頂くことができ、ここに天下晴れて遠征に参加できる身となった。

さて

現役のヒマラヤ遠征としては第二回目であり、今回は7000m級をということで、最初西ネパールにあるカンジロバ（7043m）が候補にあげられたが、キャラバンの行程が長すぎるし、その上目的の山自身についての資料がほとんどないから、現役の対象としては不向きである、もう少しアプローチの短かい、よく解った登りやすい山にしてはどうかというAACKの勧告に基づき、ダウラギリIV峰（7640m）が目標に選ばれた。この山ならアプローチも短かく、資料も豊富なおえ、非常に美しい山であり、高度も十分なので、今度の遠征の目標として申し分なしということになった。

早速、登山申請書を作り、4月2日に外務省に提出した。万一不許可になった時のことを考えて、申請書には第二候補としてガネッシュ（アナンプルナ南峰、7256m）、第三候補としてランタン谷の奥にあるツンガ・ピーク（7284m）をあげておいた。一方、カトマンズ在住の神原達氏に申請書の写しを送り、ネパール政府の登山許可を取って頂くようお願いしたのであるが、その返信によると、ダウラギリIV峰は、J・O・M・ロバーツ氏が前から狙っている山で、彼はそのために色々準備中であるから遠慮されてはどうか、ということである。とにかく、行くことが肝腎であるから、この際、氏の言を容れて事を円滑に運ぶのが賢明であるということで、やむなくダウラギリIV峰をあきらめて、第二候補ガネッシュを第一候補に昇格させ、申請書を書きなおした。このようにして目標が決定されたのである。

レクチャーのことなど

上尾副隊長殿は、もう百年も前から、何もかも御存知であるが、その他の者はヒマラヤは初めてである。より良い遠征をするためには、いろいろの事を知っておかねばならない。隊員は準備に忙殺されながらも勉強に励んだ。そのために、遠征事務所として使わせて頂いたAACKのルームでは、しばしばレクチャーが行なわれた。

高所医学の権威、斎藤ドクターには特に有益なレクチャーをして頂いた。かの地には伝染病が多いが、山にかかるまでにくたばってはつまらないから、特に気をつけるようにと注意があり、マラリヤの予防にはこれ以外に方法がないから何とか云う薬を出国前から週一回確実に服用すべしとか、赤痢の危険を避けるためキャラバン中ま決して生水を飲むべからずとか、親切な講義である。また高所では酸素不足に適応するためいろいろと生理的变化が起るから、高度馴化にはとくに念を入れるようにというような注意から、持って行く薬の効能・用法に至るまで、豊富な経験に照らして丁寧に教えて頂いた。

一方、酸素不足への適応性については、この頃、防衛庁の低圧試験装置を使わせて貰って本番の前に一度テストをしてみてもどうかという話があり、親切な友人の一人が使用許可願の見本まで作ってくれたが、多忙にまぎれて果せなかったのは返す返すも残念である。ある日、彦根気象台長西本清吉氏をお招きして、「ヒマラヤの気象について」レクチャーをして頂いた。ヒマラヤの天候には周期性があることを強調しておられたが、これは後日アタックの日の天候を予想するのに役立った。また、現地の天気予報を日本で行なうことが可能であるから通信方法さえ確保できれば送ってあげてもよいということである。登頂の成否は天候に支配されるとまで云えるヒマラヤで、本当に翌日の天気がわかるならしめたものだ。

早速、NHKへ行って、海外放送で我が隊向けの気象通報を流して頂くわけにはいかないだろうかと思ってみた。ところが「してあげたいのは山々であるが、前例がないのでするわけにはいかない」という返事である。何ということだ、前例ができるまで待っていられますか。NHKとは日本薄情協会のことか。まあいい、そんな他所へ頼みます、というわけで、中国とインドの気象台に手紙を出した。中国の方は梨のつぶてであったが、わが親愛なるアーリヤ族は京都大学アナンプルナ隊向けに気象通報を流してくれることになった。つけ加えておけば、その担当官が美わしき女性であったということである。

「雪氷について」、これははるばる北海道まで教わりに行った。そこでは、雪と氷との違いは、中にとじこめられている空気が異なるか、とじこめているH₂Oが異なるかの違いによるか、あるいは空から降ってきたあの小さい雪片が、どのようにして大きい氷の結晶に成長するのか、ということが雪氷学の一つの課題であるというような一般的なことから、雪の結晶の固定法、雪の断面観測法、氷の偏光写真の撮り方などの技術に至るまで親切にお教え頂いた。

サブ紹介

バラ・サーブ（隊長）の事は省こう。

上尾庄一郎氏。上尾庄次郎の令息。親父が次郎で息子が一郎、何だか順序がおかしい。電話をかけるとき間違う人がときどきいるとか。いわずと知れた我が隊唯一のヒマラヤ経験者である。何でも百年前から、知っているという彼氏は実に貴重な存在であった。

出発前に足を痛めて、ギブスか何かはめてAACKのルームに來たり來なかつたりした頃はほんとに大丈夫かなという気になったが、良い役者は出が遅いとはよく云ったもので、カルカッタの通関ギリギリに駆けつけたところなんぞ、見事な演出だったと云いたいところである。

彼はヒンズー語をよくし、キャラバンが始まると「アンダー・ハイ？（卵ないか）」とか「ケーラ・ハイ（バナナないか）」などと軒なみに首をつっこんで、いいことをしていたようである。我々も負けてはならじと、茶を飲みに入れば、「チニ・ボホト・チャヒエ（砂糖を沢山入れてくれ）」とか云ってザラメを少し稼いだり、終いには「ジャパニカ・サーブ・タクラハイ・ゾー（日本の旦那は強いゾー）」などと、聞きかじった言葉を使いたいばかりに、云わでもがななことを口走ったものである。

ところが、弁慶のより少し上の方であるが彼にも泣き所があって、気の毒なことにキャラバン中適当な高度まで来るとチンバをひき出すのである。しかし、ポーターに見られるのはまずいと云って、隊の先頭に立つか、そうでなければ最後尾にいるかして、決して下の連中に弱みを見せることはなかった。天晴れな心掛けである。その歩き方を見て我々は「ミニクイアヒルの子」などと笑い合ったものだ。

ドクター・ウエオの信念は、注射をしないことである。人間を痛い目に合わせるの我が心にあらずと、もっぱら飲み薬が用意され、ビタミンなどきわめて豊富であった。彼の信念というより念願は見事成就し下痢を除いては全員何ら病を得ず、無事に目的を達することができたのである。

吉野黒道君。農学部4回生、23才。少年鑑別所長の息子、通称コッペ。

彼はふだんコワイ顔をしていた。それで、「お前はコワイ顔をしてるなあ」と云うと、彼はすかさず「親父の顔を見て下さい」というのが常であった。彼によると、彼の親父は息子よりはるかにコワイ顔をしているというのである。秘かに期待していたその親父なる人に出発の前夜お目に掛ったが、なるほど負けず劣らずというところであった。

詳しいことは知らないが、今度の計画の勧進元はとも彼らしい。もしこの計画が実現しなければ、単身ネパールに行く決心をしていたというのだから立派なものである。

遠征隊での役割は渉外係。彼は大した能力を持って

いる。先に述べたAACKの勧告があるや否や、ダウラギリIV峰の計画書を作りあげてしまうし、神原情報に従いガネッシュに変更しようということになると、たちどころにそれ用の書類を作成してしまう。

山ではルート開拓に冴えた腕を見せ、最初に主稜線上に顔を出したのは彼である。見かけによらず相当な大喰いで、BCで帰りに使うポーターを待つ間、絶えずメス TENT の辺りで調茶漬など漁っていた姿が忘れられない。登頂を終えてから、ひと夜BCで祝盃をあげたとき、彼は嬉しさに酔いつぶれ、メス天から出た途端、草の上にゴロツと横になり高いびきをかきはじめた。空には煌々と満月が輝いている。他の隊員は少々心配しながらも、高所服を着ているから大丈夫だろうとか、あいつ起こしたらうるさいからさわるなどか少しは寒い目に合わせてやる方が身のためだとか云いながら、めいめいテントに帰ってしまった。翌朝、「みんな冷たい奴だなあ、云ってたこと全部聞いてたぞ」、こう彼は云ってのけた。

島田喜代男君。工学部3回生、22才。飛騨高山の産。足の早いエネルギーな男である。真夏の炎天下、彼としばしば大阪の街を托鉢に回ったが、うだるような暑さにもかかわらず彼は一目散にガムシャラに飛ばすので、こちらはもう汗だくになって付いて廻り、「おい、島田、そんなに慌てなくてもいいじゃないか」と云うと「性分ですから仕方ありません」などと云いながら、またガムシャラに歩き出してしまふ。夏のポカラでもこの調子でやったものだが、さすがの彼氏もかの地では少々こたえたようである。

隊での仕事は会計係、しめるところは適当にしめ、ゆるめるところは適当にゆるめ、結構よい会計振りであった。

山にかかってからは大ハリキリで、偵察に、ルート開拓に大奮斗であった。わけても、セラック尾根のCIV裏の水壁でのルート工作には上田とともに大活躍し高さ10m余りの壁に立派な繩梯子をかけることに見事成功した。しかし、無理な姿勢であまりハリキリ過ぎたせいか、CIVで持病の痔がでてしまい、可哀そうなことに登頂隊には参加できなくなってしまった。

彼は俗名をクロと云う。ことのいわれは、一回生の夏山でポッカのとき、水筒の水を飲んだつもりでクロシンを飲んだことによるそうだ。それを御丁寧にも二口目で「一寸おかしい」ことに漸く気がついたというのである。

一方、彼は非常な自信家でもある。カトマンズでの或る日、自転車を借りてドライブの途上、物凄い美人の乗った自動車に出会った。彼はその自動車を止めて「電報局は何処か」と尋ねた。ややあってその自動車と再び出会ったとき、丁度彼と小生が道の両側に車を避けた形になったが、通りすがりにその美人は彼の

方を見ていた。この事実は彼が非常によくもてるほんの一例に過ぎないと彼は説く。香港ではJALのミス何とかにもて、カルカッタではミス・ホースにもて、カトマンズではミス・サリーや自動車の美人にもて、ポカラではミス・ポカラにもて、まさにMMK(もててもてて困る)であった。人生到る処青山ありか?

木村雅昭君。法学部4回生、21才。大阪の産。わが隊唯一の文科系人物である。彼はつまらない議論をふっかけるのが趣味で、ことあるごとに人をつかまえては議論をする。キャラバン中は、連絡將校相手に絶えず口角あわをとばしていた。

彼はなかなかの英語使いでもある。英語で同じ調子であわをとばす位だから大したものだ。帰りにカトマンズで別れ際に、「樋口さんはあの英語でこれから何処かへ行くんだから大したものだ」などとひやかす位大した実力である。

カルカッタで荷物の到着を待っていたある日のこと彼は今度の遠征のために初めてガスライターなるものを手に入れたのであるが、それがあまり上等でなく、ガスがもれて困るとボヤいていた。悪い奴が居て、バンクの時チューブを水につけて検べるように、ライターを一度水につけて見たら、と教えた。そこは文科系の悲しさで、早速実行に移したのである。気の毒なことに、彼のライターはその後さらに調子が悪くなったのは申すまでもない。

隊での仕事は装備係。出発までの装備の調達から梱包、発送など、なかなか手際よくやってのけた。ベースキャンプに着くと早速荷物の仕分けをし、高所への荷上げの段取りをする。他の隊員達は彼の命令一下、ザイルの捲きなおし、赤旗作り、ラジウスのテストなどやらされた。山にかかってからは、クロシンの消費が予定をオーバーするので、毎夜テントの中で残余の計算に頭をかかえていた。

偵察に、ルート工作に見せた彼の實力は高く評価されてよいものである。これはガネッシュを終えてからクロとテント・ピークの試登をしたときにも遺憾なく発揮され、見事初登頂に成功したのである。

上田豊君。理学部3回生、20才、最年少。別名ポッポ。悠揚迫らぬ所があると同時に、非常な感激家である。地理不案内な東京で、お天道様を頼りに歩いているかと思えば、先登隊の見送りの際、船がテープを引きずって動き出すと、酒の酔いも手伝ってか感極まり今にも泣き出さんばかりになったりする。

キャラバン中のある日、その時は確かお天道様がかくれていると記憶するが、我々よりずっと先行した筈のポッポに、後から声をかけられた。「何だ、前を歩いていたのじゃなかったのか」と云うと、「それがねえ、道を間違ったんです」という事であった。やはり出るべきものが出ていないと具合が悪いようである。

隊では食料係を勤めた。丹念な食料計画のもとに、かなりバラエティに富んだ御馳走を提供してくれた。キャラバン中はコックと行動を共にし、鶏、卵、野菜などの調達に忙しく、BCでは羊を買いに走るなど大いに張切っていた。

山では木村と同様に、偵察に、ルート工作に尽力したが、とくにCIV直上の水壁ではクロと共に大奮斗しあの難かしい所に立派な繩梯子をかけるのに活躍した。

彼は学術調査にも大張切りで、デブリの調査、雪の断面観測、海塩核の調査などにおいては、小生のよき協力者であった。とくに、海塩核の定時観測の際は、他の隊員が遊んでいるときでも、彼はテントの外で、採取作業を一人熱心に行っていた。

以上合計6名の平均年齢は24才である。これは7000m級の初登頂に成功した中では最も若い隊であろう。

鹿島立ち

7月10日に在インド、ネパール大使館から正式の登山許可を得て、いよいよ出発である。準備は完了。

当初、隊員と荷物はカルカッタまで船で運ぶ計画であったが、適当な船便がなくて、先登隊(吉野、島田、木村)は香港・カルカッタ間は航空機を利用した。それでも、日本を出るときは船で、神戸港では盛大な見送りをして頂いた。インドラ隊の寄贈で清酒「日本盛」の樽詰めが持ち込まれ、ラオス号の繫がれている岸壁では賑やかな酒盛りが始まった。栓を抜いて柄杓で飲む間はよかったが、そのうち樽を抱き上げて、じか飲みが始まった。炎天下での冷や酒のがお飲みもまた乙なものである。あらん限りのドラ声をはりあげての雑唱に、あたりの人々は驚き見とれている。まさに「歓呼の声に送られて、今ぞいで立つ父母の国」という調子である。この頃になると、デッキも、岸壁も黒山の人だかりで、何だか世界中の人に見送ってもらっているような感じであった。

8月12日に小生が羽田から、翌13日に上田が横浜から、最後に23日に上尾が羽田から無事日本脱出を終えた。

日本を出れば遠征隊は半分成功したようなものだが、とよく云われるが、飛行機に乗った時は真実ホツとした思いであった。

飛行機というもの

今度の遠征が楽しかったのはやはり初めての経験づくめであったためであろう。飛行機に乗るのもその一つであった。大体、あんなに大きいものが飛び上るのだから驚くほかはない。しかも、ジェット機であれば数分の間に1万メートルまで上って終うのだから、馬鹿みたいなものだ。7256mの頂上まで、何か月もかかって登ろうというのに。

もう一つの驚きは飛行機がはばたくという事である。今の飛行機は金属でできているから固いものだと

ばかり思っていたが、それが実はあまり固くはない。主翼の見える座席に坐っていると、固いはずの羽がブヨンブヨンとたわむのが見え、妙な具合である。じっとしていると何だか心細くなって来る。あんないい加減なものでは、強いエヤーポケットにでも入れればフチャッと曲ってしまうのではないかという気がする。パンコック辺で、強い雷雨に会い、機体はかなり激しく揺れた。残念ながらその時は夜でよく見えなかったが落ちなかったところを見ると、どうにか無事だったようである。

英語の電話

宿も決めずに出発し、さて香港では何処に泊ろうかなどと考えながらパンフレットに目を通していると、隣席にいた黒眼鏡のお兄さんが話しかけて来た。彼はJALの香港支店に勤める中国人で、休暇に東京へ遊びに行った帰りということであった。結局、その人の紹介でパレスホテルがその夜の宿になった。

さて、部屋に通されたが、する事がない。一つ、ベベ(笹谷)商会に電話でもしよう。英語でかけるのは億劫だが、やむを得まい。交通公社でくれた日常会話の本を開いてみる。「……………」、「……………」なるほど上手に書いてある。しかし、相手がこの通りの返事をしてくれれば申し分ないが、さもなければ一寸調子が悪いな。まあ何とかなるだろう、ともかくかけてみよう。勇気を出して、受話器を取り上げた。内線だから交換嬢が出る。「何番お願いします」、「はい」。「ハロー、ベベ商会ですか?」、「そうです」、「こちら京都大学の樋口と申しますが」、そこまで英語で云うと、今まで英語だったのが、「モンモン」と日本語に変わった。何だ、日本語が通じるじゃないか。案ずるより生むは易しとはこの事だ。通じる筈である。相手は歴とした日本人後藤氏であった。

臭い町

夜、カルカッタはダムダム空港に着いた。飛行機から出た途端、何とも云えぬ妙な臭いが鼻をついた。何の臭いだろう。動物園かどこかで嗅いだことのあるような臭いである。大体、臭いというのは測る尺度がなくて、何とかのような臭いとしか現わせないのは不便である。ところで今臭っているのは一体何のような臭いと云えばよいだろう。ともかく、変な臭いである。この瞬間から、カルカッタは臭い町という印象が刻み込まれた。その後いろいろ研究してみたが、今もって何の臭いか不明である。

先登の3人に迎えられ、雨の中をアンバサダーと云う立派な名前のボロ車でリットンホテルに向った。石油ランプでおぼろげに照し出された道は半分水浸しで雨に濡れながら半裸の人々や、二頭立ての牛車が行き交っていた。

ある日、ダイヤモンドハーバーへドライブとしゃれ

た。港の近くではココナツを売っている。早速試飲してみたが、大してうまくない。そのうちに、子供がぞろぞろたかって来たので並ばせて写真を撮った。皆機嫌よくここにこ笑いながらカメラに納まってくれた。さて、それから一騒動である。というのは、撮り終ると同時に子供達は全員かけよって来て「ボックス、ボックス」である。モデル料をよこせ、という事らしい一瞬呆気にとられた。しかし、彼等にとっては当然のことのようだ。結局この時は、運転手が助けてくれたが、かわいい顔をした子供達が金を寄せというのは何となく後味が悪く弱った。

しかし、インドでは貧乏人がサーブから金を貰うのは当り前のことで、全然お礼を云うべき筋のものではないらしい。人に金をやれる身分であることに感謝して、貰って頂いた事に礼を云えというような態度である。金をやると一言の挨拶もなしに立ち去る。もっとも我々にはできるかぎり金を出さずにすませることにしていたので、しばしばいつまでもつきまとわれる羽目におちいった。

小ネパール

カル Катタから乗ったおんぼろダコタ機がガンジスの濁流を渡り、インド大平原に別れを告げて緑の山なみを飛越えると、間もなく美しいカトマンズ盆地が開けてくる。

中央は聖なる川バグマティが流れ、緑の山の向うから白い山々がのぞいていることを除けば、京都盆地によく似たところだ。ここは小ネパールとも呼ばれ、その昔、蒙古族がヒマラヤの難関をこえて南下し、住みついた所と云われている。多分そのせいであろう、行きかう人々は我々と同じような顔つきが多く、親しみ深い。

カトマンズにはお寺が多く、仏教とヒンズー教とが混っていて、それぞれ違ったたたずまいを持っている。仏教の一番古いお寺と、一番大きいお寺とが町の西と東にあり、いずれも四角い塔を上にした大きな土饅頭が中心になっている。その塔の四面には四方を見通す目が描いてあり、四天王の一人「広目天」の目のように遠くを睨んでいる。奥の僧院では笛や太鼓を鳴らしながら賑やかにお勤めをしていた。仏像は極彩色で美しく、日本の侘びた感じとは程遠く、もっと人間臭いものを感じさせる。

ヒンズー教の一番格式高いお寺には、我々異教徒は入れて貰えない。バグマティ河に面した高みにあり、丁度金閣寺のように屋根は金張りである。門番が警備している横から覗くと、金色の大きな牛の像が見える。牛は聖なる動物である。前の河には洗濯場のようないくつかの張り出しがある。これは火葬場だそう。聞くところによるとヒンズー教徒は家の中で人が亡くなるのを嫌い、病気が重くなり余命いくばくもなくなる

と、お寺の隣りにあるWaiting Houseに入れられ、こと切れるとこの洗濯場でだびに付すのだそう。そして、灰を河に流せば万事終了ということであった。きわめて合理的ではあるが、いざお前の番だと云われた時にどんな気がするだろうとふと思った。死んでからでも階級は生きていて、いくつか並んでいる洗濯場のうち、上流にあるのは偉い人の分だそう。その上上等になると屋根まで付いていた。

ある日、オリンピックの松明がカトマンズに着いた。その夜、盛大な聖火歓迎の催しが行なわれ、ふとしたことから小生も招かれた。ネパールの民族舞踊など見せて貰ってから、カトマンズで一番立派なホテルでの晩餐会のお相伴にあずかり、親しくネパール国第三皇子と握手を交わすことができたのは光栄であった。半月近く安宿で単調な中国料理ばかり食べさせられていたので、久々に本格的な西洋料理が出たのには感激した。向うの人達は「折角日本であるのに、オリンピックの時にこちらに居られるのは残念ですね」と御世辞を云って下さるが、こちらはオリンピックどころではなく「だからこそ、ヒマラヤへ逃げて来たのだ」と云いたくなくなった。

ポカラ

ポカラの朝は素晴らしい一語につきる。少し早起きをしてホテル前の飛行場に出て見ると、北側にガネッシュ、アンナプルナⅠ峰、マチャブチャリ、Ⅲ峰、Ⅳ峰、Ⅱ峰、ラムジュンと7000~8000m級の山並みが丁度屏風を立てたように立ち並んでいる。朝日が昇り出すと今まで眠っていた山々は眼覚め、茜色に色づき始める。ヒマラヤ巒が美しい。神々しい景色に思わず身のひきしまる思いがする。飛行場は牧場と兼用で、牛、水牛、羊などが群れており、彼らの影がずっと西にのびている。はるか西の方の山あいにはダウラギリらしい白い峰がのぞいている。

キャラバン開始

ネパールの飛行場で滑走路の舗装されているのはカトマンズだけで、あとはただ平らであるというだけの所だ。我々の荷物は、ノートンワからバイラワに入りここからポカラまで空輸する予定であったが、バイラワは低地にあり、飛行場は泥田のような所あって一度雨が降ると三日位使えないというなげない飛行場である。八月の終り頃というときまだモンスーンが明けず、いじわるなことに三日に一度位の割合で雨が降るのである。

そうなるも飛行場にはどんどん荷物がたまり出し、遠征隊の荷物をいかに早くポカラに運ぶかということが大問題になる。カトマンズ、ポカラ、バイラワでは毎日無電で連絡をとりながら隊員達はそれぞれ飛行機会社に日参し、交渉を続けた。結局、9月8日に予定よりも10日程遅れて空輸することができ、夕方シェル

パー人を除く全員と荷物が勢揃いした。

一方、グレンア・ドームをねらう千葉山岳連盟隊は一足先にバイラワで順番待ちをしていたため、朝の便で荷物を空輸し終えていた。彼等のベースキャンプ予定地はわれわれのすぐ隣りであるから、三組のキャラバンが相前後して同じ道筋を辿ることになる。後塵を拝するのはわが意にあらず、ということになり、翌朝出発することに決定した。さあそれからが大変である。荷物の仕分けをするもの、ポーターを備へに行くもの、食糧、燃料を仕入れに行くもの、テンヤワンヤの大騒ぎが夜半まで続いた。翌日も早朝から荷物の仕分けの仕事が続き、予定より少しおくれたが9時半頃にキャラバンを開始することができた。

山旅

キャラバンの朝は「サーブ、お茶」で明ける。寝袋から顔だけ出して、タププリ入ったミルクティーを飲みほす。煙草を一本喫い終ってからテントを出る。シェルパテントではもう食事の用意ができています。

ポーター達は、とうもろこしの粉を水でねって火にかけ、糊のようにしたものをしゃがみこんで食べている。たまにタカノツメなどを一緒に食べている者もあるが、大抵はおかず無しである。あれでよく40キロもの荷物を担げるものだ。

隊員のテントをかつぐポーターを最後に一日のキャラバンが始まる。サーブ達はボロシャツに半ズボン、サブルック一つという軽装で調子がよい。連絡将校のキャプテン・ラナは駿足である。彼は隊員の誰かをつかまえては、しゃべりながら猛烈な勢いで歩いている。

モディ・コーラ最奥の村チョムロンに着く。ここで問題が起った。というのは、ここから上は聖域であり神々の住いである。したがって、階級の低い者や女は立ち入り厳禁である。もし入るようなことがあれば神様の怒りに触れ、きっと面倒なことがもち上るであろう。また、聖域では殺生をつつしまねばならないから鶏もたくさん売るわけにはいかない。今夜の分だけでもがまんしろ。その上、聖域に入るからにはそれに見合うだけのお賽銭をあける、などという。この際、なるべく村人を刺激せず、穏便に済ませた方がよからうということになり、できるだけ彼等の言う通りにした。ただ、お賽銭については帰路改めて話をしよう、ということでも何とか通り抜けた。

この辺りから連日雨で、蛭になやまされた。彼等は下草の裏側や濡れた岩の上で我々の通るのを待ち構えており、足が触れるや否や吸いついて来る。そして足首の処から靴下の中に潜り込み、血を吸う。目の粗い靴下をはいているときめんである。南アルプスで成功したことを思い出して、ズボンの中にDDTを入れてみたがあまり効き目がない。婦人用のナイロストッキングが有効だ、などと云い出したが後の祭りであ

る。一度吸われると、その血の臭いを嗅ぎつけるのかたくさん蛭がそこに集中してくる。そっと靴下をめくると、一カ所に十位たかかっており、それにはぞつとさせられる。素足のポーター達は、気の毒にも足を血まみれにして歩いている。それでも彼等は馴れたもので、先を斜めに切った長目の竹を持って歩き、蛭が吸いつくと荷物を担いで立ったまま器用にそのへらでこそげ落していた。終り頃には少し馴れたが、この蛭の攻撃はベースキャンプまで続いた。特に夜寝る時は脅威であった。隊員共はくやしきめに、如何に残酷に蛭を殺すかということに腐心し、ガスライターで燃やしたり、石ですりつぶしたり、まとめてピースの空缶で蒸し焼きにしたりして憂さを晴らしていた。

最後の泊り場はヒンコーであった。快適な岩小屋であるが、もう標高は3000mを越えているのでかなり寒い。その上雨に濡れている。寒いのと、腹がへったのと、裸同様のポーター達は怒り出し、もうこれ以上上へは行かないと怒り出した。ナイケ(ポーター頭)がカンカンになってどなっている。サーダーのバサンも同じようにどなっている。おどしたり、すかしたり、なだめたり、いろいろの手を使ってポーターに応待している。そのうち、夕食の用意ができて暫らく休戦。食事の時よく聞くと、チョムロンで雇ったポーター共が、ここから上は流れの急な渡渉箇所が多いとか、道が非常に悪いとか云って、ポカラから来た連中をそそのかしているらしい。こういう問題は全てサーダーに任せてあるから、我々は部外者のようなものである。小柄でおとなしそうなバサンも、ポーターの前ではうんと強気で堂々としており、さすが名サーダーの名に恥じない。結局この問題は、いやな奴は帰れ、ということになり、実際ここで何人か解雇されたが、食後ナイケがテントに入って来て、上まで行きますということでもケリがついた。

ベースキャンプ

標高4000m。アンナプルナ南氷河側谷の中に建設。西にはガネッシュがデンと腰を据え、南にはヒウンチュリが頭上に迫り、東にはモディコーラをはさんで世界で一美番しい山と云われるマチャブチャリが聳え、北にはモレーンの上にアンナプルナの主峰が白く輝いている。まさしく聖域である。ガネッシュは氷河をまとい、急傾斜の氷壁に守られて少々手ごわそうである。

まわりは緑の草原で羊飼いの小屋も二つ三つ点在する。食糧係りが連絡将校と一緒に羊を買いに行き、モリモリ肉のついたのをひっぱって帰って来た。その夜はジンギスカン料理であった。

雪崩れ(その一)

我々はこの山行でしばしば雪崩れに遭遇した。その第一幕。時、9日21日午後2時、所、アンナプルナ南氷河上、ルートに使った草付き尾根の末端付近。

ほとんど全員でポッカし、CⅠを建設しての帰り道
 どんどん飛ばして下りて行くシェルパについて引きず
 られるようにして急な草付きを下ったが、足が痛くな
 って南氷河に下りる直前でサーブ3人(ジャン、クロ、
 ポッポ)は少々昼寝をした。シェルパ達はさきに氷河
 に下り、デブリを横断して先日までデポ地にしていた
 小高い所で休んでいた。「行こか」とジャン(樋口)
 が声をかけ、全員起き上り、ポッポ(上田)が登りに
 作ったバケツを伝ってデブリの上を下り立った。ポッ
 ポは一番後から下りたが、下りきるや否や何を思った
 か一目散にシェルパの方に向かって走り下って行った。
 ジャンは急な草付きの下りで痛めた足をひきずりなが
 らチンパを引き引きゆっくりとデブリの上をトラバ
 ース気味に下っていた。クロ(島田)はその後に続い
 ている。中頃まで来たとき左の方(上部)で雷の鳴るよ
 うな音が聞こえた。右の方からは、ガネッシュ氷河の
 合流点でセラックの崩壊による音がしょっちゅう聞
 えてくるが、左の方からは初めてである。デポ地から
 正面に見えるゴルジュに雪崩が起ったのかと思った。
 それにしても音が長く続くなと思っていると、先に渡
 り切って休んでいたシェルパがピーッと鋭い口笛いた
 振り返ると、津波のような氷の流れが、すぐそこまで
 押し寄せてきているではないか。慌てた。足の痛い
 のも何のその、走った、走った、何も考えずに。かなり
 走ってもういいだろうと振り返ると、前より近く、ほ
 んの2、3メートルの所から氷がおおいかぶさって来
 るではないか。これはいかん。走れ、走れとばかり闇
 雲に走った。100m 8秒位のスピードで。ポッポが前
 に見えた。「クロはどうした」「大丈夫です」との答
 えに正直助かったと思った。命拾いだ。安全地帯まで
 逃げのび、振り返ったが雪崩はまだ動いている。粘性
 の大きい流体のようだ。止まるのを見とどけてホッと
 した。それにしてもよく走ったものだ。咽喉がかわい
 て、うまくものが云えない。一休みしてシェルパ共の
 見物席に行き、ニコニコした顔に迎えられた。

よく見ると、もう一つ上の谷からも同時に雪崩が出
 ている。かなり大規模なものだ。我々を襲ったのは、
 草付き尾根の右側の谷、先刻までは水がチョロチョロ
 と流れていただけの谷から出ており、草付きに沿って
 右に折れ、扇状に拡がっている。どれだけ走ったかよ
 く判らないが、デブリの半分以上は走っただろう。
 クロは、少し早く気がついたそうである。デブリの
 真中で雉を打とうとして、ベルトを弛めた途端に音が
 したので振り向くと、谷から雪崩があられ出て来る
 ところだったそうで、彼はズボンと落とさないよう引
 っぱりながら必死で走ったという。

ポッポはほぼ横断し終る頃に雪崩に気付き、ジャン
 とクロが必死に走るのを見ていた。やきもきしながら
 両手で目を覆ったり、聞いたり、自分も逃げたり、ま

た目を覆ったり…………。「クロはんもこれで終りか」

「この遠征もこれで終りか」と思ったという。

この地点については往路に少し懸念はしたが、デ
 ブリは真黒でかなり古く思えたので、まず大丈夫と考
 えていた。仰ぎ見ると、大きな氷塊がスラブの上に乗
 っており、少々の危険は感じたが、落ちてくるまでに壊
 れてしまいうらう位に考えていた。結局上部の地形判
 断が甘かったわけで、実はこの小さい谷は懸垂氷河の
 下部に漏斗状に開いており、氷河の崩壊した氷をかき
 集めて流す樋の役目をしていることが後に判った。

B Cに帰ってからも雪崩の話でもちきりであった。
 夕食のときシェルパは、「サーブは死んだと思ったか
 ?」と聞くと「イエス」と答えられてしまった。

雪崩れ(その二)

時、10月2日、午後1時頃、所、ガネッシュ氷河中
 流部。

CⅢの位置が決まらず、いらいらしていた。前の偵
 察したククリ尾根のさらに上部を見ようと偵察が繰り返
 返されていた。ククリ尾根に取付くには標高差 200m
 位のデブリ地帯を一気に通過しなければならない。ジ
 ャン、コッペ、ミンマの3人は、そこを通過していると
 き大雪崩に会い、右側のセラック尾根に逃げた。どう
 も物騒である。雪崩が終ってからも、直径数メートル
 もある落石が続いている。昼食をとり、意気沮喪して
 下りにかかる。デブリ地帯を通過して一息ついている
 と、上の方で「ボン」と異様な音がした。見上げると
 稜線近くで雪煙が上がり、それが猛烈な勢いで氷河を
 駆け下りて来る。丁度入道雲がもくもく上るのを上下
 逆にし、スピードをはるかに早めたような具合である
 千載一遇の好機逸すべからずとばかり、8ミリカメラ
 を取出す。コッペもカメラを出している。「逃げる
 とき、云ってくれよ」と云いおいてカメラを回す。雪
 煙雪崩であるからたいしたことはあるまい。できるだけ
 近くに来るまで映画に納めてやろうと思って撮り続
 けたが、すぐに「もう逃げなあきませんわ」と声がか
 かる。ファインダーから目を離して驚いた。雪煙はす
 ぐ目の前まで来ているではないか。またもや逃げた。
 3人共必死である。ほんの20メートル程走った頃、も
 う雪煙に追いつかれた。爆風を伴った猛烈な地吹雪で
 ある。コッペが足をとられてうつ伏せに倒れ、また慌
 てて駆け出す一幕もあり、三人三様大いに逃げた。地
 吹雪がおさまり、みな一ふるいブルブルと震って、
 大いに驚いたさまを語り合った。雪崩の本体が我々に
 まで届かなかったので助かった。それにしても大いに
 キモを冷やし、体を冷やし、頭を冷やした。

雪崩れ(その三)

10月9日、時刻不明、CⅢ付近。ククリ尾根下部の
 デブリ地帯を早朝に通過するため、セラック尾根末端
 の足元にCⅢが建設された。その日CⅣへの荷上げを

済ませてCⅢへ帰ってくると、何となく様子がおかし
 い、よく見るとテントの両側がデブリに覆われている。
 懸念していたセラックがとうとう崩壊したらしい。幸
 いなことにCⅢそのものはやられていない。実は昨日
 夕食の時にセラックの基部が崩壊して雪崩が起り、ミ
 ンマの警報でコッペと3人で、テントから逃げだした
 のだったが、我々の地形判断によると、もっと大規模
 な崩壊が起っても大丈夫という結論に達していたので
 ある。CⅢは少し高みに張ってあったので、デブリは
 これを避けて両側に分かれている。最も近いものはテ
 ントから3メートル位の所にブロックが転がっており
 北側には直径十数メートルの巨大なブロックが滑っ
 てきている。テントの上側にある幅5メートル位のクレ
 バスは、雪崩の通り道だけは完全に埋まっている。デ
 ブリは直径数センチの氷をザラメ雪でとじこめた、丁
 度粒箱のようなブロック(直径数十センチ~数メー
 トル)と、青氷そのもののブロック(1メートル以下)
 と、ザラメ雪とからなり、不気味な様相を呈している
 巨大なブロックの通った跡は深くえぐられ、樋状にな
 っている。このブロックがクレバスを越える時、クレ
 バスの上端の雪を押し来たらしく、ブロックの前面
 は三角形に新雪が盛り上っており、よく見るとその中
 にツララのついた小さいブロックが含まれている。そ
 れにしても、我々の地形判断はきわめて(ギリギリ)
 正しく、予想通り「まず大丈夫」だったわけである。
 我々はこの雪崩が留守中に起ったことに感謝した。も
 しテントに居る時、しかも夜中に起っていたら、ど
 ちらに逃げるか迷ったあげく、雪崩の中心に向かって逃
 げたかも知れないからである。

一番嬉しかった時、一番心配した時

10月13日、吉野、木村、上田の3人がCⅣから頂上
 目指して出かけた。小生と上尾とはCⅣで刻々入る無
 電を聞きながら一喜一憂していたが、最後の雪庇を乗
 り越えて稜線に出たという報が入ると一安心した。と
 いうのは技術的な困難は全て稜線に出るまでにあると
 見ていたからである。彼等からの通信によれば、稜線
 に出たところからはどれが最高峰かわからない、と
 いう。無理もない。ユルから似たような高さのピークを
 比較せよというのがそもそも無理というものだ。とも
 かく南峰(アンナブル南峰)だから南へ行けとい
 うことになった。

ガネッシュは、明らかに独立峰と見なせるが、その
 稜線は南北に長く、幾つかのピークをもっている。我
 々はそれらを南から南峰、中央峰、マイナーピーク、
 北峰と名付けたが、近くから見るとどれが最高峰か
 わからない。出発前にカトマンズで、J.O.M.ロバーツ
 氏に聞いた話では、南峰が最高峰だということであ
 った。というようなわけもあって彼等は南へ向った。

稜線へ出ればもう困難はないとは思っていたものの
 中央峰登頂に成功したとの連絡が入った時はやはり感
 激して、CⅣにいる連中は思わず握手を交した。うれ
 しい。とうとうやった。交わすべき酒がここまで上
 っていないので、やむを得ず紅茶が何かで乾盃をする。
 シェルパもうれしそうである。バラ・サーブもやっ
 と肩の荷が下りた思いである。

彼等は1時間ばかり頂上にて下りにかかった。と
 ころが、それからが大変である。というのは、ルート
 は主稜線の東側にあるため、三時を過ぎると陽がかけ
 り、雪は再び凍り始め、急斜面の下降は極度に困難と
 なる。一時間毎に交信するが、「今何番目のフィッ
 スの所にいる。全員元気」とか「どこそこで、フィ
 ス工作中。全員元気」という返事である。傾斜がき
 つくワン・アット・ア・タイムで行動せねばなら
 ないで、手間どる。「がんばれ」「気をつけて下がれ」、
 「慎重に降りろ」などと送信する。ここで事故を起さ
 れたら大変である。八時頃まで出ていた月もかくれて
 しまった。真っ暗な中で彼等はよく頑張っている。五
 回目の交信の時、もうCⅣのすぐ近くまで来ていると
 いう知らせを受け、無電機をつけっぱなしにしておく
 九時半、「CⅣに帰りました」との報にホッとした。
 これで初登頂も無事終った。

マイナーピーク

10月15日、上尾とミンマは南峰へ、小生とカルマは
 北峰へ向った。第一次登頂隊が立派な道をつけてお
 いてくれたので、仕事はかどる。最後のフィックスを
 使って巨大な雪庇を乗り越え稜線に首を出すと、冷
 い風とダウラギリが迎えてくれた。続いてカルマが上
 ってくる。一休みして北峰に向って歩きだす。北に向
 う稜線はあまり広くはない、東西はほとんど垂直に近
 い。ところどころにコブがあり、そのコブの所は両側
 共きわめて急傾斜である。二つ目のコブに着く。マイ
 ナーピークである。東側をカルマが越えかけたが、「
 行けぬ」という。交代してのぞくと、なるほど垂直に
 落ちている。両側の急斜面ならどうか通れそうでは
 ある。ここでハタと思案に暮れた。「行くべきか、行
 かざるべきか」

悩みの種はこうである。ここから北峰までは少く見
 積っても3時間はかかるだろう。だから、帰路稜線から
 の下り口に着くのは5時頃にはなってしまうだろう。
 そうなると第一次隊の二の舞を演ずることになる。あ
 れは繰り返すべきではない。さりとて、日帰りでは何と
 かなると考えていたのでビバークの用意はしていない。
 せめてトランシーバーでもあれば、南峰に向っている
 上尾らのビバーク用具を下り口にデホしておいてもら
 うことも可能だが、いまはそれもならず。用具なしの
 7000mでのビバークを頼りに行動するのは賢明とはい
 えまい。第一次ですでに3人が登頂し、今4人目が最

高峰に向っている。彼等は間もなく到達するであろうところで5人目が不確実なビバークの危険を犯してでも行くべきであろうか。『安全第一』、このお題目が少々邪魔である。

結局、ここから引き返すことに決心した。そう伝えるとカルマも残念そうである。仕方がない。ヤクタボでも吸って、昼寝でもしよう。ここも頂上の一つだ。こうきめると急に気が楽になった。

ここからの眺めは、素晴らしい一語につきる。いままで仰ぎ見ていたマチャブチャリも、もう足下になり稜線に出たとき迎えてくれたダウラギリは毅然とした姿で立っている。北には人類最初の8000m、アンナプルナ主峰がデンとひかえており、それから東にグリーンシアドーム、ガンガブルナ、Ⅲ峰、Ⅳ峰、Ⅴ峰と続いている。1958年に今西さんと藤平さんが苦しい思いをされたのはあの辺りだろうか。

南峰の上ではすでに到着した上尾達が、写真でも撮っているであろう、小さく人影が見える。

永河円屋根峰 (Glacier Dome)

我々のBCの近くには、千葉岳連隊がBCを作っており、10月16日グリーンシアドームの初登頂に成功した。CⅠ撤収の日、そこを訪れると食糧が残り少ないとかで元気がない。幸い我々の方はポッポサーブのお蔭で、まだかなり潤沢である。そこで相談の結果、彼等を夕食に招待しようということになった。しかし、ただ「おいで下さい」と云うだけでは面白くない。一つ招待状を出そうじゃないかというわけで苦心の末、次のような招待状ができた。

御招待状

貴隊の氷河円屋根峰と、当隊の安難勿^レ振南峰の初登頂を祝し、下記により記念晩餐会を催したく、ここに謹んで御招待申し上げます。御多忙中とは存じますが、万障御繰合せの上、何卒御出席下さいますよう伏して御願ひ申し上げます。

記

日時 自昭和参拾九年拾月貳拾壹日午後四時
会場 狂徒大学根張暇来也遠征隊基本幕営地
(壱万貳千八百尺)

御献立

- 一、前菜
 - 一、水腹(スープ)
 - 一、真茶(マチャはネパール語の魚)
 - 一、畜肉
 - 一、其他
- 麦酒乾盃予定(但、到来品ある場合)

これをウイスキーの空箱に書き、赤旗用の竹竿の先を割ってはさみ、差し出す時の所作を教えてキッチンボーイに持たせてやった。暫くして彼はトイレットペーパーに長々と書かれた御礼状を挟んで帰って来た。

それから全員腕によりをかけて御馳走を作って彼等を迎えた。話ははずみ、夜の氷河に歌が流れた。マチャブチャリからの月が出て夜空に冴えていた。

茶店

ビレタティからポカラへの道は国道2号線といった所か。ところどころに宿場があり、ホテル、食堂、喫茶店がある。試みに入ってみる。蠅が舞っている。薄暗い土間の角に蕙が敷いてある所が座席である。お茶を注文すると、昔ジャムを入れるのに使ったような厚手のガラスのコップの、くもったやつに入ったミルクティーを蕙の前の床においてくれる。一ぱい25パイサ(約13円)である。店によっては水牛の肉の燻製、ゆで卵、とうもろこしなどを売っている。その上、ロキシーまで。帰りのキャラバンは楽しい。身も心も軽く、つぎつぎと買い食い、買い飲みもする。なかなか調子がい。シェルパ共はしようのないサーブ達だとも云いたげに、茶店をのぞきこみながら通り過ぎて行く。

ポカラに近くなった頃、チベットの難民部落の前を通った。すぐ横に茶店がある。この部落の気のきいた者が店を出しているらしい。屋根も柱も壁も全部竹製である。ここで茶を飲み、煎餅を噛っていると柱にかかったチベット刀が目に入った。売るか、と聞くと、50ルピーならと答えた人相のあまりよくないおやじである。80ルピーでどうだ、と値切りにかかる。45、43、42、と少しづつ下げてきて、40ルピーでどうだ、これ以下では売らない、と云う。結局40ルピーで買った。よい買物をしたと大威張りして、パサンに追いついて見せると、「高々30ルピーの品です。これからは、買物をする時にはミンマを連れておいでなさい」と、たしなめられた。

水浴び

ポカラにはペワタルと云う大きな湖(ダムの人造湖)がある。ポカラ何景とかの一つで美しい所である。ある日、そこへ泳ぎに行った。ホテルの庭に張ったテントから15分ほどで湖畔に出る。シェルパ達も山で汚れた我々の衣類の洗濯をするためについて来た。来て見ると水はあまり美しくはない。その上、よく見ると水牛が首だけ出して水につかっている。一寸気味が悪い。それでも、折角来たのだからと、できるだけ上流まで行って飛び込んだ。もと水泳選手などと云い出す者もあり、結構楽しかった。所かわれば何とやら、おっかなびっくり水牛と一緒に泳ぐのも、ネパールならではの、という所か。

カトマンズ以後

11月11日、舟橋氏がカンチェンジュンガ遠征の件でカトマンズに来られた。小生は協力を依頼され、交渉のためシッキムに入るべく、ダージリンに飛んだが許可が得られず、カルカッタに戻り、デリーで折衝中の氏と連絡をとりながら再びカトマンズに行った後、12

月3日にデリーで氏と再会した。帰国される氏の後を引継ぎデリーに滞在した後、ルルキーおよびブナーの研究所を訪問し、12月19日、羽田に着いた。

上尾は、バキスタン、アフガニスタンまで足をのばし、12月23日帰国した。帰路、カルカッタで偶然遇い一緒にバンコックの京都大学東南アジアセンターを訪れ、お世話になった。

現役の連中は、二組に別れて旅行に出かけた。外国人がネパール国内を旅行するには、外務省の許可が必要である。チベットの国境線から25里以北は、外国人立入り禁止区域なので、暖めていた計画の許可はなかなか貰えず、結局、計画を変更して、なんとか旅行許可を得て出発した。

吉野・木村隊は再びポカラに引き返し、待っていた

ダッハシュタイン

広瀬幸治

京都から時報に何か書くようにという御注文であるがこの頃は日常の俗事に追われて、AACKの諸氏にお伝えするような話もなく、この7月にオランダにいる寺本と一緒に登ったダッハシュタインのことも書いてかんべんしていただくより仕方がない。

ダッハシュタインというのはオーストリア、ザルツブルグの少し南にあり、ティローラーアルペンの東端高さ3000m±3mという大変だが、地図によって高さが異なり、どれが本当か知らない。おそらくオーストリア山岳会発行の1/25,000の2997mというのが正しいのではないかと思う。案内書によると「やや困難、めまいのする者は行くな」とある。その意味は登ってみてわかった。

もっと近いところにもう少し名の知れた山がたくさんあるのになぜデュッセルドルフから800kmも車をとばしてこの山に登りに行ったか、という理由がどうもはっきりしないが、去年の12月にやはり寺本とこの近くにスキーに行った時、実はスキーはほとんどせず、もっぱら山見物に終始したのだが、この山をみて「ダッハシュタインはええ山や」ということで両者の意見が一致して以来、夏山はこれに決まってしまう。このほかにわれわれの旅行は、ドロミテへ行ってドライチンネをみようというもう一つの目的があった。ドライチンネはとも登る元気はないから見るだけである北側からダッハシュタインに登るには、まず北側の谷間にあるハルシュテッターゼの峯から、称名の坂を3つつかないような道をがつつ登ってシモニヒッテ

カルマを連れて、ダウラギリ周辺の旅に出た。初めての計画はダウラー一周であったが、北側の通行許可が得られなかったため、カリガンダキ沿いにトウクチエに出て、ダンブッシュ峠を経てフレンチコルまで往復し、ついで南からマヤンディコーラに入り、ダウラギリの南面を見て、カトマンズに戻った。その後、カトマンズからタルケギャン経由、ガンジャ・ラを往復している。

一方、島田・上田隊はノルブを連れて、まずランタン谷に入り、ガンチェンボに近づき、次はチリメ・コーラからパンサン・ラを越えてブリ・ガンダキに出てサマに達し、ラルキヤ・ラを経てトンジエに出て、ポカラ経由で1月6日カトマンズに帰った。

4人は2月19日に揃って羽田に着いた。

に行かねばならぬ。トレーニング不足の身にはこれがあるがあまりありがたないが、幸いに少し遠まわりになるがケーブルカーを利用して高さを3分の2ぐらいかせぐことができる。ケーブルの終点のレストランで昼食を食い、同時にビールを飲んでほろよいきんで歩き出したが、我々のダッハシュタイン登山のはじまりであった。

はいまつと岩のごろごろした道を迎って3時間でシモニヒッテについたときは一面に夕立雲が立ちこめ雷が鳴っていた。ヒュッテはオーストリア山岳会経営で素泊り20シリング(約280円)寺本はオランダ山岳会の会員だからその半額である。もちろんめしも食え、ビールもあるというのでまたビール。

小屋のすぐ横に小さな教会があり壁に「第2次大戦でたおれた親愛なる会員のために」と書いてある。たまたま一緒になったミュンヘンから来たひげづらの男は、それが気に入らぬらしい。我々を同志とみなし、オーストリアはもともとドイツ領でヒットラーが統一した時には大歓迎をしたくせに、今になって被害者づらをするのはけしからんなどとヒソヒソ声で云う。そのヒゲ男や、ハンプルグの若い男などから明日は一緒に登ろうと申し込まれ、充分時間があるからゆっくりしようと思っていたのに4時にたたき起され、4時半出発というハメになった。

シモニヒッテからいったんカールの底に下り、それから2時間広い氷河の中を登る。氷河といっても感じは5月の潤沢と思えばよい。ただまわりの岩稜は

ブッシュが全然ないからすっきりしているが、逆にいえば味気ない気もする。

登るうちにミュンヘンのヒゲ男ははるかかなたにおくれてしまい、休んでいると追いついて来て、ふうふういいながら「諸君はなかなかいいテンポである」と云わねばならぬ、などといった。

ダッハシュタインのミソは最後の300mくらいの岩峰である。こんなところのぼるんかいな、と思うような岩場で、目まいのする者は行くなとはこのことである。もしこれをまともに登るなら「やや困難、どころのさわぎではないが、実はいたるところに太い鋼材で手すりや足場が作ってあって、四肢健全であれば登れるようになっている。つまり300mの梯子を登るようなものだから、けっこう息がきれる。ヒュッテから3時間で頂上についた。天気がよく、ベルヒテスガーデンやグロックナーの山々がかすんで見える。

頂上で休んでいると次々に登山者がやってきた。日本の夏山とは比較にならないが、それでもせまい頂上

に20人くらいになった。このごろのヨーロッパは日本人にみちあふれているが、さすがにこのへんでは珍らしいらしく手帖を出して日本語でサインしろという註文が多い。ギッペルクロイツにとりつけた箱の中の署名簿にもサインし、下りは南西稜に沿ってアダムク氷河のホルへ出る。ここまでくればすんだ様なもので、あとは広い氷河をかけ下ってアダムクヒュッテを経てこちら側は残念ながらケーブルがないのでガタガタ道をうんざりしながら下り、ひるすぎにゴザウゼーへ出た。数こそ少ないがここまでくるとショートパンツにサングラスなどというスタイルがあらわれはじめ、かくしてダッハシュタイン登山はあっけなく終わった。

このあと車でチロルを横断してイタリーへ出た。その間にグロックナーの峠ごえがあるが、霧で山は全然見えず、ところがイタリーへ出ると、とたんに快晴になり、ドロミテの山の美しさをたんのうした。来年の夏はこの辺でまた「やや困難、程度」のをみつめて登りたいと思うが、機会があるかどうか。

木曜講座 —その5—

この講座は 毎週木曜日夜AACKに集まる若手のAACK会員で行なわれた講義に若干手を加えたものである。

Skyang Kangri

高橋 旨 象

Shkang Kangri (7544m) は Staircase Peak とも云われるが、この名は頂上から東にするどく傾斜し、さらに南東に伸びて Windy Gap (6233m) に至る稜線に、幾つものテラスが階段状につらなっているところから由来している。7544mという高さは、現在では7000m級の未踏峰中で上位を占めるが、昔も今もそれほど注目を浴びていないようである。云うまでもなくカラコラムの最高峰、バルトロの盟主K2から数キロ北東、圧倒的なK2のピラミッドの一角北東山稜上の一つの突起と見なすこともできる、という気の毒な位置にあるからである。カラコラムの登山史の中で、Skyan Kangri の名は Windy Gap とともに今世紀初めから登場してはいるが、いつにおいてもK2登頂という大ドラマの中のほんの脇役であるにすぎなかった。1909年 Skyang Kangri は Abruzzi 公によりはじめて試登された。そしてそれが現在までこの山に残されたただ一度の記録である。Abruzzi 公を隊長とするこのイタリア遠征隊の最大の目標はもちろんK2

登頂であり、Skyang Kangri 登攀もその一環であった。最大の目標は果せなかったが、南東、北西および北東の各山稜へのトレースと、Sella Pass (6558m) 登攀によるK2の登路偵察、Negrotto 侯による10万分の1地図の作成、Sella による数多くのすぐれた写真、De Filippi の地理学的研究、Chogolisa での当時の人類到達高度の最高記録の達成など、探検の模範となる数々の成果をこの隊があげたことはよく知られている。

Skyang Kangri の試登は、Godwin Austen 氷河の源頭にある鞍部、Windy Gap よりなされた。この Windy Gap には1902年の Eckenstein を隊長とする国際遠征隊(イギリス、オーストリア、スイス)の二人のメンバー、Wessely と Guillardmod が初登攀しK2の北東山稜を偵察しようとしたが悪天候のため退却している。

1909年のイタリア隊は、6月14日 Windy Gap に到着した。De Filippi の記述によれば、…… G. Au

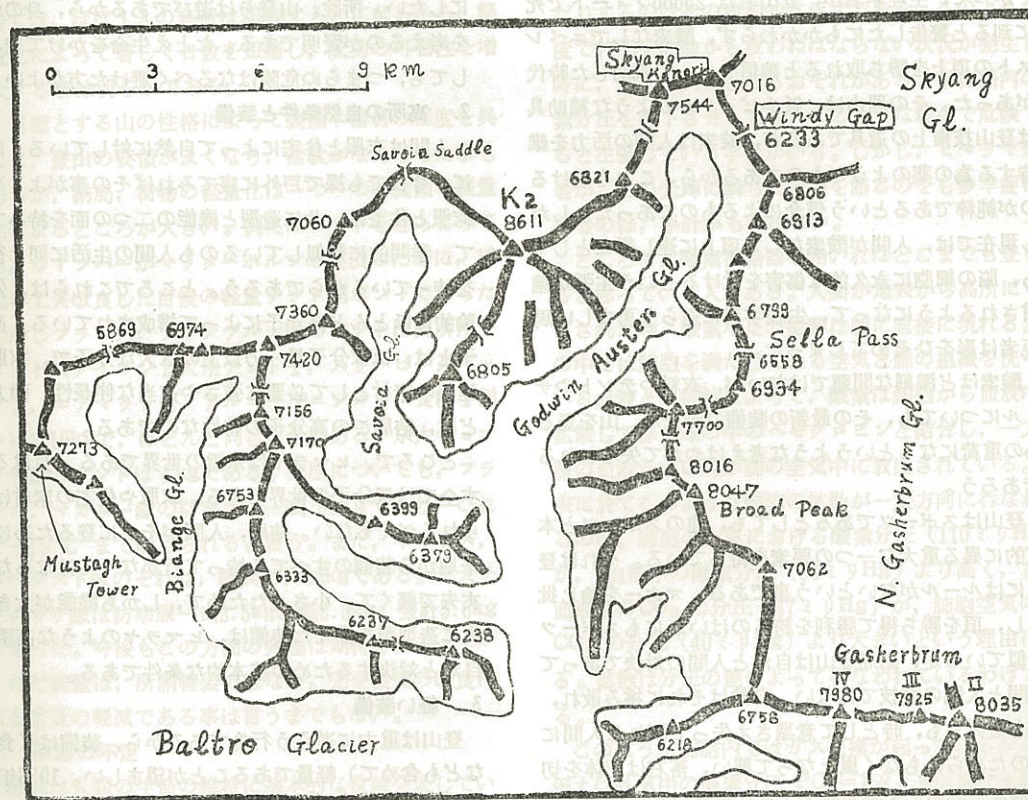
sten 氷河から Gap への登りはゆるやかで、最後の30m程が少し急斜面であるだけであった。Gapは広く一部が岩でさえぎられているだけで、「Windy」という名にふさわしかった。北には幅広い氷のリッジが階段状につらなると、G. Austen 氷河奥のバットレスと接している。東側は急斜面で不安定な氷河に落ち込んでおり、この氷河は荷物を背負ったクーリーでは通過困難であり、南東に流れる大きなゆるやかな氷河(Skyang Lumgpa 氷河)に合流している。その東の6100~6700m級の連続したピークから成る山稜は、Skyang Kangri の北山稜とつらなっているようにみえる Windy Gap はK2の東面を望む上でもっとも適した地点である。……

6月24日、Abruzzi 公らはK2とSkyang Kangriの東面をさらに調べ、また北面をも偵察するべく、Windy Gap から北へ稜線を辿り、最初のテラスに小キャンプを設けた。K2の全容を眺めることのできた公はついでSkyang Kangri の登頂を目指した。

6月25日、出発後3時間に彼等は二番目のテラス(6600m)に達した。しかし、間もなく2本の大きなベルグシュルンドにより登路は切断されてしまった。彼等はあらゆる手段で通過を試みたが果せず、登行を断念

して引返した。この地点からはK2の北面はもちろん Windy Gap の東側の氷河と山々、G. Austen氷河の西面バットレス、Gasherbrum 山群なども望見することができた。

以上が Skyang Kangri にしるされたトレースであるが、1929年には Spoletto 公のK2一周、1937年は Shipton と Tillman の Shaksgam 溪谷とK2の北面踏査がおこなわれた。ついで1938年には Houston を隊長とするアメリカK2遠征隊が、1909年のイタリア隊の復習をおこない、Windy Gap より北東山稜を偵察したが、危険な軟雪のためすぐに引返している。以後1939年の Wiessner のアメリカ隊、1953年の Houston のアメリカ隊、登頂に成功した1954年の Desio のイタリア隊……とK2を目指した遠征隊はすべて南東山稜を辿り、Windy Gap はときどきK2の東面偵察のため登攀されたが、Skyang Kangri へと続く北東山稜はかえりみられぬままであった。K2を主役とするドラマが一応の幕を閉じて12年、Skyang Kangri がスケールは小さいながらも主役となり得る時期は、インド、パキスタン、中国のからむ国際政治情勢の如何による許可取得の可能性とも関連して、まだ数年後のことであろう。



バルトロ氷河上部 "Marcus Schmuck Broad Peak"より

参考文献

Filippo De Filippi (1911): The Expedition of H.R.H. the Duke of the Abruzzi to the [Karakoram Himalayas, Alpine Journal, 25, 331—347.

Ardito Desio (1955): Italienische Karakorum—Expedition 1954, Berge der Welt 1955, 39—72, Switzerland.

Fosco Maraini (1960): Gasherbrum 4, Italia.

<日本語訳: ガッシャブルム4, カラコルムの峻峰登頂記録, 牧野文子訳, 理論社刊, 東京, 1962>

Kenneth Mason (1955): Abode of Snow, London. <日本語訳: ヒマラヤその探検と登山の歴史一, 田辺主計・望月達夫共訳, 白水社, 1957, 東京>

繊維装備の基礎知識

安 田 武

1. まえがき

山登りは文明人の行為である。とは有名な言葉であるが、文明を利用して満足できる行為であるかは疑わしい。科学的装備を完備して未登の頂に挑むと言うような勇ましい登山であっても、ともすれば心の中では文明に逆らって原始的な何かを求め、それが純粋の精神であるという気負いがある。

かつて、生理学者が、登山者は25000フィートで死に到ると警告したにもかかわらず、酸素なしでエベレストの頂上を勝ち取れると確信をもって表明した時代があった。その理由は、靴やピッケルのような補助具は登山技術上の道具であるが、酸素は人間の活力を維持する為の薬のようなものであるから、これを避けるのが純粋であるという信念によるものであった。しかし現在では、人間が酸素なしで頂上に達し得たとしても、脳の細胞に永久的な傷害を受けるという主張が確信されるようになって、生理学者に逆らう勇ましい馬鹿者は影をひそめてしまった。

酸素ほど深刻な問題ではないが、衣料やテントやザイルについても、その最新の装備の研究が、山を登る心の重荷になるというような考えはやがて失なわれるであろう。

登山はスポーツであるとしても、他のスポーツと本質的に異なる重大な一つの要素を持っている。それは登山にはルールがないという事である。マナーを論じ批評し、頂を勝ち得て勝利を誇るのはいかにもスポーツと似ているが、結局登山は自然と人間の対決であって人間と人間の競技ではない。自然はそれに挑み敗れ、斗志も体力も、時として意識さえ失って倒れた人間に何のためらいもなく嵐となって襲い、落石は死体を切り裂き、やがて太陽が嘲るように暖かい光を投げかけて肉体を腐らせる。登山者を見守る審判もドクターストップもない。山は偉大な墓標であるというが、山登

りは始めから死をかけた自然と人間の闘いなのであるそのエネルギーから考えて圧倒的に自然が有利であるから、人間が敗れるのは当たり前である。山のベテランは遭難しない、などと言うのは虚構である。幸運な人をベテランというだけの事である。ここでは全くの素人が、装備の改良に関心を持って、一通りの繊維装備の知識を身につけたいと望んだ時に役立つ事を記す事にしたい。所註、山登りは遊びであるから、身の安全を考えるのが賢明である。たとえ生命をかけて登るとしても、つまらぬ危険はなるべく避けた方がよい。

2. 高所の自然条件と装備

人間は衣服と住宅によって自然に対してしている。試みに、今夜でも裸で戸外に寝てみればその事がよく判る衣服と住宅は、共に造型と機能の二つの面を持っていて、学問的に類似しているのも人間の生活に同じ役目を持っているからであろう。ところでこれらは、分子論的にほとんど高分子によって構成されている。高分子とは、ほぼ分子量一万以上の巨大な分子で、衣服や建築の素材として必要な強さや適当な伸長性、弾力などは、結局この高分子の特性なのである。

ところで、ヒマラヤは氷雪の世界である。見はるかす全ては低分子の世界である。衣服や住宅の素材は得られるべくもない。結局、人間がそこに登るためには平地から装備のすべてを持って行かなくてはならない丈夫で軽く、小さくたためて、しかも機能が大きく更に造型美を備えた装備は、ヒマラヤのような高所の自然と対決するための基本的な条件である。

3. 軽い装備

登山は重力に逆らう行為であるから、装備は(食糧なども含めて)軽量であることが望ましい。1936年、フランスのヒドンピーク隊は、14トンの荷物と800人のポーターをもってして目的を達し得なかった。この反省は後に1950年のアンナプルナ遠征に当って、軽快

で機動性のある事を考慮し、4.5トンの荷物をもって目的を達した。この隊は「ナイロン遠征隊」とも呼ばれたように、ナイロンを大いに活用して注目された。1954年のイタリーのK₂際は国家的援助をバックにして16トンの荷物をもった。1956年、日本のマナスル隊は10トンであったが、1958年の京大チョゴリザ隊は2.5トン、さらに1960年、京大ノジャック隊は1トンという軽量隊であった。運搬に要するポーターの人数と、その食糧を考えると、軽量化が登頂の可能性に重要な役割を果たす事は明らかである。

いま、道中の日数をd、登山用装備の重量をW、ポーター1人の負荷をw、その1人1日当り食糧の重量をy、人数をxとすると、

$$x = \frac{W}{w - y \cdot d}$$

となる。ヒドンピーク隊の場合、d=40日、W=14トンであったが、仮にw=40kg、y=0.5kgとすると、

$$x = \frac{14000}{40 - 0.5 \times 40} \quad x = 700人$$

となる。この計算で、若し費用の都合で100人のポーターを用いるとすれば、

$$W = 100(40 - 0.5 \times 40) = 2トン$$

に制限しなければならぬわけである。さらに高所に於ては、ほぼ1人の負荷は20kgぐらになるから、軽量化によって著しく日数を短縮し、成功の可能性を増大する事は明らかである。

目標とする山の性格によって装備や器材の程度を異にし、登山の要領がよくなり、無駄がなくなった事もあるが、結局、荷物の軽量化は一つ一つの装備の軽量化によるところが大きい。例えばテントをとってみても、ウィンパーがマッターホルンの登頂のために、1862年工夫改良した自慢の軽量テント23ポンドであったしかしフランス、アンナプルナ隊のテントは高所用1セット(ナイロン2人用テント1、スリーピングバック2、エアマット2、アルコールコンロ1、食器1揃い)で10kgで、ほとんど同じ重量である。京大チョゴリザ隊のテントは4kgである。衣服についても、フランス、マカルー隊の防寒服は一式800gであり、これで-15°Cまで耐えられると言う。また、イギリス、エベレスト隊のそれは、靴共で7.65kgである。京大チョゴリザ隊は防寒服一式2.5kg、靴2.5kg、会計5.0kgであった。今後この方面の発達は期待される。

ただ軽量は、所謂軽装ではない。完全装備の改良による重量の軽減である事は言うまでもない。

3. 酸素の不足

酸素は人間の生命の維持に基本的な役割を果たしている。一般に人体は地表面で生活するのに適した生理的機能を持っているから、高所の酸素不足によって深刻な影響を受ける。装備もそれに対して考慮されなくて

はならない。酸素補給器を用いる場合の防風衣や防寒衣のデザインも、低地のそれと異らねばならない。

高度の一般的な影響については多くの記述があるがこれを要約すると、人間が活動能力を維持できる高度はほぼ3600mで、人間が永く生活できる最高限度は、5250mであると言う。さらに登山者の肉体の衰弱、食欲減退、精力不足の著しくなるのは6300mで、登山行動の限度は6900mである。これ以上では衰弱が急激に深刻になり、7800m以上に登る事は、極めて少数のすぐれた人が一遠征中に一回行いうる程度のもので、その回復は長期を要するとされている。ところで、ここで見逃してならないのは、「多幸症」の問題である。第二次大戦中にイギリスのパイロットが、5000mの高度で敵機に遭遇し、機銃をあびせてくる敵のパイロットに挨拶を送った例があるという。同じような例は低圧室の実験でも、古く気球による上昇中にも経験されている。もちろん、飛行機による場合と登山とは高度順化の効果が著しく異り、比較にならないが、登山でもこのような症状が7000m付近で多く体験されているように思われる。これは低酸素症の一種で、感情の激しい変化、道徳的に禁じられているような事が取除かれつつまの合わぬ事をくり返す。なんの理由もなく笑い出したり、大声で唱ったり、気分が素晴らしいと叫んだりするのはその典型的な症状である。このような高度で仲間を危険から救わねばならない状況が発生した時に、重大な問題となるおそれがある。宇宙船内の酸素分圧を低下させる事は、このような理由で危険であると主張している学者がいる。しかし、ヒマラヤ登山者が、その光輝に満ちた体験を語るのを多幸症に帰するのは、早計かもしれない。

ところで、酸素補給器を用いれどどこまでも登り得ると思っている人がある。人間が地表から高所にもたらされた時、酸素不足の影響は肺に直接に現れる。肺の中では肺泡を満たしている空気と肺の組織を洗っている血液との接触によって、酸素は肺泡から血液中に拡散して赤血球の中のヘモグロビンと結合し、一方静脈の血液からCO₂が肺の空気中に放出されている。地表に於てこのような酸素の拡散が一定方向に行なわれるのは、肺泡の空気における酸素分圧(110ミリHg)が、血液中の酸素分圧(60ミリHg)より高く、また血液中のCO₂の分圧(47ミリHg)が、肺泡空気中のCO₂の分圧(40ミリHg)より大きいという理由による。拡散は分圧の差によって行なわれているわけである。

このように肺胞内ではガス交換が起っているから、例えば外気中の酸素分圧PO₂=152ミリ窒素分圧PN₂=608ミリ(合計760ミリ)に対して、肺胞内PO₂=100ミリ、PN₂=573ミリ、PCO₂=40ミリ、PH₂O=47ミリ(合計760ミリ)のようになっている。空気中

のPO₂はO₂の含有量に比例する。(仮に21%とする
と、760ミリ×0.21=160ミリとなる。)高度の上昇に
より空気の圧力が低下すると、このPO₂も低下する。
それに伴って肺胞内PO₂も低下し、生体に供給される
O₂の量が減少する。

人間は普通地表で、毎分16回程度の換気を行い、毎

仮にこのような議論を無視して、酸素の補給なしに
、超人的な精神力によってエベレストの高度に達しえ
たととしても、例えば外科医が頭に行く血を止めると、
5分位で脳神経細胞が枯死し、脳波がフラットになる
のを経験するように、極度の酸素欠乏は血液の機能を
失わせ、永久に回復できない傷害を残し、廃人と化す

第 1 表

酸素を吸入しないときの状態と同じ状態にするために必要な吸入酸素濃度 (大島正光)

高度 (km)	吸 入 酸 素 濃 度					
	0 km の 状 態	1 km の 状 態	2 km の 状 態	3 km の 状 態	4 km の 状 態	5 km の 状 態
0	21					
1	25	21				
2	28	24				
3	33	29	21			
4	37	33	24	21		
5	44	38	28	24	21	
6	50	45	32	28	24	21
7	60	52	38	32	28	25
8	71	60	45	39	34	28
9	85	73	53	46	40	34
10	100	87	63	55	48	41
11	(10.0km)	(10.6km)	77	67	58	50
12			98	83	72	63
13			(11.2km)	(11.8km)	90	78
14					(12.4km)	100
						(13.0km)

注: () は100%の酸素濃度のときの高度を示す。

回0.5~0.6リットルの空気を吸入している。空気が稀
薄になると、呼吸数および呼吸の深さの関連した調節
によって酸素を補給しようと努めるが、それには限度
がある。酸素補給器は、高度が増すにつれてPO₂の低
下を補うために、酸素の割合が増して行くような混合
ガス(例えば第1表参照)を供給して、肺胞内PO₂を
維持するためのものである。しかし、この利用にも限
度がある。それは肺胞内のPCO₂=40ミリ、PH₂O=
47ミリ(合計87ミリ)ぐらいにはほぼ一定しているの
で仮に、純酸素をもってPO₂を100ミリに保っても100+
87=187ミリになる。これは高度10500mの気圧に相当
する。しかも純酸素の吸入によって、肺炎などの症状
をもたらす酸素中毒の危険がある。

若しも、エベレストが1万mを超える高峯であつた
とすれば、人間が歩いてこれを征服する事は不可能に
近いであろう。もちろん、100ミリ以下の肺胞内PO₂
で我慢し、さらに加圧マスクをつけて、加圧O₂を肺
に圧入する事によって14000mぐらいまで達し得られ
るが、それは短時間に限られている。さらに19200m
に達すると、水の沸点が37°Cになるから血液が沸騰
する。これらに対しては、与圧服や与圧室の使用が必
要である。

る窒素を排出す事も有効である。また、酸素の不足や
便秘、疲労、睡眠不足、アルコール分はこれらの症状
を促進する事が知られている。高所登山者がどの程度
の可能性が極めて大きい。酸素補給器なしにエベレス
トを目指すのは無謀である事は、このような理由によ
る。また登山者は寒冷な空気を激しく呼吸するから、
人体はその内部から冷却されるのである。酸素の不足
は、防寒服を一層大げさなものとする。

4. 気圧の低下による影響

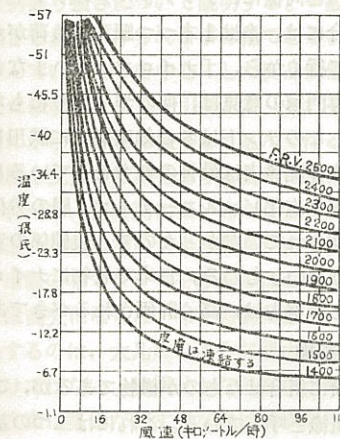
前述の低酸素症も空気中の酸素組成比の低下でなく
気圧の低下による酸素分圧の低下によるものであるが
この他に航空減圧症として知られる一連の症状がある
これはO₂の不足には関係なく、体腔に存在する気体
の膨脹と体液中にとけている窒素等が気化して生じる
気泡による症状で、胃腸のガスに起因する腹痛、気泡
により小さい血管がふさがれる事による末梢関節部の
疼痛、胸骨内側の激痛、タンの出ない空咳、皮膚のか
ゆみ、視力の減退、頭痛、歯痛がみられ、合併症とし
て発汗、立ちくらみ、蒼白、吐き気、意識消失などが
見られる。これらは8000mを超えると顕著になり、我
慢していると後遺症を残す。治療法としては山を下る
ことである。その他、酸素を吸入して体内に溶けてい

に航空減圧症の影響を受けるかは明らかにされていない
ようであるが、低酸素症と混同されている部分があ
るのではないだろうか。

5. 寒さの影響

低酸素や低圧の問題は、装備を考える上に人体の受
ける大きいハンディキャップとして重要であるが、寒
さは直接に装備に関係がある。一般に気温の低下はか
なり規則正しく、1000mについて6°Cづつ低下する
1933年インド高地での気球実験の結果によると、8000
mで-40°Cに出会う事も予想しなければならない。

しかし実際に重要なのは放熱量であって、風は風速
1 m/sec について1°Cの温度低下に相当する放熱を
もたらし、基礎代謝が非常に亢進する。もし体温を保
とうとする内的な努力にもかかわらず、30°C以下に
なると凍死の状態となる。主観的には睡気や倦怠を感
じ、客観的にはあくびを連発し、居眠りをし、眠つき
が怪しくなり、戦慄が現われる。さらに体温が低下す
ると、足どりが怪しく、呼吸も弱く、幻覚や錯覚が現
われやがて倒れて昏睡状態となり、仮死状態を経てや
がて凍死に到る。一方、手足の先などの末梢部ではこ
れと別に、体組織が0°Cになって凍結し所謂凍傷を
起す。凍死と凍傷は異り、0°C以上でも凍死の起る事
は注意しなければならない。これらについては、会員
伊藤洋平氏による解説(山と溪谷社;登山講座第5巻
181頁)が有益である。防寒装衣、靴、手袋等はこ
のような凍死と凍傷を防ぐように考えられなければならない。
第2表は気温と風速の冷却効果に対する寄与を
示している。



第2表 いろいろな気温と風速に対する風による冷却度 (F-R-V)
皮膚温が33°Cで平衡を保っている人において1時間あたり1平
方メートルあたり1大カロリーであらわした冷却度。

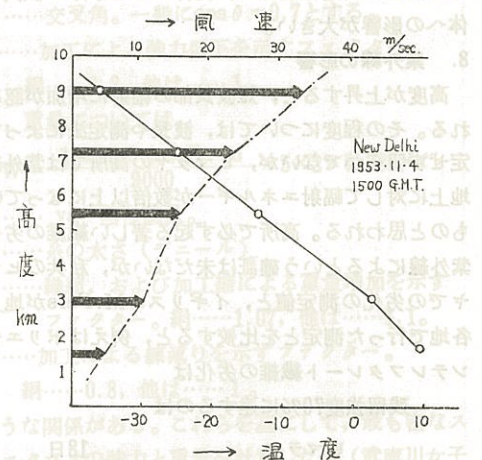
私共の厳冬の山地での実験によると、外気温が氷点
下のとき、夜半の火気のないテント内は0°C以下に
低下する事が多く、寝袋の表面温度は0°Cぐらいの
事が多い。しかし一般の冬用寝袋の内側は10~25°C
ぐらいになっている。例えば、外気温-8°C、テント
内-1°Cで寝袋内側が11.5°Cのとき、サルトロカソリ

隊の防寒服を用いると防寒服内面で27°C、その下に
毛セーターと毛シャツを着て、上半身の皮膚温が35°C
、足の裏18°C、足の表21°Cであった。

これは一例であるが、テントだけで寒さを防げるも
のでなく、一方いかに完全な防寒衣をもってしても、
寒冷な雪中で夜を過ごすことは不可能に近い。結局、テ
ントで空気を静止させた空間を造り、その中で保温効
果の大きい寝袋防寒衣で寒気をしのぐようにするべき
であろう。この事は当然の事のようにであるが、後述す
るようにテントは通気度の小さく強力な大きい事を考
え、防寒衣は軽量で厚さを大きくするという設計に到
る基本的な考え方として重要である。

風の問題で注意しなければならないのは、高度と共
に風速の増す事と、10月申頃から冬にかけてヒマラヤ
上空をおおっているジェット気流の存在である。ジェ
ット気流は6000~12000m付近にみられる36~88m/s
ecぐらいの、狭い気流の西風である。1953年11月4
日、京大アンナプルナ隊がこの気流に遭遇して遭難し
た事は忘れる事ができない。第1図は当時中央気象台
がインド国際気象無線放送を受信した結果をもとに久
米庸孝氏が調べたアンナプルナ西方およそ600kmの風
上に当るニューデリー上空の気温と風速である。アンナ

第1図



プルナ隊のテントは、その後私共が測定して甚だしく
引裂強度の低い状態であった事を認め、その後改良し
て、現在では人間の指先では引裂く事の出来ぬ程度の
布が作られて用いられるようになったが、それでも布
とジュラルミンのポールで造ったテントは、到底この
ような強い風に耐えられるとは考えられない。ヒマラ
ヤ登山の記録を調べてみると、テントが吹き破られた
例は多くみられる。結局高所の暴風に対しては、テ
ントを防風壁で守るか、さもなければ軽金属の小屋のよ
うなものを用いなければならないだろう。ヒマラヤの
成功は、気象の幸運に支えられていると言ってよいと
思われる。

なお、低温になると熱の生産のために酸素の消費量が増大する事も無視できない。

6. 湿度の問題

湿度は気温と関連して低下し、4000mでは地上の1/4になる。氷点下ではほとんど乾ききっている。登山者は乾燥した空気を激しく呼吸するから、肺から大量の水分が失われ、その結果血液の粘度が高まり、ついには凝塊が出来て血管をつまらせる。1953年、アメリカK₂隊のアートギルギーが左の腕に血栓性静脈炎を起し、やがて凝塊が肺に行き、肺血栓を起して死亡した。1924年にブルースは隊員のグルカ下士官が脳血栓で死んだと言い、ティルマンは1938年、エベレスト隊のパサンブーティが脳血栓で死んだと述べている。

このような経験から、1955年のイギリスのカンチェンジュンガ隊は、1日1人当たり6ペイント(1升9合)の水を摂取したが、それでも24時間全く排尿しない者も居たという。しかし、衣服については湿度はR.H100%以下では保温性とあまり関係がない。むしろ汗をかかない(不感発汗となる)ので肌着には有利である。

7. 高温の問題

1952年5月イギリスのチオウウ隊は、5700mの太陽直射下の氷河上で69°Cを観測しているが、ヒマラヤでは高温の問題も重要で、発汗による水分の損失は人体への影響が大きい。

8. 紫外線の影響

高度が上昇すると、短波長部の放射に増加が認められる。その程度については、波長や測定法によって一定せず明らかでないが、ヒマラヤの高所では紫外線は地上に対して放射エネルギーが数倍以上になっているものと思われる。高所で必ず起る著しい繊維の劣化が紫外線によるという確証は未だないが、私共のヒマラヤでの劣化の測定値と、イギリスのM. Felsが地上の各地で行った測定とを比較すると、例えばポリエチレンテレフタレート繊維の劣化は

残留強度70%に達するのは

ヒマラヤ	18日
Kano (Nigeria)	65日
Didcot (英国)	80日

残留強度50%に達するのは

ヒマラヤ	45日
Kano	105日

の如くであって、ヒマラヤでの劣化が激しい事を知る事ができる。この事から、ヒマラヤ登山でのテント使用日数を仮に平均45日とすると、布の強度はあらかじめ50%の低下を考慮されねばならない。このような強度は、もはや技術の限界に近いから、テントの予備を用意するのはもちろん、ましてやキャラバンとアタックを共用するような事は論外である。なお、フライ用を

用いても、氷河上の反射によってテントは著しく劣化するので完全な防止策とは言えない。

以上、簡単に主要な高所の条件について説明したので、次いでこれらを考慮に入れて計画されるべき繊維装備の基本的な知識について解説したい。

9. 繊維, 糸, 織物, 編物

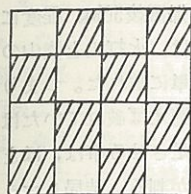
繊維が集まって糸となり、毛が織られて織物となり糸が編まれると編物(メリヤス)になる。こんな事は誰でも知っている事のようにであるが、fiber, yarn, textile, fabrics, knitted, fabrics, の区別をはっきりさせておく必要がある。繊維装備などという表現も、わた(繊維), ロープ(糸), テント(織物), セーター(編物)を含んでいて正確ではない。またその繊維としての強度が大きかったとすると、素人にはその繊維でテントを作れば強いと思ひ込まれ易い。しかし紡績糸の強度は単繊維そのものの強度は大きくても、単繊維相互のずり抜けの抵抗を考慮に入れて考えると、糸として強いものが出来るとは限らない。またアンナプルナ隊の場合は、ナイロンは繊維として軽く強いという事から、従来の木綿のテント地と同じ強度の布を求めたところ、大変軽いが通気性がよい(紡績糸では強度に関係しないで、織物の目をふさぐ役目をしている繊維が多い。長繊維の場合はすべての繊維に負荷がかかる。)ので、その目を詰める為にポリ塩化ビニルのコーティングをしたのである。こうなると糸は相互に動けなくなってしまう。ガーゼを引裂く事が難しいのは、繊維が強いのではなく、糸が負荷に対して最も抵抗し易い位置に変位し易いからである。紙が引裂き易いと同様に、アンナプルナのテントも裂けた。この場合には、糸は1本づつ順番に負荷がかかって切新されて行くから、「ナイロンは強い」などと言う権威ある専門家の意見は、何のつっぱりにもならない。ただし、このテントは冬の知床縦走に試用して検討され、当時の関係者は最善の努力をしているし、ヒマラヤでのポリ塩化ビニルコーティング層の劣化が著しい事は予期されていなかったもので、装備係の責任だと言うのではない。むしろ、日本で最初にナイロンテントを開発した努力は、高く評価されるべきであろう

10. 織物の組織

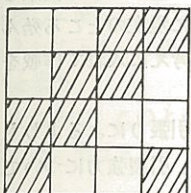
糸を縦と横に組合せたものが織物であるが、この組み合わせ方を組織と呼んでいる。これには三つの基本的な型がある。①平織り, ②綾織り(ツイル), ③朱子織り(サテン)である。このうち登山に大切なのは①と②なので、これについて解説する。

縦糸が横糸の上を越えている部分を組織点と言っているが、平織りは縦糸と横糸が交互に上下して、組織点は市松模様のように並んでいる。組織図で示すと、第2図の如くである。組織点は黒く示してある。

綾織りは組織点が斜めに走っているものであって、



(2 図)



(3 図)

縦糸が横糸2本の上を越え、横糸2本の下をくぐって、斜交線が右上りなら2/2の如く示す。(第3図) 分母は横糸何本の下をくぐるのか、分子は横糸何本の上を越えるかを示している。1/3, 1/2など示す。なお、同じ組織図でも縦横の糸の太さ、密度によって、外觀、性質の差異が生まれる事は言うまでもない。ところで、一般に平織りは糸の交錯が緊密で、布面が平坦で、しっかりした感じで丈夫である。これに対して綾織りは糸の自由さがあるので、布はやわらかく表面は滑り易く、光沢がある。このような特長があるので、風を防ぐ目的の防風衣には平織りがよいし、やわらかくふくれる事の要求される羽毛服や寝袋には、綾織りがよい筈である。しかし商品としては、光滑の美しい綾織りがアノラックにされ、また寝袋には羽毛の出難いように平織りの傘地が賞用されたりして、市販商品については、これらは全く商品としての価値を第一に考えられているので、必ずしも用途によって組織が定まっているわけではない。ただ、特殊な軽量性能の布地を考える場合には、基本的な立場から考え直すべきである。

11. 織物の強さ(主としてテント地について)

まず引張り強さについて説明する。一般に織物は引張り強さを目的に作られる事は稀である。業者が風合いと呼んでいるものを中心とした商品価値が目的である。また織物は、縦糸を引揃えて(これを整経と呼ぶ)織機にかけ、それに横糸を打込んで作るものであるから、織機や工具の能率をあげる為には横糸を荒くすれば、それだけ一定時間に長い布が仕上がるわけである。その結果、市販の布の大半は縦糸が密で横糸が粗である。「市販の布でテントを作るのはおかしい、ヒマラヤ用には商売にならない布を特別に織るべきだ」と私が主張するのは、大凡このような理由による。例外はないわけではない。絵網はかなり縦横が均一だし、大島という布は高価だが丈夫なのは縦横が均一であるからである。(これに対して銘仙などは、縦横がアンバランスだから安価だが長持ちしない。)最近では産業用途の織物が開発されて、高強度の織物が多くなっているから、必ずしもヒマラヤ遠征の為にテント地を試作しなければならぬとは限らないが、それでも基本的な考えは必要である。縦横糸の密度(1時間の糸本数とする)と、糸の太さの等しい織物をスクエアカロスと呼んでいる。この場合(これは全く特殊な織物であ

るが)

$$n = D \times \frac{E}{E + I}$$

n …… 1時間の縦糸, または横糸本数。

D …… 1時間に並列しうる糸の本数。

E …… 1レピートの縦糸, または横糸本数。

I …… 縦糸, または横糸1本の1レピート中の交錯数。

平織りの時, E = 2, I = 2, n = D × 1/2

2/2の綾織りのとき,

$$E = 4, I = 2, n = D \times 1/3$$

これによっても明らかのように綾織りは密度を大きく出来る事は言うまでもない。つまり、引張り強度を大きくする為には、綾織りが有利である。しかしそれだけ重たくなる。ヒマラヤ用のように、重量の制限があると少し面倒になる。

織物の引張り強力については

$$G = g \times d \times f \times 2 D \times \cos \theta \times f'$$

G …… 2吋巾当りの引張り強力

g …… 単繊維強力(太さデニール当り)

d …… 糸の太さ(デニール)

f …… 単繊維強力和に対するファクター

木綿 …… 例えば0.7, 長繊維 …… 1。

D …… 時間密度

θ …… 交叉角。一般にcos θ = 0.7とする。

f' …… 加工による強力低下を示すファクター

絹 …… 0.8, 他は …… 1。

また、重量については、

$$W = \frac{1 \text{ m間の糸本数} \times d}{9000} \times 5 \times 2 \times 0.835 \times f'$$

W …… ya² 当り重量。

d …… 糸の太さ(デニール)

f …… 織縮, および加工縮による重量増加を示す

ファクター。絹 …… 1.07, 他は …… 1.1。

f' …… 加工による練減りを示すファクター。

絹 …… 0.8, 他は …… 1。

のような関係がある。これらを基にして、最も密なスクエアカロスの強さと重量を計算した値(武庫川女子大学紀要, VOL.6, p25)

を示すと次の如くである。

第 3 表
各平織スクエアカロスの計算強度及び計算重量

	デニール	密度/時	強度 (kg/5cm)	重量 (g/yd ²)
絹	150	78.9	52.99	74.85
	120	88.4	47.50	67.03
	100	96.7	43.32	61.46
	70	115.5	36.21	51.39
	50	136.6	30.60	43.41
	30	176.7	23.75	33.69

木	266(20番手)	62.5	46.52	135.97
	177(30 ヌ)	76.5	37.96	110.73
	133(40 ヌ)	88.4	32.90	95.96
	89(60 ヌ)	108.3	26.87	78.38
	53(100 ヌ)	136.6	20.79	60.66
綿	150	72.6	83.80	88.95
	120	81.2	74.98	79.59
	100	89.0	68.49	72.70
	70	106.2	57.21	60.72
	50	125.7	48.38	51.34
ナイロン	30	162.4	37.50	39.80
	150	79.8	70.34	97.77
	120	89.3	63.01	87.53
	100	97.9	57.54	79.97
	70	116.8	48.07	66.78
デークロン	50	138.1	40.60	56.40
	30	178.6	31.50	43.77

第 4 表

各2/2ツイルスクエアクロスの計算強度及び計算重量

	デニール	密度/時	強度 (kg/5cm)	重量 (g/yd ²)
絹	150	105.1	70.63	100.21
	120	117.8	63.33	89.85
	100	128.9	57.75	81.93
	70	153.9	48.26	68.48
	50	182.1	40.77	57.87
木	30	235.6	31.66	44.92
	266(20番手)	83.3	62.00	180.86
	177(30 ヌ)	101.9	50.56	147.49
	133(40 ヌ)	117.5	43.72	127.55
	89(60 ヌ)	144.3	35.80	104.43
綿	66(80 ヌ)	166.7	30.99	90.41
	53(100 ヌ)	186.2	27.74	80.91
	150	96.4	111.34	118.11
	120	108.2	99.98	106.42
	100	118.6	91.32	96.88
ナイロン	70	141.5	76.27	80.91
	50	167.5	64.49	68.41
	30	216.4	49.99	53.03
	150	106.3	93.76	130.24
	120	119.1	84.06	116.74
デークロン	100	130.4	76.68	106.51
	70	155.7	64.09	89.03
	50	184.1	54.13	75.19
	30	238.1	42.00	66.70

一方、京大の数次のヒマラヤ遠征の経験によると、テント地は重量135g/yd²以下、引張り強度、ストライプ法100kg/5cm(=2吋)以上が要求される。(もっともこれでも充分ではない。例えばチョゴリザで用

いた初強度100kg/5cmの布は、帰国後50kg程度に低下していた。そしてそのテントは、火打山と焼山のホルで現役が用いて吹雪のため簡単に破れた。つまり、このテントで遠征末期に暴風に遭えば破れていたはずである。)このような要求を満足させる事は、ほとんど不可能に近いと言ってよい事が判る。結局ヒマラヤ遠征は、テントが老化した時期に暴風が襲えば遭難する可能性が極めて大きい。これを避ける事は出来るとしても、耐える事は繊維工学的に現在のところ殆んど不可能である。このような事を考えに入れて作戦を行う事が望ましい。

次に、実際にはテントの布は引張りによるよりも、引裂きによって破れる事が多い。引裂強度について私共の経験によれば

- ①糸強度が引裂きに大きく影響する。
- ②糸伸度が小さいと、引裂強度は小さくなる。
- ③糸の結節強度が小さいと、引裂強度が小さくなる。
- ④密度はあまり引裂に影響しない。
- ⑤糸が曲って、縦横糸が抱き合っている程引裂に強いと言えるように思われる。ただし、引裂強度のみを高める事は可能であって、例えば前記のように、ガーゼのような織物を作ればよいのであるが、これでは実用にならない。引張り強度、引裂強度、通気度、重量などの性能のバランスのとれた織物が必要である。しかし、一般に通気性の小さいテント地は、引裂強度の小さい傾向がある。

なお、引裂強度の測定法について、トラペゾイド法の引裂強度の縦方向とは、縦方向に細長く短冊型にサンプルをとって、その中央に直角にノッチを入れて、そのノッチ部分を引裂いて行くように引張った時の強度を示している。この場合に切断するのは縦糸である。一般に布の引裂強度はタング法と呼ぶ方法で測っている。タング法では、縦方向とは縦にノッチを入れて折返して引張るので、切断するのは横糸である。私共はテントの強度テストには、タング法よりもトラペゾイド法の方が、実際にテントが吹き破られて行く実況に適合していると考えて、トラペゾイド法を採用している。

12. テント地の要求される性能

チョゴリザ隊の経験から、サルトロカンリ隊の時に目標とした性能は次の如くである。

- ① 重量135g/yd²以下
- ② トラペゾイド法による引裂強度20kg以上。
- ③ 引張り強度5cm巾ストライプ法100kg以上。
- ④ 縦と横の強度の等しいこと。
- ⑤ 通気度フラジール法1~3ft³/min/ft²水柱0.5吋圧力差。
- ⑥ 耐水性、300以上、なるべく500ミリ以上水柱高さ
- ⑦ 縫製し易いこと。縫目強度が大きいこと。縫目で

スリップの起らぬこと。

⑧ たたみ易いこと。

等である。このようは諸元は、ここに記せばわずかの行数に尽るが、実はこのような事が明らかになったのは、今まで数次のヒマラヤ遠征に際して、わざわざ使い古したテントを持ち帰って試験に供して下さった隊員諸氏の協力の結果である。海外ではこのような成果は得られていないようである。さらに、全く採算を度外視して協力して下さった関係会社と、無理な要求を受入れて下さった担当技術者の努力を忘れてはならないと思う。

ところで、このように高度の性能が要求されるについては、実はヒマラヤでの繊維の劣化が著しいという

チョゴリザ遠征に際しての測定⁽²²⁾によれば、第5表の如くである。この表を見ると、例えばテトロンテント(No. 8)は(晴+曇天/2)日数が38日で、引張り強度は1/2に、また引裂強度は1/3程度になっている事が判る。このテントが前記の火打山と焼山のホルで壊れたのである。ヒマラヤで38日間ぐらゐの使用日数は特に長期にわたるものとは言えないから、テントのスペアを持参しなければ危険だと思われる。

次に、サルトロカンリ遠征に際しての測定⁽²⁷⁾によると、第6表の如くである。この場合には、雲量と紫外線透過率の関係を文献から求めて、それを参考に曇天を晴天の50%、曇のち雪の日を45%、雪の日を40%として晴天換算日数を算出した。

第 5 表

テント No.	繊維名	使用日数				晴天日数 + 曇天日数/2	引張強度残留値%		引裂強度残留値%		
		高	度	晴	曇		縦	横	縦	横	
シート	ビニロン	B.C		20	10	10	25日	68.4	70.2	71.1	64.1
14	テトロン	C ₁	6650				13.5日	70.9	58.5	23.9	24.2
		C ₃	6400								
		C ₂	5900	9	1	2					
		C ₁	5500	3	2						
		B.C									
18	テトロン	C ₁		1		11.5日	71.2	78.9	31.4	32.3	
		C ₃		7	1						
		C ₂		3	1						1
		C ₁									
8	テトロン	C ₄				38日	52.4	47.6	57.1	22.8	
		C ₃									
		C ₂		10	6						
		C ₁									
		B.C+キャラバン		20	10						
1	テトロン 木綿(交織)	C ₁		5	1	25日	60.5	53.7	14.3	14.7	
		C ₃		8	2						2
		C ₂		2	2						2
		C ₁									
		B.C+キャラバン		5	5						

事情によるところが大きい。現在、京大が用いているものよりも、さらに高性能のテント地を作る為には、劣化を防ぐ努力が必要になる。またこの事は、最近産業用途の屋外用繊維材料が要求される事や、さらには宇宙用途の開発と関連して重大な問題である。今後の大きいテーマとなるであろう。その事を考えて、私共はサルトロカンリ隊に託して、各種繊維を用いて同一の規格で織った織物の曝露テストや紫外線量の測定を試みた。(紫外線量の測定は、計測器の故障のために未だ成果は得られていない。)

12. 織物の高所劣化

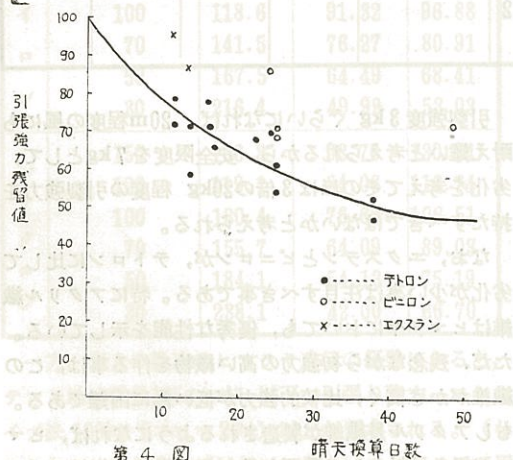
引裂強度3kgぐらゐになれば、20m程度の風にも耐え難いと考えられるから、安全限度を7kgとして、劣化を考えてそのほぼ3倍の20kg程度の引裂強度を持たすべきではないかと考えられる。

なお、エクスランとビニロンが、テトロンに比して劣化が少い事は注目すべき事である。特にアクリル繊維はヒマラヤにおいても、優秀な性能を示している。ただ、残念ながら初強度の高い織物を作る事は、この繊維がかさ高く、比較的強度が低い為に困難である。もしアクリル長繊維が製造されるようになれば、ヒマラヤ用の材料として重要な役割りを果たす可能性が大きい

第 6 表

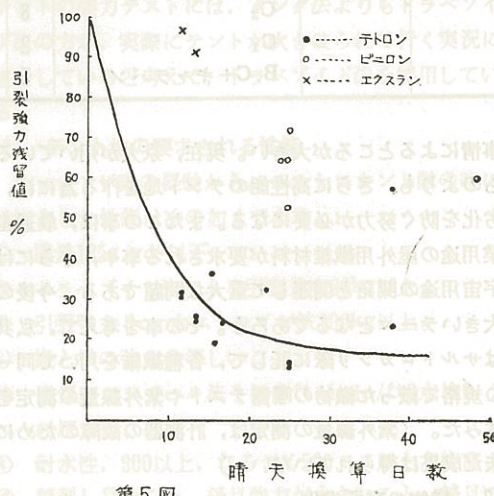
テント No.	繊維名	使用日数				晴天換算日数	引張強度残留値%	引裂強度残留値%
		高度	晴	曇	雪			
33	テトロン	C ₃ 6000m	4	2	2	15.8	72.9	19.9
		C ₂ 5500	4	1	4			
		シアチェン キャンプ 4800	3	1	1			
31	テトロン	C ₄ 6400	2			16.7	65.5	23.8
		C ₃ 6000		2	1			
		C ₂ 5500	6	3	4			
		ABC 5000	3	1				
34	テトロン	C ₃ 6000	7	2	3	15.2	77.8	35.9
		ABC 5000 (11)						
		シアチェン キャンプ 4800	3	1	1			
303	テトロン	C ₂ 5500	12	2	7	22.2	68.0	32.1
		ABC 5000	5	1				
341	(長繊維) ビニロン	C ₂ 5500	12		7	24.1	81.7	64.6
		C ₁ 5200	6	2	1			
45	(長繊維) ビニロン	C ₁ 5200	19	5	6	24.5	70.2	52.3
62	ビニロン	ABC 5000	22	5	7	48.6	71.2	59.6
		B.C 4800	5	1	4			
		サリン~B.C	6	1				
		サリン 3000	6	3				
15	エクスラン	B.C 4800	5		4	13.5	86.7	90.4
		サリン~B.C	6	1				
63	エクスラン	B.C~サリン	2			11.5	94.8	97.4
		サリン~B.C	2					
		スカルド 2500	6	3				

い。
このように、チョコリザ隊とサルトロカンリ隊によって得られたテントの強力変化の結果について、使用高度の差、晴天換算日数の算出法、織物組織の差異は



第 4 図

あるが、一応、晴天換算日数と引張り及び引裂強度の残留値を図上に示してみると、第4図および第5図の如くなる。これを見ると、引張り強力の低下はテトロ



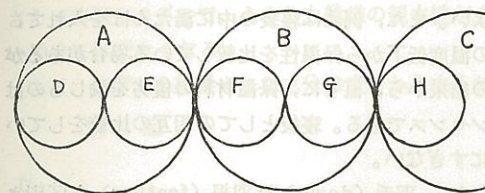
第 5 図

ンに関しては、晴天換算40日で半になる。これに対して引裂強度の低下は、テトロンについて晴天換算日10日で半になっている。このように引裂強の低下が著しい事は、特に注意しなくてはならない。

この他に、サルトロカンリ遠征に際して、各種織物で同一規格の織物を作り、これで吹流しとシートを作ってベースキャンプに曝露するテストを行った。その結果は説明を要するので、ここでは省略する。

13. 織物の通気性と重量

糸の断面を円とみなすと、織物の断面は円の連続として示される。最密平織スクエアクロスに例をとれば第6図の如くなり、A、Cを縦糸とすれば、Bは横糸



第 6 図

を示す。この織物に対して、直径が半の糸を用いた場合はD、E、G、H、……の如くなり、重量は半になる。いづれの場合にも円と円が密接に連続しているときは、通気性は殆んど0のはずである。

このように同じ通気性のものでも、糸を細くすれば重量は著しく軽くする事ができる。テントの場合には強力が要求が大きく、糸を細くする事には制限があるが、防風衣や羽毛服には、なるべく細い糸で密に織った布を用いれば軽いものを造ることが出来る。サルトロ隊の羽毛服地や寝袋用に30デニールのナイロン糸を用いたのは、このような理由によるのである。(当時30デニール糸使用の織物は輸出用にわずか造られているだけであった。衣料用には普通用いられるナイロンは、70~100デニールである。)

なお、通気性に関して耐風性の要求を出すと、メーカーの技術者のほとんどが合成樹脂のコーティングを提案されるが、これは特別の場合を除いて避けるべきである。テントにしる、防風衣にしる、完全な不通気性加工は害が大きい。あくまでも織物の糸の密度を極度に高める事によって、通気性を小さくするべきである。その場合に、必ずわずかの通気性が残るが、それが好ましい。高所では酸素が不足しているから、不通気性テントは低酸素症や一酸化炭素中毒を促進する。ただ、羽毛服地や寝袋に限って、極めて薄いコーティングもやむおえぬけれども、いわゆる完全防水を考へるべきでない。耐水圧を高めようなどと考へてはならない。そのような事をすれば、寒気に対する時に布の内面に水蒸気が結露し、時として板状の水が張り、やがて羽毛が湿潤し、さらに乾燥がさまたげられ厄介な事になる。

14. 羽毛服用の織物

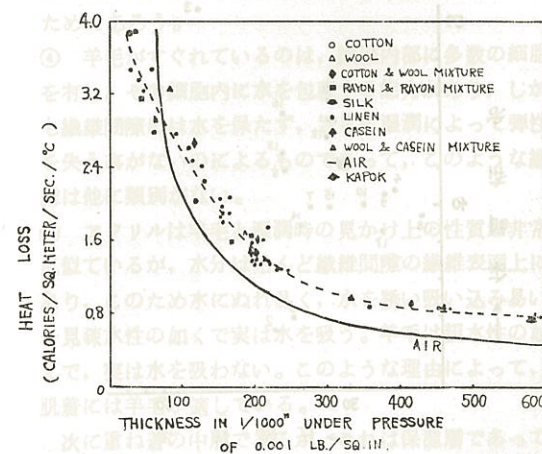
上記のように、羽毛服にはなるべく細い糸で、密な織物を織ればよい。(強力が実用にならぬ程に弱くは問題にならないが、羽毛が入っているとクッションがよいので案外に破れないものである。)ナイロンの30~50デニールの糸で織れば、ほぼ目的に適したものが得られる。ヤング率の高い(剛い)テトロンは不適當である。柔らかさ、しなやかさと言う意味では綾がよいように思われるが、縦横の糸の浮きが多いので、同じ重量について比較すると、平織りよりも綾織りの場合に羽毛が出易い。

一般に織物を造るには、織り易いように糸に撚りをつけるのが普通であるが、そのために糸がしまり、織物にした時に糸と糸の間隙が大きくなり易い。羽毛服用の布には特別に無撚糸を用いるとよい。フランスの羽毛服地にはそのようなものがあり、拡大鏡で見ると単繊維が全く平行に並んでいる。カンチ計画のためにそのような製品の研究も進んでいる。

15. わたの保温性について

一般に織物や編物や、わたの保温性が繊維の種類に直接に関係していると考えている人が多いのではないだろうか。例えば、アクリルわたとテトロンわたとどちらが温かいとか、繊維固有の熱伝導率がどちらが大きいとかを論じて、防寒材料としての適否を考へるような事があるようである。しかしこの問題については、1930~40年頃に W. H. Rees や M. C. Marsh が、各種繊維について薄いものから厚いものまで、布や毛布について保温率を測定し、その結果、保温率は原料繊維の如何にかかわらず、主として織物の厚さによって左右されると言う結論を出している。第7図は Rees の測定結果であって、繊維の種類の如何にかかわら

第 7 図

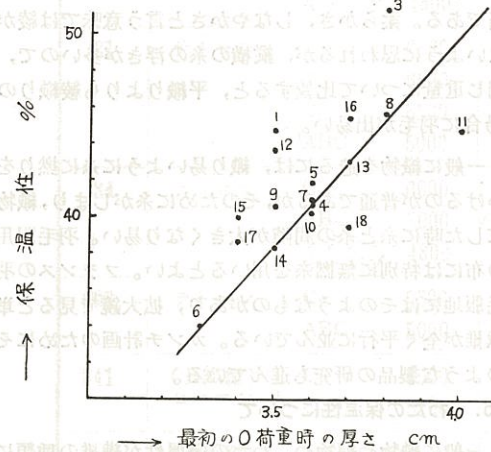


ず測定値は一つの曲線上に並んでいる。しかも、厚さが0.07吋程度以上では、空気のみ保温率の曲線と類似している事から、保温率を支配しているのは結局空

気であると言う結論が出てくる。繊維材料は空気の間を作るためのものであって、一定の重量でなるべく空気の間を厚く作れる材料が好ましいと考えられる。

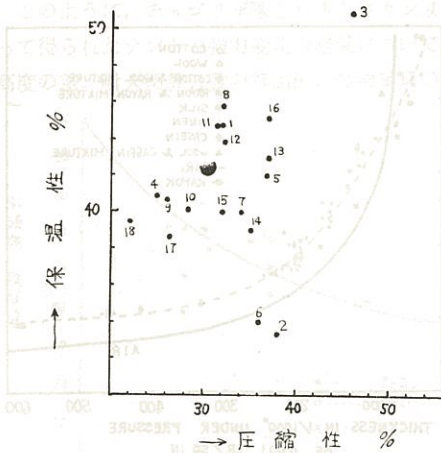
同様の測定は、合織わたについて私共が行なった事がある。その結果は第8図の如くであって、厚さと保

第8図



温率の間にほぼ直線的な関係がある。この場合には、各試料について一定重量だけとって比較したものであるから、厚さの差異はあまりない筈であるが、結果は図の如く厚いものほど温かい事を示している。このような結果から考えると、一定重量当りなるべくかさが高いもの程、保温性が大きく好ましいと言える。しかし羽毛にした場合には、一定荷重に対してへしゃげ易いもの(圧縮性の大きいもの)ほど着疲れがせず、また小さくたたむ事が出来るために便利である。各種合織わた(羽毛とスポンジを含む)の圧縮性と、保温性を比較してみたのが第9図である。この図上において、

第9図



原点から遠いものほど好ましい事になるが、3の点は他のものよりもかけ離れている。これは羽毛である。2の点は劣っているが、これはラバーフォームである

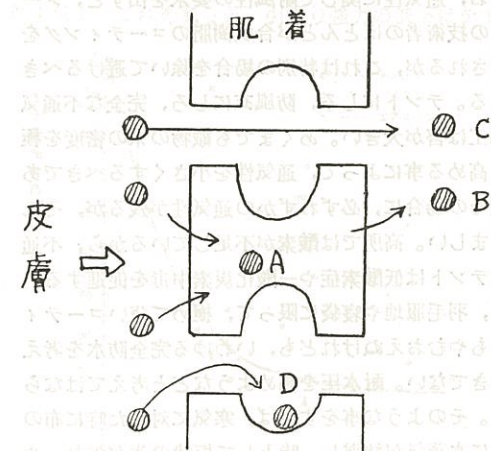
このように羽毛は、合織わたに比べてずばぬけて優れているから、羽毛服の保温材料として利用するとよい。しかし、水にぬれた時にへしゃげてしまって役に立たず、また害虫や腐敗に弱く、臭気があり、高価である等の欠点もあるので、雨の多い日本の山や、日常生活に用いるギルティングコート用としては、むしろ合織わたの方が適している。

また寝袋については、下面は人体によって圧縮されるので、圧縮性の小さいもの(へしゃげにくいもの)がよいように考えられるが、実際はそのようなものは小さくたたむ事が困難で実用にならないから、羽毛服と同じ材料を用いてエアマットを併用するようにすればよい。また、例えば寝袋の中に湯たんぽを入れて、その温度低下から保温性を比較している場合があるがその結果から、直ちに、保温材料の優劣を論じるのはナンセンスである。寝袋としての相互の比較をしているにすぎない。

なお、羽毛(down)は羽根(feather)と区別されねばならない。羽毛は放射状の構造をもった極めて小さく軽いもので、主としてあひるや鷺鳥の胸毛が用いられる。アメリカ軍の放出の寝袋の羽根とは、概念的に別のものである。羽根を混入した羽毛は布を突き破る事が多く、保温性や圧縮性も劣る。

16. 重ね着の検討

裸体の上に衣服を着用して行く場合に、内層、中層、外層それぞれに役割があるはずである。まず、内層から考えて行く事にしよう。皮膚からは常に水分が蒸発しており、(呼吸器からも水分は排泄されている。)これに発汗が加わる。このような皮膚からの蒸発や発汗による水分は、肌着に吸収されるかまたは、これを通過する。この場合に、水分の行途には、第10図のように、A、B、C、Dの場合がありうる。Aは繊維自身に吸収されたもの、Bは繊維に吸収された後に透過



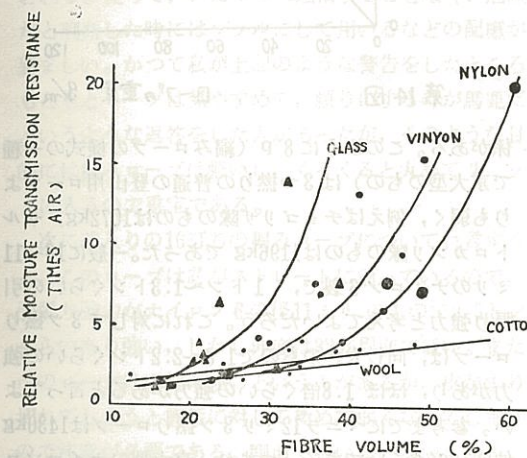
第10図

したもの、Cは繊維間を通過したもの、Dは繊維間隙に吸蔵されたものである。透過する水分はC+Bであるが、繊維の親水性が少ない場合にはBが極めて小さく、従って透過量が繊維間隙の大きさに著しく左右される。

第11図は各種の織物について繊維実質の容積比と透湿抵抗を明示したものである。これを見ると、親水性の乏しい硝子繊維、ビニロン、ナイロンは、透湿が主として繊維間隙に依存しているために、容積比20%付近以上に密になると、急激に透湿が困難になる。しかし親水性の木綿や羊毛は、繊維自身を通しての透湿が支配的であるので、密になっても透湿が容易である。さらに前記のモデルで、AやDも繊維の親水性が大きい場合には大きくなる。

さて、皮膚から排泄された水分は皮膚から去らねば

第11図

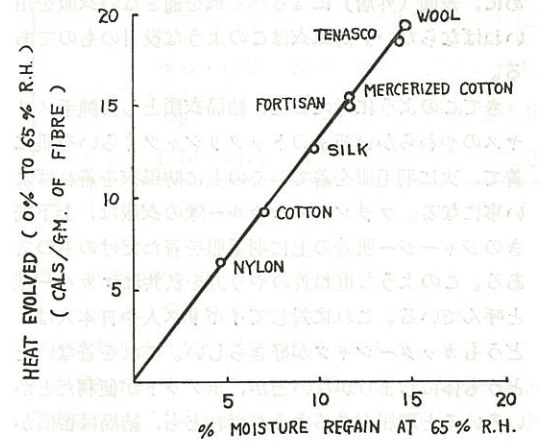


ならない。もし皮膚表面に付着停滞すれば、体温の調節が困難になるばかりでなく、気温の低下によって著しく体温をうばう原因となる。このような事から考えて、肌着は親水性の繊維を用いたものでなければならない。もし疎水性の場合には、例えばネットシャツの如き繊維間隙の大きいものでなければならない。疎水性の合織のシャツの如きは、いかに常温平穏時に快適であっても登山用途には不適當である。高所の乾燥した空気中では発汗しないと言う考えもあるが、不感発汗は起っているから透湿性が不必要というわけではない。

また、これと関連して衣服繊維は、気温変化に対して緩衝する効果を持つものである事が好ましい。各種繊維について関係湿度65%での含水率と、関係湿度を0より65%まで増加させた間に発生した熱量(カロリー/繊維1g)は、第12図の如くである。

気温が急激に低下すると衣服内湿度が高くなり、これを吸湿した繊維が昇温する。このような緩衝効果は、吸湿性が大きい繊維程大きい。雨にぬれたような場

第12図



合にも同様な事が言える。このような事を考えてみると、肌着には親水性の大きい材料が好ましい。一般には羊毛と木綿が考えられるが、その優劣についてはいろいろの意見がある。しかし私共の実験から得た結論は、

① 繊維間隙の空気が追出され水で満たされると水の熱伝導率は0.0014で空気の0.000056(cal/cm²/sec/°C)に比べて、著しく大きいので甚しく体温をうばう。木綿は繊維表面が親水性なので、繊維間隙が水で満たされるが、羊毛は繊維表面に疎水性のスケールがあるので、繊維間隙が水で満たされ難く、またぬれてもへしゃげないので、ぐっしょり濡れたようでも保温性が大きい。

② 飽和吸湿量は木綿でも羊毛でも大差ない。羊毛は吸湿性が大きく、そのために肌がぬれぬと言うのは誤りである。

③ 水につけて引上げたような時の最大吸水量は、木綿が著しく大きい。これは繊維間隙も水で満たされるためであろう。

④ 羊毛がすぐれているのは、繊維内部に多数の細胞を有し、その細胞内に水を包蔵する能力があり、しかも繊維間隙には水を保たず、さらに湿潤によって弾性を失う事がないのによるものであって、このような繊維は他に類別がない。

⑤ アクリルは羊毛と湿潤時の見かけ上の性質が非常に似ているが、水分は殆んど繊維間隙の繊維表面上にあり、このため水にぬれ易く、水を誘い吸い込み易い一見疎水性の如くで実は水を吸う。羊毛は親水性の如くで、実は水を吸わない。このような理由によって、肌着には羊毛が適している。

次に重ね着の中層であるが、これは保温層であるべく軽くても厚いものである事が望ましい。羽毛服や、ラフな厚手のアクリルや羊毛のセーターなどがこれに適している。しかしこの層の空気が風によ

って乱されると、保温能力は著しく低下する。そのために、表面（外層）になるべく風を通さない衣服を用いねばならない。防風衣はこのような役目のものである。

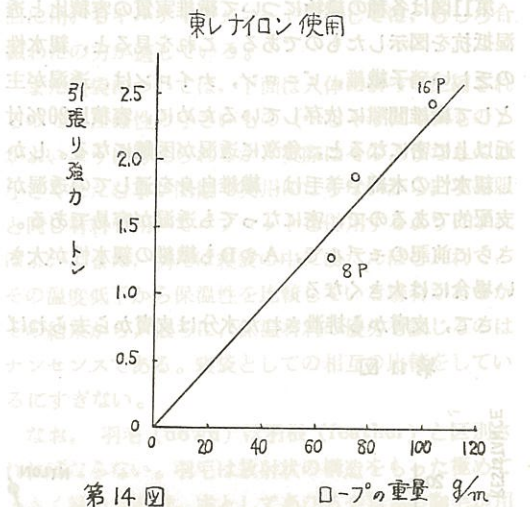
さてこのように考えると、結局衣類として純毛メリヤスのやわらかい薄手のトックリシャツを肌に着て、次に羽毛服を着て、その上に防風衣を着ればよいことになる。フランスのマカルー隊の衣服は、上下続きのジャージ肌着の上に羽毛服を着ただけのものである。このような重ね着のやり方を私共はマカルー型と呼んでいる。これに対してイギリス人や日本人は、どうもカッターシャツが好ましい。これを着ないとどうも体にしまりがなく、ポケットが便利だとかいろいろと理屈があるようだけれども、結局は習慣から逃げられないのではないだろうか。第13図はデュボンの研究者等が測定した人体の皮膚の伸び率を示している。このように大きい伸びに対して織物は不適當であって、メリヤスの利用が合理的である。そのような意味から考えても、フラーのシャツはあまりすぐれたものとは考えられない。これから日本の山でもラクダシャツ、ウールポロシャツ、アクリルセーター、キルティングコートというような型の重ね着が試みられてもよいと思われる。

17. 登山用ロープ

一般に登山用ロープは3本のS撚りのストランドをZ撚りしたものが用いられているが、これはキンクを起し易い。キンクとは巻いたロープをほどく時に、撚りが一か所に集中して折れ目を生じたもので、そのまま荷重がかかると簡単に切断する。その事は農夫や運送店の人がわら縄を切るのに利用している。このような危険を避けるには編みひもを用いるとよい。京大ではナイロンザイル切断事件の頃から登山用ロープの研究をして、その結論から編みひもを用いるようになった。このような登山用ロープは、ヨーロッパでは用いられていたものであるが、日本では珍しい。編みロープには、このようなキンクの問題の他にもいろいろとすぐれた点があるが、欠点もあってその特質をよく知っておく必要がある。編みロープの長所の一つは軽い事である。例えば、ナイロン6の径11ミリの8ツ打ちロープ(A)は65g/mぐらいである。これに対して、同じ径の撚りロープ(B)は74g/mである。1mについて10g軽いとすると、30mでは300gとなり無視できない。

しかしよく考えてみると、同じ径で軽いと言う事は断面を通っている糸の実質的な太さが細いという事であ

ある。つまり空間が多く粗だという事である。従ってロープとしての強力は当然弱い事が予想される。実際に引張り強力を測ってみると、例えば(A)は強力1282kg伸度47%、(B)は強力1880kg、伸度42%ぐらいである。ロープの重量と強力の間には、ほぼ第14図のような関係がある。



第14図 東レナイロン使用

係がある。このように8P（編みロープの様式の一つで京大型のもの）は3つ撚りの普通の登山用ロープよりも弱く、例えばチョゴリザ隊のものは1072kg、サルトロカンリ隊のものは1196kgであった。一般に10~11ミリのナイロン6製で、1トン~1.3トンぐらいの引張り強力と考えてよいだろう。これに対して3つ撚りロープは、同じ太さのもので1.8~2.2トンぐらいの強力があり、ほぼ1.8倍ぐらいの強力があると言ってよい。参考までにマニラ12ミリ3つ撚りロープは1430kg伸度13%ぐらいである。つまり、京大型のナイロンロープは普通のマニラ麻ロープよりも弱いのである。

ところで、仮に体重60kgの人間を静かにぶら下げるとすると、強力4g/denのナイロンの太さが必要である。ナイロンの比重を1.14とすると、それは直径0.14cmに相当する。結局静かに使うのなら、登山にはせいぜいナイロンの2ミリぐらいの繊維で充分である（この事は、万一にも長いロープが必要な時には、登山用のロープをほどいて細く分けてつなぎ合せればよいという事を教えている。）それならば何故に10~11ミリ（ソ連では12ミリが普通である）のロープを用いるのかと言うと、まず握るのに都合のよい太さが大体10~11ミリぐらいであると言う事である。これより細いと確保のときに肩にくい込むという事もある。それからもっと大切な事は落下時の衝撃に対して耐える能力や、岩角に当たって磨耗されたり、岩にくい込んだりする事を考えに入れて、この程度の太さが経験的に適當だということであろう。

衝撃的な荷重に対しては、例えば岩角からたがした3.5メートルのナイロン11ミリ、3つ撚りのロープに

第7表

	スワート隊		チョゴリザ隊		サルトロ隊	
	強力	伸度	強力	伸度	強力	伸度
未使用	1518 kg		1072	48.8	1196	104.0
帰国後	1070	64.3	908	52.8	683	74.0

使用経過はサルトロ隊のものは1日6時間×30日であった。

18. あとがき

高所登山の準備をするときに、予備知識を得るのに参考になりそうな事項を書き並べてみた。さらに詳しい細部についてや、テントや衣服のデザインのの問題などについても記したいのであるが、次回にゆづる事とした。またこれまでにAACKの多くの人々の協力によってヒマラヤ遠征の度毎に集積されたデータの総合といった事もいずれ近い機会にしなければならないと思っている。編集者の平井氏から与えられた題目にふさわしいものであったかどうかを憂えるが、若し少しでも会員のお役に立つ事があったら幸いである。しかし、なにぶんにも間口の広いいわば雑学であり、私自身の不勉強のために、それぞれの専門家が読まれておかしい点もあろうかと思われる。後学のために御批評を戴けたら大変有難いと考えている。

なお、原稿の整理は山の仲間である庄司政子嬢が引受けて下さった。厚く御礼を申し上げます。

最後に、参考にした図書と文献を記しておく。

- 1) V. ポリツフ, O. ゴルロフ共著, 金光不二夫訳: 人間の宇宙生活, 理論社
- 2) ジャック・ギエルク著, 北博次訳: 高々度における生体, 白水社
- 3) 畑中武夫著: 宇宙空間への道, 岩波新書
- 4) 久野寧著: 汗の話, 光生館
- 4) 大村泰男, 川久保瑞男, 大島正光共編: 宇宙医学, 南江堂
- 5) 自然, 1963年2月号, 1964年2月号。
- 6) メイスン著, 田辺言計, 望月達夫訳: ヒマラヤ, 白水社
- 7) G.O. デイレンフルト著, 諏訪多榮蔵, 横川文雄訳: 第3の極地, 朋文堂
- 8) ジョントント著, 朝日新聞社訳: エベレスト登山, 朝日新聞社
- 9) チャールズ・エプアズ著, 島田巽訳: カンチェンジュンガ, 朝日新聞社
- 10) W.H. マーリ著, 山崎安治訳: はるかなるエベレスト, 二玄社
- 11) 安田武: ヒマラヤ登山の繊維装具について, 武庫川女子大紀要 4269 (1957)
- 12) ク: ヒマラヤ登山と繊維(1)

高分子 6 274 (1957)
 13) ク : ク(2) 高分子 6 383 (1957)
 14) ク : 高所用衣服の研究
 武庫川女子大紀要 5 341 (1958)
 15) ク : チョゴリザ登山の繊維装備について
 ク 6 225 (1959)
 16) ク : ク 織学誌 15 228 (1959)
 17) ク : 冬山登山の繊維装備, 山と溪谷社, 登山
 講座 5 (1959)
 18) ク : ヒマラヤ登山の繊維装備, ク, 6 (1959)
 19) ク : 高所衣服の試作研究
 武庫川女子大紀要 7 201 (1960)
 20) ク : 繊維と登山の発達染色
 染色研究 4 27 (1960)

21) ク : 登山用の繊維
 繊維月報 6号 (1960)
 22) ク : チョゴリザ登山隊の繊維装備について
 (帰国後の検討) 武庫川女子大紀要 8 311 (1961)
 23) ク : ヒマラヤ高山中における合成繊維の異常
 劣化について 織学誌 17702 (1961)
 24) ク : ふとん綿の性能について
 消費科学 3 310 (1962)
 25) ク : サルトロカンリ登頂 (装備と合成繊維,
 合成樹脂) 樹脂加工 11号 (1962)
 26) ク : サルトロカンリ登山隊の繊維装備につ
 いて 武庫川女子大紀要 10 (1962)
 27) ク, 平井一正 : 繊維の高所劣化に関す
 る報告 武庫川女子大紀要 11 S47 (1963)

新刊紹介

「Red Peak」 by Malcolm Slesser, p. 256,

Hodder and Stroughton Ltd., 1964.

s. 30 (¥1500)

田 附 重 夫

英ソ合同遠征隊の個人的な記録と云う副題がつけられている。英ソ合同と云うのは初めての事であり、目的的地であるパミールは1928年に独ソ合同探検隊が訪れて以来、外国人には閉ざされた地域である。マルコポーロが初めてパミールについて記述してから長らく忘れられていたパミールも19世紀となりインドより北上する英国と南下するロシアの勢力の接点として注目を集めた。Younghasband の肝入りで1895年にロシア領のパミールと英領のインド(現パキスタン)の間に廊下状にアフガニスタン領を入り込ませて英ソ間の緩衝地帯とする現在の国境が人為的に定められた。このいわく付の地帯からソ連は外人探検家をシャットアウトするかたわら、自分達で営々と探検、登山を続けて最高峰Pik Communizia (7495m) は1933年に登られてしまった。ソ連の山の名は政変の度に変わるので覚えにくい。このピークも Fedshenko Garmo Pik Stalin →Pik Communiza と名が変わっている。1957年までに7000m級は全て登られ、今では6000m級にも未登峰はない。

登山そのものの興味以上に如何にして英ソ合同探検隊が成立したか、さらに国情も背景も異なる英ソの登山家が一本のザイルに結ばれたとき如何に行動するかと

いう描写が面白い。personal account と銘打っているだけに Slesser の記述は歯に衣を着せぬ卒直なものがある。今後、AACKがソ連や中国のような共産圏の国々と Joint をする場合は良い参考となるであろう。発端は気の合った2人のスコッチがホームランドのスコットランドの山に遊んだ時、たまたま語り合った計画である。丁度英国を訪問したソ連の登山家と2人のスコッチ(Slesser と Bryan)が接触を持ち話が動き出す。このまままとまれば全く同志の結合に基く英国式小遠征隊という事になるのだが、英国側でもJohn Hunt を旗頭としてパミールに行こうと云う動きが起っていた。英国とスコットランドの関係はスコットランドは英連邦の内にあるが英国ではないとスコッチ達は考えているほど奇妙なものである。勿論、法律的には英国人であるがマリア・スチュアート以来の国民感情としてスコッチは英国人と張り合う気風が残っている。登山についても同じで Slesser 達は Scottish Mountaineering Club (SMC) を背後に、Alpine Club (AC) はSir J. Hunt を押立ててパミール遠征隊のアプリケーションを競願した。二つの隊に許可が下りる望みはなく、結局はSMCとACの合同で組織された12名の隊に Permission が来た。さて、問題はややくしく

なりSMCとACの主導権争いが始まる。ACには Hunt という切札を有する強みでSMCより予定されていたメンバーは次々と外されてしまった。「自分が個人的に良く知っている者しか入れない」と Hunt 隊長が主張し、二つのクラブの joint ではあっても個人的連結の強い隊が出来上った。ここまで漕ぎつけるまでに Slesser 達は大変な苦勞をしている。ロシア語を一字も知らない連中が集ってパミールの文献を「Rの裏返しNのさかさま……」と云う調子で辞書を繰り繰り読んでいる。

1962年6月モスコウに入った12人の英国隊には Hunt 以下 W. Noce, Joe Brown などの著名の登山家が含まれていた。6人のソ連側隊員が加って TalikistanのDushanbe を経て Garmo 氷河に入る。

英国側は登山も登山だが広く歩きたいとの希望を当然もっている。しかしソ連政府の禁足命令は厳しく不必要な道草は一切許さない。滞在期間も7月1日より9月3日までと明記されている。キャラバンさえも必要とあってヘリコプターの使用を強要される。要するにソ連側にとっては登頂すること即遠征隊の成功である。何のことはない、我々が西イリヤンの遠征で経験したインドネシアの考え方と同じではないか。四発の輸送機でBCに食糧投下をやった西イリヤン隊よりむしろ、この遠征隊もポーターが使用出来ないと云う理由もあって氷河までヘリコプターで物資輸送している。費用は英国側が払わねばならないのだから個人負担を主にして成立している貧乏な英国隊には大変な予算超過になった。

隊は3パーティーに分けられ各々は英国人4人、ロシア人2人から構成された。SlesserやBryan の属した隊は最初小さいピークに行く事にきまりソ連側の隊員は不満顔である。英ソ合同遠征隊のソ連隊員は400人の応募者の中から選抜された大変なエリートであって Slesserのパーティーに入った隊員も今や Master of Spotを授与されればかりで一ツ高峰を登ればそれが現実になるのである。露骨に栄誉と結びついた登山をす

るソ連隊員には6500mそこそこの山に登るのは時間のロスと云う事だろう。最初に登った Pik Patriot (~20000ft) は技術的に極端に難しい所はないが凍った氷の斜面にうすく積った軟雪に悩まされている。

ソ連の登山は個人プレーを許さず計画通りに行動する。例えばアタック隊は引返す時間がきめられていて Pik Patriot の第1回アタックも頂上直下わずか~300ft位で約東の午後3時になって引返している。英国人なら、また日本人でもビバーク覚悟で押すであろう。

ソ連側隊員が英国側を批判して「お前達はなぜもっと助け合わないのか。単に楽しみだけではさらに高い山に登れないぞ」、次に最高峰のPik Communiziaに登った時は「英国人はデカダンスの割には良くがんばる」。個人山行の延長として合同遠征隊を考えている英国と団体登山と割切っているソ連では出発点から異っている。どちらが本来の登山かと云う論議をしても結論は出ないがこの遠征の結果から見るとソ連方式が安全性が高かったと云えよう。英国側はNoyceのパーティーで Pik Garmo のアタック中滑落事故を起して NoyceとSmithの2人が死亡している。Noyce らが無理なアタックをした結果、疲労によるものと云えよう第1回の登山で Pik Noyce や Pik Garmoに向った。時は英国側に著名な登山家が多い事もあってソ連も英国方式と云うよりも国際的に採用されているヒマラヤ登山の方式に従って2名でアタックする事に同意したそれがNoyceらの遭難以来英国方式の旗色が悪くなり第2回のPik Communizia 登頂の時は完全にソ連方式に振廻されて8人でアタックしている。

この記録を読んで思う事は言葉も充分に通じない両国の隊員が同じテントに住み大過なく登山活動を行った点である。政治体系が異なり登山の目的に差があるにせよもっと根本の文化的背景が英ソ共に西欧圏に属して似ている事が英ソ両隊員の融和に役立っているとの感が強い。

会員紹介

安田 武氏

かつて、チョゴリザ成功は、化繊部隊の勝利だなどとジャーナリズムにぎわしたことがある。チョゴリザに限らず、ノジャックでも、サルトロカンリでも、たしかに優秀な装備が、成功の大きな要因となった。そのかけの立役者がここに紹介する安田さんである。

安田さんは謎のような人物だと云われることがある。なぜか。まず、本時報の彼の論文、繊維装備の基礎知識、を読んでいただきたい。この人の出身学部がわかるだろうか。

なんとおどろくなかれ農学部林学科の卒業である。しかしその化学繊維に対する造詣の深さは専門学部の卒業生でもおよぶところではない。これがまず正体がわからないといわれる第1の要因である。

いま、彼は武庫川女子大学の教授である。同大学卒業生たちにきいても安田先生はまじめで、授業熱心でしかも純情かれんで……と大層評判がよい。しかし、たとえば笹ヶ峰ヒュッテの近くにたてられた同女子大山岳部の、ピンクのカーテンのはりめぐらされた小屋の中で、10人程のうら若い女性にかこまれてひとり生活していても、あまり心に動揺を感じないというのは女性に対して何か考えるところがあるのだろうか。それとも家庭の事情か、惜しむらくか、あるいはうらやむべきか、とにかくいまだ独身である。これが謎につつまれた第2の要因。

第3の要因は……とかけばいくらでもあるが、実際のところ、謎めいているというのは、安田さんのおいたちとか山登りなどを語ってくれる先輩が身近になかったためである。しかしこの人ほど、何かにつけて後輩のめんどろをよくみてくれ、AACKの若い者と一緒によく冬に、夏に山登りをする人をほかに知らない。

樋口 明生氏

樋口、つまりジャンについては、おもしろいはなしがはいてすてるほどある。ただ残念なことに、こういうはなしはしたいここに書くにはあまりにもバカバカしいものであって、たとえば彼の発明した「ユビのアナニシリツコンデ……」という呪文のごときもの

遠征のときの装備の準備では全く神様のような存在であり、また、山での肌着にはなぜウールがよくて化繊がわるいかとか、なぜヒマラヤで使ったザイルは絶対に内地では使えないか、などということを科学的に説明してくれ、事故を未然に防ぐのに大いに貢献している。



自分でデザインし、製作した衣類は、必ず一度は山で使ってみたり、羽毛服の吸水性をしらべるために、羽毛服をきたままフロに入り、危うくおぼれそうになったりしたこともあるような実証主義者。その意味では本当の自然科学者だが、26才のときに父君の人絹工場を、反対をおしきって化繊工場にかえたあたり、なかなかの先見の明と、

経営者としての才能ももっている。

京都一中時代、今西、梅棹先輩らの大興安嶺探検の話に感激、山にとりつかれ、旧制新潟高校時代は、水晶尾根から飯豊山の冬期初登頂などをはじめとし、東北の山に多くの足跡を残している。また数年前は、探検部をひきいて知床半島の学術調査を行ない、地図にない池を発見して平沢池と名付けたりするなど、山や探検に関してもその活動範囲は広い。

安田さんが、戦後はじめてのヒュッテ係であることを知る人は少ない。敗戦の混乱で、先輩の残した記録も少なかった当時、笹ヶ峰ヒュッテの話をきいて、木原先生などと高橋夫人に交渉し、ヒュッテを再開もっていった功労者である。

このように、めだたない、えんの下の力持ちのような仕事を着実に、誠実に推進してゆく力を十二分にもっている人だけに、その力を発揮してもらうためにも今後おおいにその活用する場所をもってもらいたいと願うものである。(平井一正)

があつてかなり流行したのであるが、あんなものはいくらなんでもAACK時報に書くわけにはいかない。

しかし彼が瞬間的に思いつくナンセンスな冗談は彼を知る上にかなり重要なのである。白出沢で、彼のま下のスノーブリッジが割れたとき、まことに奇妙な力

学の原理が働いて一瞬のうちに彼は対岸にいてニヤニヤしていた。そういう器用さは彼が冗談を思いつく能力と肉体的、心理的と同質のものであって、そういうときに、彼はまことに満足感あふれた顔をする。ついでにもう一つつまらんことを書けば彼のバカ力、たとえばゲンコツで石を割ったり、木の枝をへし折ったりする能力は、彼の人生において、物理的のみならず心理的にかなり役に立っているはずである。事実バカ力は山においてけっこう役に立つものであるし、さらに文弱に流れた現代においては、貴重なものとしなければならぬ。

彼は山で、しんどいとかさむいとかいうような文句をヌケヌケと云うことがある。荷物をかたいで登ればだれもしんどいものであるし、冬山はさむいものにきまっている。したがって人は彼をたるとると思うのであるが、これはマジメに山に登ることが彼の趣味ではないためである。そこでなんとか、楽に登る方法がないものか、と考えるのであるが、本来そんなものがあるわけがなく、ないものは仕方がないから、しんぼうせざるをえない。自らをオチメと思ひながら苦笑するだけで、ポッカ能力は体重に比例するなどという理由で荷物を押しつけられても、それほど苦にしている様には見えない。

3年前、彼を宇治の防災研究所に訪ねたとき、彼は防波堤の模型をつくってちゃちな実験をしていた。それはしろうと目にもちゃちちみえたのみならず、彼自身もあまり自信があるようにはみえなかった。なん



となくたよりなげにみえるのである。あるいはそうみせかけるのである。そこで人はこの実験結果にもついで防波堤をつくれれば台風が1回くれば、たちまちこわれてしまうであろうと思うかもしれないが、それがなにかまた特別な仕かけでもあつていまでもこわれそうでなかなかこわれないうところがみそであるということになっている。

それでもときどきムラムラとやる気を出すこともある。それは大いはいつまらんことであつて、たとえば楽に山に登る方法を思いついたとすると、彼はその実現のためにいかなる苦労もいとわぬ。理くつが合つてはないかと思うのは彼を知らぬもの云うことであつて、てういう時彼の頭の中には好奇心と欲望がみちあふれ、ニヤニヤしながら舌なめずりをする。

ファイトと云いたいところだがおよそ人がファイトをもって事にあたるときには目をつりあげてムキになるはずであるが彼がそんなつらをしたのをあまり見たことがない。だいいちムキになるほどのことはない、つまらんことにいやに熱心ではないか、と人は思うのであるが、それで万事うまく行くのであつて、ちゃんといい奥さんもらい、堤防の権威となり、アンナプルナにも登ってくる、というわけであるから、彼の人物を紹介するにあたって、あまりだまされんようにAACK会員諸氏の注意を喚起する次第である

(広瀬幸治)

AAACK蔵書目録—その3—

<単行本>

- Noyce, W., et al.; Snowdon Biography,
J.M. Dent & Sons LTD (London) 1957, p. 194
- Dufek, R.G.J.; Operation Deep Freeze,
Harcourt,Brace & World, INC. (New York)
1957, p. 243
- Mulgrew, P.; I Hold the Heights,
Double Day & Company, INC., (New York)
1965, p. 203
- Newby, E.; A Short Walk in the HINDU KUSH,
Secker & Warburg (London) 1958, p. 247

(定期刊行物は前年に引き続いて購入しております)

編集後記

★時報も第5号をかぞえ、1962年の第1号から5年経過した。時報をよみかえしてみるとよくわかるようにこの間、サルトロカンリ、インドラサン、スカルノ峯、ガネッシュ等々と遠征にくれ、遠征にあげたあわただしい5年間であった。

★第1号から続いていたAAACK30年史もようやく本号で完結した。いずれ30年史を1冊の本にまとめる時の資料にでもなれば幸いである。記録の散いつをおそれて「会員の足跡」を作ってみたが、たとえどのようなものであろうとも遠征報告書というものは作っておくべきであり、またそういうものがいつでも読めるようなライブラリーがほしいということを痛感した。

★前号の本多の「AAACK解散論」に対して反論が1つしかでなかったのはさびしい。時報をおもしろくするためにも会員諸氏の活発な意見をどしどし発表してほしい。

★ながらく図書委員をしていた上尾が5月からカナダへ、また法人関係その他もろもろの仕事をよくやってくれた酒井が4月から東京へ、それぞれ移り京都の事務関係も手薄になる。若い会員諸氏のこういう方面の積極的参加を希望する。

★本号の編集は平井、谷が主としてこれにあたった。刊行のおくれたことを深くおわびする。

(平井)

昭和41年6月15日

発行所 京都市左京区吉田本町京都大学内
社団法人 京都大学学士山岳会

TEL 77-8111 内192

代表者 AAACK会長 今西錦司

印刷所 粟津印刷所

京都市下京区壬生川花屋町上ル
二筋目西入ル

TEL 35-7384

樋口明生氏

樋口、つまりジャンについては、おもしろい話はないが、すてきな話もある。ただ現金はもとに、こういう話はないに違いない。これはあまりにも、おもしろいものであって、たとえば私の発明した「トビのアナウンサー」……、という原文のごときもの

が、あつてかなり流行したのであるが、あんなものはいくらなんでもAAACK時報に書くわけにはいかない。しかし彼が新聞的に思いつくようなアイデアは、彼を知る上になりに重要なのである。……、彼の下のスノープレッションが、あつたとき、まことに奇妙な力

